

五所川原市埋蔵文化財調査報告書第31集

山 王 坊 遺 跡

- 平成18~21年度 発掘調査報告書 -

2010年3月

五所川原市教育委員会

序 文

五所川原市・市浦地区は広大な十三湖に面し、周囲には日本海に接する七里長浜の海岸砂丘や四ツ滝山・木無岳といった津軽山地の山々に囲まれた自然環境の豊かなところです。

歴史的にみると、中世に極めて発展した地域です。十三湖西岸の砂洲一帯（現在の五所川原市十三）は「奥州津軽十三湊」と呼ばれた天然の良港があり、北日本を代表する日本十指の港湾都市に位置づけられていました。ここは津軽の在地豪族安藤氏が日本海交易の拠点として繁栄を極めた場所であって、さらに十三湖北岸には福島城跡や唐川城跡など県内でも有数の大規模城館のほか、山王坊遺跡といった宗教施設など、歴史的にも貴重な文化遺産が数多く残されています。

五所川原市教育委員会では平成 17 年度に国史跡指定を受けた十三湊遺跡の保存と活用をはかるため、平成 18 ~ 19 年度にかけて「史跡十三湊遺跡保存管理計画策定事業」を実施し、保存管理計画書を取りまとめることができました。その一方で、十三湖周辺に広がる十三湊関連の中世遺跡群との関連性を捉えるため、市内遺跡発掘調査事業（国庫及び県費補助事業）として新たに平成 18 ~ 21 年度にかけて山王坊遺跡の発掘調査を推し進めてきました。本報告書はその調査成果をまとめたものです。

現在、日吉神社が勧請されている山王坊遺跡は、『十三往来』にも登場する阿吽寺があつた場所と伝えられ、古来より靈地として地域住民に畏敬の対象とされてきました。また、かつて山王坊沢一帯の開田や用水路の開削作業によって、五輪塔・宝篋印塔・板碑等の石造物が多く出土したとされ、近隣にある相内蓮華庵の境内には現在も数多くの石造物が残されています。十三湖北岸の山王坊を中心とした一帯は、津軽三大靈場の一つとされる十三千坊の伝承地であり、これまで地元住民の方々が大切に守り伝えてきたのです。

さて、山王坊遺跡が一躍注目されるようになったきっかけは昭和 57 年から平成元年にかけて山王坊跡調査団（代表：東北学院大学加藤孝教授）が発掘調査したことになります。その際には遺跡の中心部から二組の社殿列等の遺構が確認されました。年代的にも安藤氏が活躍した時代に相当し、安藤氏が庇護した神仏習合の宗教施設とみられてきましたが、遺跡全体の解明には至っていませんでした。今回の調査は国史跡指定の要件を目指すために、遺跡の範囲や構造・性格等の全体像を把握するためのものでしたが、現在の日吉神社境内の入口にあたる西側の山際から新たに 3 棟の礎石建物跡が検出されました。そのうちの 1 棟が仏堂跡とされ、神仏習合の伽藍配置が極めて良好に残る大規模な宗教施設であったことが判明しています。これは当初予想もしなかった大発見となり、史跡指定の弾みにもなることと思います。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保存に対して、ご理解とご協力を頂きました地権者の方々、神明宮日吉神社氏子・総代、地域住民の皆さま、関係各位に対して、心から感謝の意を表します。

平成 22 年 3 月

五所川原市教育委員会
教育長 木下翼

例　言

1. 本書は青森県五所川原市教育委員会が平成18年度（2006）から平成21年度（2009）にかけて実施した山王坊遺跡（遺跡番号205159）発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は文化庁記念物課、青森県教育委員会文化財保護課、調査指導委員等の指導を受けて、五所川原市教育委員会（担当：社会教育課十三渢発掘調査室）が実施した。
3. 本文は調査指導員の中で分担して執筆にあたった。なお、執筆者名は目次に記したほか、個々の論考の文頭にも付した。
4. 参考文献は脚注及び各執筆者の論考末尾に付した。
5. 自然科学的分析については、下記の機関に委託し、その報文を掲載した。
（株）加速器分析研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社
6. 本書の編集は、調査指導委員による報告書作成会議の指導を経て、十三渢発掘調査室の樺原・長利が行つた。
7. 遺構の表記・記号は次のとおりである。
礎石建物=S B、柱穴=S P、土坑=S K、炭焼窯（焚火跡）=S C、溝状遺構=S D
8. 土層の色調観察は『新版標準土色帳』（1994年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
9. 調査区の基準点は国家座標点（世界測地系）による。また、遺構図面上に表記された北方位は座標北を示す。
10. 出土遺物・記録類は五所川原市教育委員会社会教育課十三渢発掘調査室で保管・公開している。
11. 発掘調査に際しては、洗磯崎神社宮司（松橋淨嗣氏）、神明宮日吉神社氏子（総代長三上光治氏）、青森県西北地域県民局（地域整備部）、三和満氏、三和壽子氏、三和平作氏に大変お世話になりました。また、下記の関係機関や大勢の方々からもたくさんのご教示・ご協力を頂きました。
深く感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

文化庁記念物課　坂井秀彌、青森県教育庁文化財保護課　川口　潤・鈴木和子・平山明寿、
金剛山最勝院　布施公彰、八重樫忠郎、斉藤利男、間根達人、高橋與衛門、遠藤巖、山口博之、
玉井哲雄、工藤清泰、中村隼人、藤沼邦彦、若松啓文、水澤幸一、工藤　忍、中嶋友文、
鈴木克彦

目 次

序文・例言・目次

第1章 序 言	村越 潔.....	1
第1節 山王坊遺跡の伝説について		1
第2節 山王坊遺跡の調査		2
第3節 山王坊遺跡の調査に関する所感		7
第2章 調査の概要		
第1節 調査の経緯と経過		10
第2節 調査要項		11
第3節 調査の計画と方法		13
第3章 遺跡の環境		
第1節 遺跡の地理的環境	川村眞一.....	18
第2節 周辺遺跡と山王坊周辺出土の中世陶器壺類について	柳原滋高.....	24
第4章 調査の成果		
第1節 平成 18 年度の調査（第 10 次）		32
第2節 平成 19 年度の調査（第 11 次）		54
第3節 平成 20 年度の調査（第 12 次）		68
第4節 平成 21 年度の調査（第 13 次）		97
第5章 考 察		
第1節 山王坊日吉神社跡発掘調査考察	坂田 泉.....	125
第2節 SB01、SB02、SB03 碓石建物跡跡の建築史的考察	永井康雄.....	133
第3節 山王坊跡調査団による発掘出土遺物の再検討	柳原滋高.....	142
第6章 自然科学的分析		
第1節 平成 18 年度 山王坊遺跡における放射性炭素年代	(株) 加速器分析研究所	155
第2節 平成 18 年度 山王坊遺跡出土木製品の樹種	(株) 加速器分析研究所	156
第3節 平成 19 年度 山王坊遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）(株) 加速器分析研究所		158
第4節 平成 19 年度 山王坊遺跡出土遺物の自然科学分析調査 バリノ・サーヴェイ株式会社		161
第5節 平成 20 年度 山王坊遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）(株) 加速器分析研究所		168
第6節 平成 20 年度 山王坊遺跡出土炭化材の樹種	(株) 加速器分析研究所	171
第7節 平成 21 年度 山王坊遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）(株) 加速器分析研究所		173
第8節 平成 21 年度 山王坊遺跡出土炭化材の樹種	(株) 加速器分析研究所	175
第9節 平成 21 年度 山王坊遺跡の花粉分析 バリノ・サーヴェイ株式会社		177
第7章 まとめ.....		
写真図版 (1) ~ (60)		180
報告書抄録		

挿図目次

第1図 山王坊跡平面図		第37図 08-1・6 トレンチ 土層断面図	89
(『山王坊跡』1987より)	4	第38図 08-1・3・4・27 トレンチ 土層断面図	90
第2図 (仮称) 西本宮社殿跡断面図(1)		第39図 08-2・3・28 トレンチ 土層断面図	91
(『山王坊跡』1987より)	5	第40図 08-4・26・28・34・35・ 37・38 トレンチ 土層断面図	92
第3図 (仮称) 東本宮社殿跡(1)		第41図 08-5・7～19・29～33・36・ 40～45 トレンチ 土層断面図	93
(『山王坊跡』1987より)	6	第42図 08-28 トレンチ SX02 塚石遺構 平面図	94
第4図 山工坊遺跡全体図と地区別図	15	第43図 2008年度(平成20年度) 出土遺物1	95
第5図 遺跡周辺の段丘分布図	19	第44図 2008年度(平成20年度) 出土遺物2	96
第6図 遺跡周辺の礎石石材分布図	23	第45図 道構平面図6	107・108
第7図 十三渡跡と十三湖周辺の道路	25	第46図 09-1・5・16 トレンチ 平面図・土層断面図	109・110
第8図 明治崩における相内村の道路景観復元	28	第47図 09-2・20・21 トレンチ 平面図・土層断面図	111
第9図 山王坊周辺出土の中世陶器壺類	30	第48図 09-3・6・7 トレンチ 平塗図・土層断面図	112
第10図 平成18年度 山王坊遺跡(D地区) の調査位置	33	第49図 09-4 トレンチ 平面図・土層断面図	113
		第50図 09-8・9・10・11 トレンチ 平面図・土層断面図	114
第11図 06-1 トレンチ 平面図・断面図	41	平面図・土層断面図	
第12図 06-2・8 トレンチ 平面図・断面図	42	第51図 09-14・15・22・28 トレンチ 平面図・土層断面図	115
第13図 06-3～6 トレンチ 平面図・断面図	43	平面図・土層断面図	
第14図 06-7 トレンチ 平面図・断面図	44	第52図 09-16 トレンチ鉢張区 SX03 塚石遺構 平面図・土層断面図	116
第15図 06-9・10 トレンチ 平面図・断面図	45	第53図 09-12・13・17～19・23～26 トレンチ 土層断面図	117
第16図 06-11・12 トレンチ 平面図・断面図	46	第54図 2009年度(平成21年度) 出土遺物	118
第17図 06-13・15・17 トレンチ 平面図・断面図	47	第55図 SB01～SB03 墓石建物跡 抽出図	123・124
第18図 06-14 トレンチ 平面図・断面図	48	第56図 山王坊日吉神社(山王宮)配置図	126
第19図 06-16・18 トレンチ 平面図・断面図	49	第57図 山王坊日吉神社 拝殿平面図	127
第20図 06-19・20 トレンチ 平面図・断面図	50	第58図 拝殿基壇土塗め構材	128
第21図 06-21・22 トレンチ 平面図・断面図	51	第59図 「銀鹿草紙」中世の墳墓	132
第22図 06-23・24 トレンチ 平面図・断面図	52	第60図 遺跡方位真北関係	132
第23図 2006年度(平成18年度) 出土遺物	53	第61図 SB01 磯石建物の概念図	133
第24図 07-1・2 トレンチ 平面図	60	第62図 金剛峯寺本堂跡平面図	134
第25図 07-3・4・6 トレンチ 平面図・断面図	61	第63図 金蓮寺跡弥陀堂平面図	135
第26図 07-5 トレンチ 平面図・断面図	62	第64図 SB01 磯石建物跡の1枝寸法の検討	135
第27図 07-7 トレンチ 断面図	63	第65図 慶照寺東求空堂平面図	136
第28図 07-8～11 トレンチ 平面図・断面図	64	第66図 鹿鸣寺方丈平面図	136
第29図 07-12 トレンチ 平面図・断面図・ エレベーション図	65	第67図 中世の絵巻物に見られる屋根	138
第30図 2007年度(平成19年度) 出土遺物	66	第68図 SB02 磯石建物跡の1枝寸法の検討	138
第31図 平成19～21年度調査 基本層序と遺構の関係模式図	69	第69図 SB03 磯石建物跡の1枝寸法の検討	138
第32図 道構平面図1	77・78	第70図 SB01 磯石建物跡の復元案1	140
第33図 道構平面図2	79・80	第71図 SB01 塚石建物跡の復元案II及び	
第34図 道構平面図3	80・82	SB03 磯石建物跡の復元案	141
第35図 道構平面図4	83	第72図 出土遺物の地区別図(山王坊跡調査所)	143
第36図 道構平面図5	84	第73図 山王坊跡調査所 出土遺物1	143

第 74 図	山王坊跡調査団	出土遺物 2	144
第 75 図	山王坊跡調査団	出土遺物 3	146
第 76 図	山王坊跡調査団	出土遺物 4	147
第 77 図	山王坊跡調査団	出土遺物 5	148
第 78 図	山王坊跡調査団	出土遺物 6	149
第 79 図	山王坊跡調査団	出土遺物 7	150
第 80 図	山王坊跡調査団	出土遺物 8	151

表目次

第1表	山王坊遺跡の調査履歴	9
第2表	十三瀬周辺の遺跡一覧表	26
第3表	2006年度 出土遺物一覧表	53
第4表	2007年度 出土遺物一覧表	67
第5表	礎石調査表	85～88
第6表	2008年度 出土遺物一覧表	96
第7表	2009年度 出土遺物一覧表	119
第8表	同時代における方三間拝殿・	
	仏堂寸法(単位:尺)	127
第9表	SB01 碇石建物の柱間寸法の検討	136
第10表	SB02 碇石建物の柱間寸法の検討	138
第11表	SB03 碇石建物の柱間寸法の検討	138
第12表	山王坊跡調査団 出土遺物 1	152
第13表	山王坊跡調査団 出土遺物 2	152
第14表	山王坊跡調査団 出土遺物 3	153
第15表	山王坊跡調査団 出土遺物 4	153
第16表	山王坊跡調査団 出土遺物 5	153
第17表	山王坊跡調査団 出土遺物 6	154
第18表	山王坊跡調査団 出土遺物 7	154
第19表	山王坊跡調査団 出土遺物 8	154

写真目次

写真1	山王坊日吉神社 拝禮石	127
写真2	奈川市平塚熊野神社組立舞台例	129
写真3	口古人社西本宮拝殿	129
写真4	高歳守阿弥陀堂(宮城県角田市)	129
写真5	山王坊口吉神社 山王鳥居(現在)	130
写真6	山王坊日吉神社拝殿(現在)	130
写真7	山王坊口吉神社(現在)	130
写真8	高野山 奥院	132
写真9	山王坊口吉神社 奥院正面 大石段	132
写真10	金剛峯寺不動堂外觀	134

第1章 序 言

村 越 淑

はじめに

東北地方北部の中世は、津軽に本拠を置いて日本海を北は蝦夷地（北海道）から、南は日本列島の中央部を超えて、さらにその西方にまで影響を与えた安藤氏の力と活躍を無視することはできないであろう。

安藤氏は、津軽平野を北流する岩木川の下流に広がった十三湖の西に十三湊なる港湾都市を築き、北は相内地区的福島城ならびに唐川城跡を、さらに宗教施設の山王坊と、南に檀林寺・浜の明神社を建立し、日本海貿易の中心となって大きな力を誇示していたのである。

このような安藤氏によって築かれた諸施設は、近年の発掘調査で次第に明らかとなり、とくに十三湊は調査の成果を背景に、平成17年（2005）国史跡の指定を受けている。

振り返るとこれらの各施設（各遺跡）は、虚像となって人々の間に大きくなっている。調査の進展によつて次第に実像的な様相を呈するようになってきた。

なかでも国立歴史民俗博物館は、平成3年（1991）から3年にわたりて十三湖を取り巻く諸遺跡について、欠落の多い史資料の補填が困難であることを踏まえ、関連する諸遺跡の実像を考古学的な手法によって捉えることを意図し、特定研究で「日本列島内諸文化の相互交流」なるテーマーサブタイトルは、北部日本における文化交流一により、十三湊を中心に、福島城跡を含む周辺の調査を実施したのであった。

その後、平成6年より旧市浦村による調査、翌7年から青森県教育委員会も加わり、さらに富山大学の協力を受けて進められ、十三湊に関連する各遺跡は予想を超える規模を有した実状が捉えられ、なお出土遺物においても、安藤氏は豊かな経済力を有していた状況を知らされたのである。

第1節 山王坊遺跡の伝説について

山王坊に関する伝承

1) 山王坊は、安藤氏が南部氏との抗争に敗れて蝦夷地へ逃れた嘉吉2年（1442）以後は、廃墟となつて人々の脳裏から忘れ去られ、地元民はこの地における過去の繁栄を伝説的に受け継いで来たのであった。このほか山王坊に関する記録としては、天明6年（1786）に選集したといわれる『津軽俗説選』に記され、さらに10年後の寛政8年には、三河国（愛知県）出身の菅江真澄（1754～1829）が残した『外浜奇勝』なる遊覧記の6月23日の条に、山王坊なる寺跡の存在を記しており、江戸時代後期の頃には識者の間で語られていたように思われる。

1 阿弘寺之鐘声成諸行無常告、後夜晨頭之勤之声穿寂滅為樂之雲、是亦殊勝之景物也

「阿弘寺の鐘声は諸行無常の告を成し、後夜晨頭の勤声は寂滅為樂の雲を穿つ、是亦殊勝の景物なり」

2 「二十三日……瀬の沢……の奥に山王坊という寺のあともあった。そこに世間に名高い弘智法印がすんでおられ、功を上げられたのち、越後国野積という礎邊の山でさとりすまし、……岩板というところで亡くなられたが、海雲山西生寺に、いまもその亡骸が生きているようにそのままある。」内田武志・宮本常一『菅江真澄遊覧記』3. 東洋文庫 82、199頁。

2) 大正 11 年 (1922) 12 月 22 日の東奥日報に、「十三史談会創立する」の見出しで、十三湖を中心とした相内・内潟・十三の 3ヶ村の有志 10 名が発起人となって会が結成され、「凡旧記有文無年月故条理不貫事似虞偽以余觀之罪有錯非無事實」なる檄文を発し、翌年の 12 月には同会が主催して相内地方の史跡を紹介した。そのなかに「十三往来」なる伝承記があり、「阿吽寺之鐘声……」の書き出しで、35 文字ではあるが寺の鐘音による功德を簡潔に記している。

山王坊に関する記録では、さきの「十三往来」の作者とされる弘智法印を除くことはできない。弘智法印は諸国を遍歴し、阿吽寺にも滞在して「十三往来」を作文したと伝えられている。弘智法印は後に越後国（新潟県）三島郡寺泊町（現在長岡市）野積の西生寺において、貞治 2 年（1363）10 月 2 日、即身仏となって入寂したとい⁵。

第 2 節 山王坊遺跡の調査

山王坊跡は、考古学・文献史学をはじめ、地方史の研究者も注目していた遺跡であるが、この遺跡に対して学術的な調査のメスを入れたのは、東北学院大学東北文化研究所が最初であり、その調査に市浦村教育委員会も協力を行っていた。

調査は、昭和 57 年度『北方日本海文化の形成』をテーマとする文部省人文科学研究費総合 A のなかで、加藤 孝東北学院大学教授をチーフとする「津軽安東氏—山王坊跡—の調査」の目的として、中世に十三湊を本拠に活発な活動を行っていた、津軽安藤氏に係る十三湖岸の福島城跡に対し、その北方を鎮護する宗教遺跡であり、福島城を政治遺跡と捉えて終局的には両遺跡の実像の解明にあつた。

一方、市浦村教育委員会は、文化財の保護と観光開発のための史跡環境整備を含め、文化財保護法第 57 条 1 項の規定に準拠した調査を考えていた。

調査は昭和 57 年から 61 年までの 5 次にわたる事業と、昭和 62 年から平成元年に至る 6・7・8 次とに分けられる。

調査の組織と分担は、調査全体の責任者であり、考古学部門の担当者として加藤 孝教授。発見した遺構の建築史的部門は、東北大学工学部の坂田 泉助教授。歴史部門の担当を秋田大学の新野直吉教授が任に当たることとなった。

調査によって発見された遺構は第 1 図に示したごとくである。

3 註 1 に前述。

4 『青森県の地名』日本歴史地名大系 2 平凡社 1982 年 7 月刊。567 頁。「阿吽寺跡」の項にある。

5 このほか、東奥日報の大正 12 年 7 月 7 日（夕刊）の一面に、「十三往来記者山王坊の経歴」という一文がある。

豊尾頼教の『日本伝家人名辞書』東出版 1996 年 6 月の 385 頁にある「弘智」の記事より詳しいので、新聞の記事を紹介する。「下總国香取郡祇木の郷山桑村児玉氏眞諦と称へたるも弘智法印名也。初め蓮華寺に住し具戒

修學の後南渡の地を尋ねて諸國を偏歴して奥州出羽に来る晩年越後国三島郡野積村海雲山奥の院 不動滻岩坂に庵を結び遂に即身成仏の小現を為し貞治二年壬卯（「癸卯」が正しい。）十一月二日 辞世巖板のあるじは誰と人間ど、墨絵に書きし松屋の音其成仏の体其體にて今もがん中に納む。

越後辺の実話に依ると三島地方は一般に弘智縁と申して命日には遠国より遙々参詣するもの多しと（以下略）

なお同様の記述は『郷土史相内村』（年代と作者不明）にもある。

第1年次の調査（昭和57年度）

第1図にある北側の山腹において、高位置にある本社殿跡（奥の院）・広庭跡・石組階段跡・門または大鳥居・後拌付拌殿跡（SB09 磐石建物跡）、（仮称）西本宮社殿列跡と称する遺構群を発見（第2図）。

第2年次の調査（昭和58年度）

前年度発見の（仮称）西本宮社殿列跡の各遺構と、新たに調査に入った（仮称）東本宮社殿列跡の方位が異なるという指摘がなされ、新たにグリッドを設定し、その方位に合わせて磐石の配列確認を行った。また他の道県に所在する関連遺跡の調査を実施した。

第3年次の調査（昭和59年度）

安東氏関係の調査を実施。福井県小浜市、滋賀県大津市、秋田県秋田市、同県能代市、青森県深浦町等。

第4年次の調査（昭和60年度）

第1年次に発掘した（仮称）西本宮社殿列跡の東約20mに磐座を発見し、磐座から方位の延長線上にある（仮称）東本宮社殿列跡の石組・舞殿風拌殿跡（SB05 磐石建物跡）の一部を発掘する（第3図）。なおこれら西・東の本宮社殿列の建物跡は、ともに火災の被害を受けた痕跡がある。

第5年次の調査（昭和61年度）

（仮称）東本宮社殿列跡の西端前方の石組溝跡・渡廊跡・大型寺院風拌殿（SB06 磐石建物跡）・舞殿風拌殿跡（SB05 磐石建物跡）・本社殿跡（SB04 磐石建物跡）・広庭跡・瑞垣跡・石組溝跡（07-8トレチ）、（仮称）西本宮社殿列の本社殿跡（奥の院）社壇などを第4・5次に統いて発掘する。

第6年次の調査（昭和62年度）

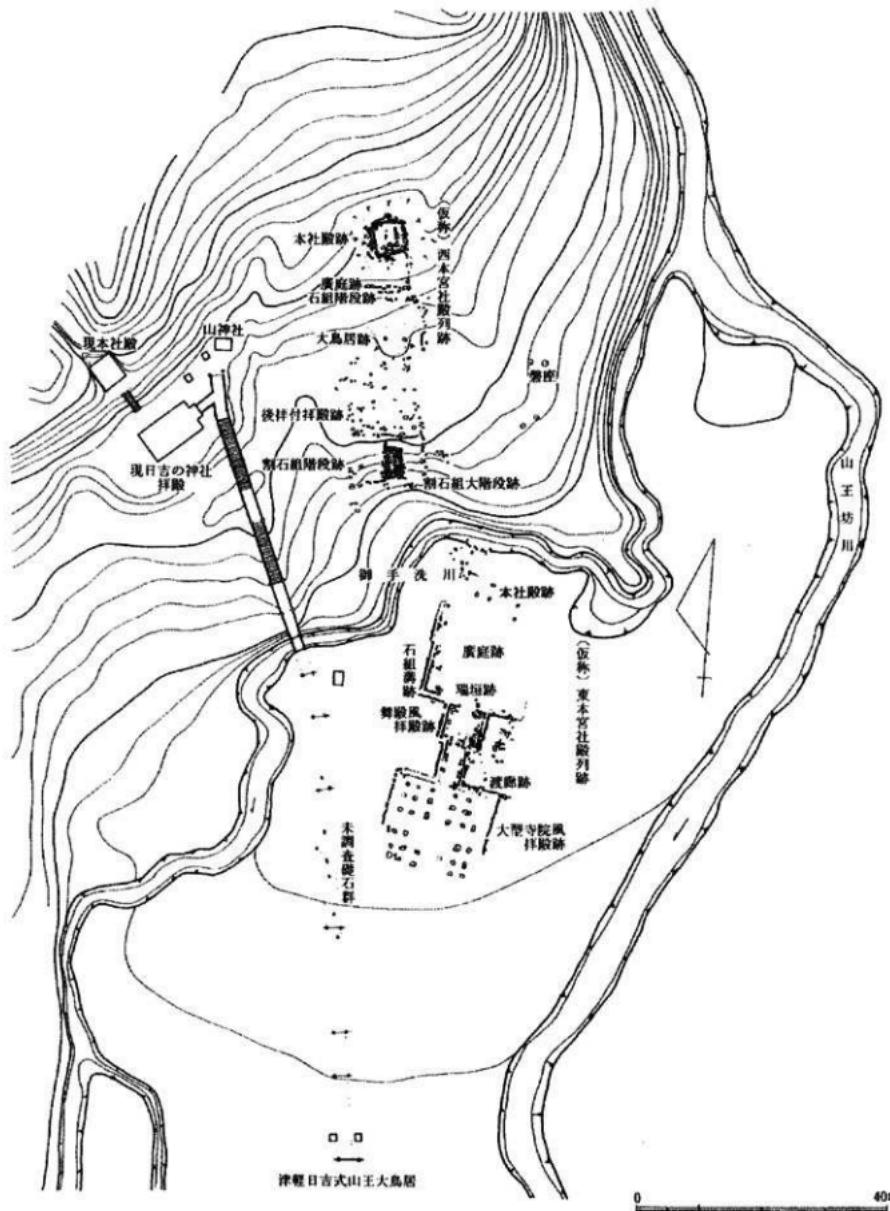
楼門跡（南大門跡）・玉垣跡（大垣跡）のほか、西大門跡を発見。この大門跡について「楼門跡と等寸である。その版築上（状ではないか）の固めの上に磐石を置く構造で、様式の構造とは、寺院風拌殿跡・舞殿風拌殿跡・（仮称）東本宮本殿等に見られる磐石の有り方と同様であり、上部の諸建物と同時に建造されたであろうとし、間尺にも共通性がある。」この説明から見ると、磐石の安定のために、幾種類かの方法を用いていたようである。

第7年次の調査（昭和63年度）

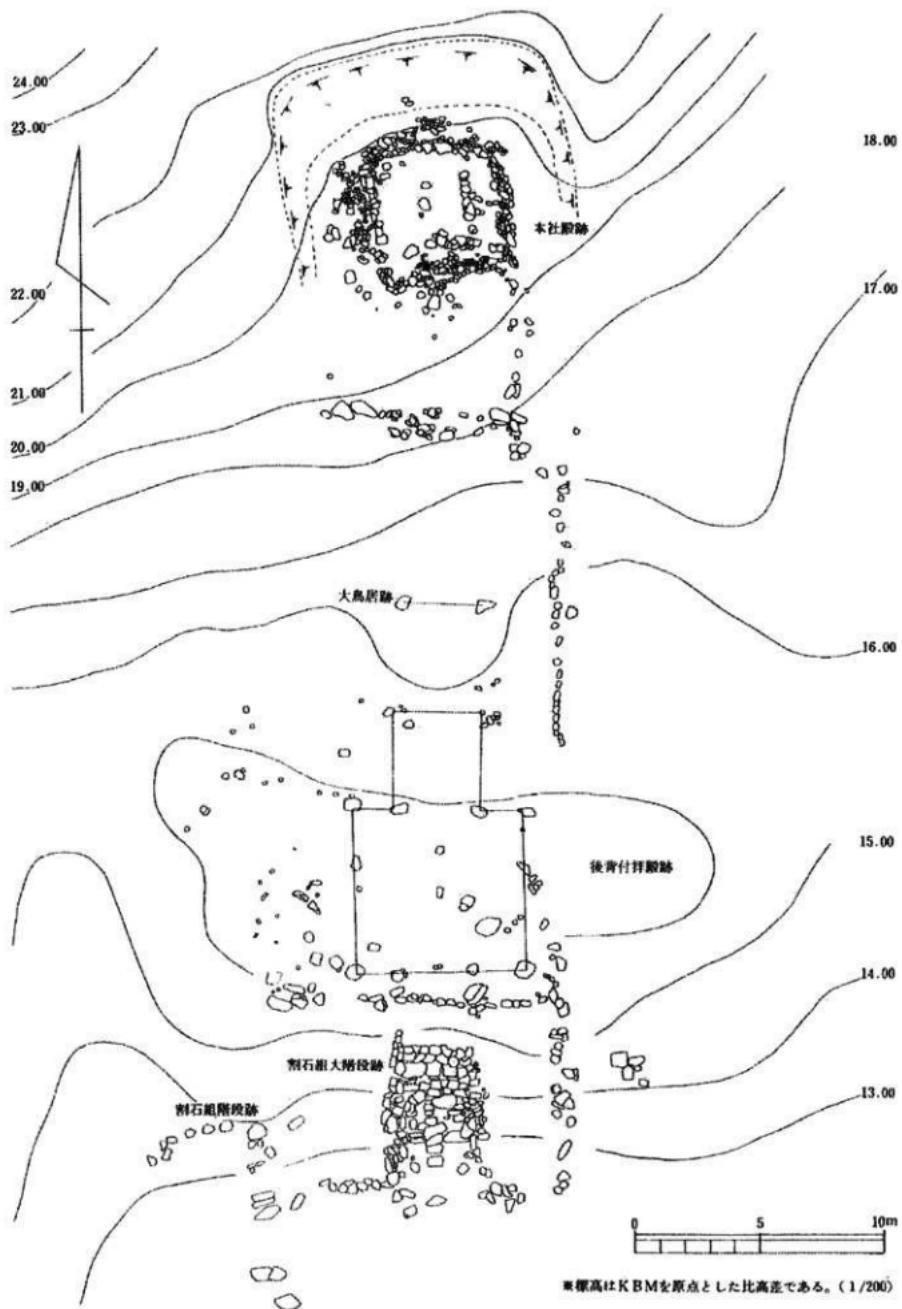
（仮称）東西本宮社殿列跡の周辺に見られる建物跡の調査を実施した。

第8年次の調査（平成元年度）

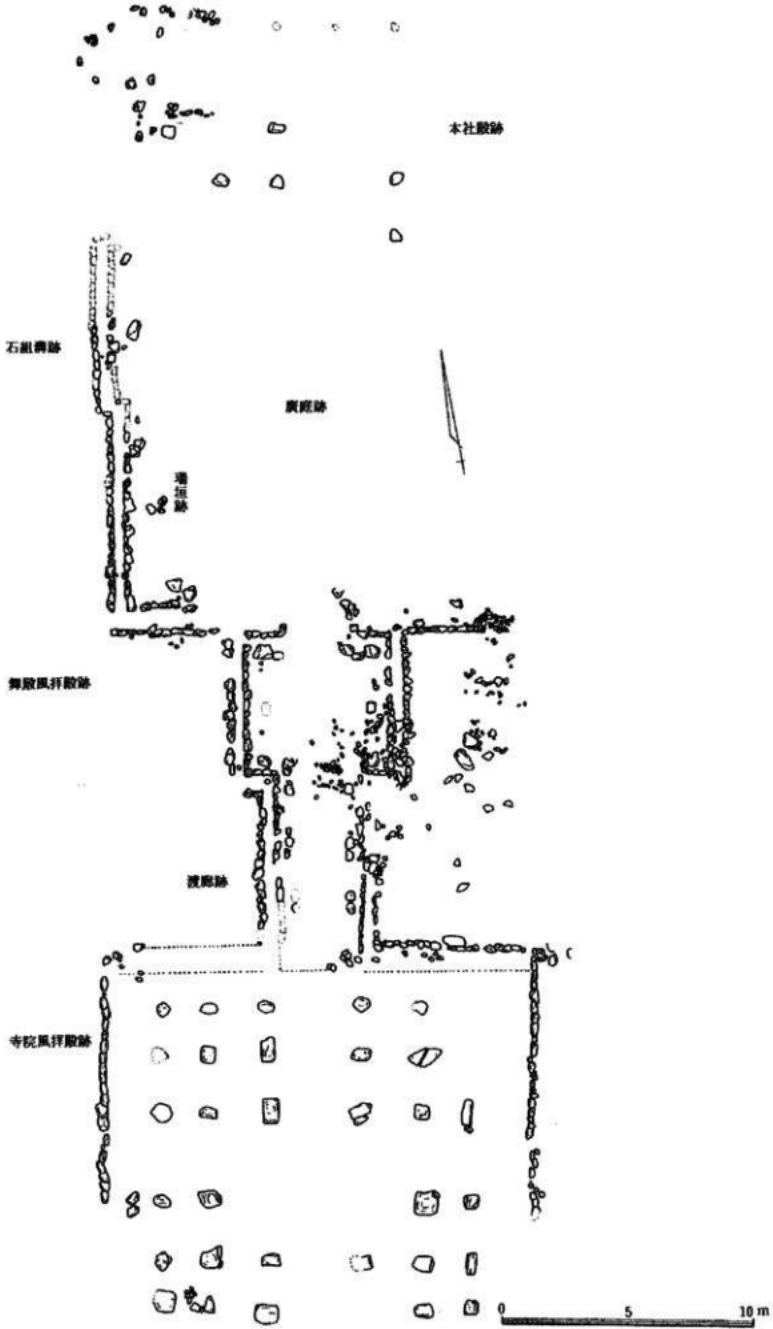
平成元年度には、調査期間を10月30日から11月5日に設定し、拌殿跡周囲で発見した炭化物の実測とその収集に続き、山王坊跡調査の総括を行った。



第1図 山王坊跡平面図 (『山王坊跡』1987より)



第2図 (仮称) 西本宮社殿跡平面図(1) (『山王坊跡』1987より)



第3図 (仮称) 東本宮社殿跡 (1) (『山王坊跡』1987より)

また、発掘調査と併行して、第2年次には山王坊跡の測量・作図を、第5年次調査では当遺跡から出土したと言い伝えられる、相内の蓮華庵が保管する宝篋印塔などの石造物、骨蔵器の実測・撮影を実施している。

第3節 山王坊遺跡の調査に関する所感

十三湊遺跡を中心とする十三湖周辺の遺跡は、研究者はもとより、歴史に関心を抱く地元民によって古くから遺物の収集は行われていたが、学術的な調査には至らず、十三史談会の郷土愛の熱意に託し、次第に年月の経過は会の創立時の人々を失うにつれてその活動は頓挫するようになった。

しかし、地方史の研究者のなかには、日本海をわがもの顔に勇姿した安藤氏について、かつての霸者、または英雄に対するような心情を抱き温めて来たような思いが強かったのである。時代を古代から中世に絞ると、十三湖北側の学術的調査を行ったのは、昭和30年（1955）の東京大学東洋文化研究所による「東北地方における館址調査」の一環として行われた福島城跡に対してであった。

山王坊遺跡は安藤氏に対する人々の関心の高さに比較しながら、まったく逆に荒廃の一途を辿り、日露戦争後に植林したという杉の巨木が林立し、昼なお暗き状況となっていた。県道の大鳥居をぐぐつて山王沢に沿いながら進むと、津軽日吉式山王大鳥居なる第2の鳥居に達するが、その参道の右側に地蔵尊が安置されており、かつてはこの付近に福井県産の日引石で作られた宝篋印塔などの破片が山積みされていたと言われ、一現在その破片は蓮華庵を経て、市浦歴史民俗資料館に保管展示されている。さらに大鳥居をぐぐつた境内には、往時の豪壮な社殿を窺うこと示す礎石群を見ることができる。

昭和57年（1982）から行われた東北学院大学の調査は、大鳥居を超えた参道の東側を主に調査し、本社殿跡（奥の院）から南に連なる（仮称）西本宮社殿列跡や、御手洗川の左岸に（仮称）西本宮社殿列跡と方位を異にする（仮称）東本宮社殿列跡に包括される各社殿・階段・広庭などの諸施設を発見し、その諸社殿は南部氏の進攻によって焼失し破壊されていたが、その規模と各建物の跡を見ると、安藤氏の信仰心とその背景にある経済力に改めて驚きを感じ、さらなる裏付けとして若狭国小浜に、文安4年（1447）に再建した羽賀寺の例も、その力の一端を示すものと考えることができる。

東北学院大学と旧市浦村の調査は8年を経て平成元年（1989）に終了したが、なお御手洗川の右岸をはじめ、現在の日吉神社に至る参道を超えた地区や、磐座跡より（仮称）東本宮社殿列跡の延長線上に、社殿ならびに関連する諸殿跡と考えられる第1～3の建物が、廊のようなもので接続していたか否かは、今後の調査に委託する形となっていた。

いずれにしても8年間に及ぶ調査は、山王坊遺跡の主要な地域であることを示し、15世紀半ば以前の当地に設置されていた社寺の実像を現わしたものとして注目されよう。しかし発見されていた礎石群や地形的に平場とされる地区について、なお建造物の構造等は当時の調査である程度想定されていたが、その後に開始された十三湊遺跡の調査に注意が向けられ、続く檀林寺跡等の調査終了を経たのち、十三湖北岸にある唐川城跡が、富山大学によって平成12年と翌年にかけて調査され、引き続いて福島城跡が、平成17年（2005）から5ヶ年をかけ、青森県教育委員会によって発掘調査が行われるなど進展したが、山王坊遺跡の解明は、その必要性を認めながらも年次送りになっていたのである。しかし十三湊を中心とする調査は、中世における当地域の様相を明らかにする道を開き、北日本の中世史に果たした功績は大きいであろう。

山王坊遺跡も幸いに市教委により、さきの東北学院大学の調査以後年数を経たが、実像の解明を目的に発掘調査が進められ、社殿跡などの遺構の存在が想定される地区と、以前の調査で未解明であつた遺構の再調査を、平成 18 年から地元民や研究者の希望に対して実施され、その功績は津軽を中心とする中世の歴史的変遷の解明に寄与するとともに、山王坊遺跡も十三ヶ遺跡に統いて国史跡の指定を受け、十三ヶ遺跡を拠点に活躍した安藤氏を核にし、津軽はもとより北日本における中世を構成するに不可欠な資料として、遺跡整備を進行させ、大切な歴史遺産として保存し活用することを願っている。

引用参考文献

- 1) 加藤 孝 1984.11 「津軽安東氏（山王坊跡）の調査」『東北学院大学 東北文化研究所紀要 一特集 北方日本海文化の研究』16
- 2) 加藤 孝 1986.7 「中世津軽十二ヶ日吉神社（仮称）東本宮社殿列跡考（その一）－青森県市浦村山王坊跡の考古学上の調査－」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』18
- 3) 加藤 孝 1987.8 「中世津軽十三ヶ日古ノ神社（仮称）東本宮社殿列跡考（その二）－青森県市浦村山王坊跡の考古学上の調査－」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』19
- 4) 加藤 孝 1988.8 「中世津軽十三ヶ（山王坊）－昭和六十二年度考古学上の調査・研究－」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』20
- 5) 加藤 孝 1989.8 「中世津軽安東氏関係遺跡の研究－特に昭和六十三年青森県北津軽郡市浦村（山王坊跡）の考古学的調査－」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』21
- 6) 市浦村教育委員会・山王坊跡調査団 1987（昭和 62）.3 『青森県北津軽郡市浦村 山王坊跡－昭和 57 年度～昭和 62 年度調査中間報告』北方日本海の中世宗教遺跡研究第 1 集
- 7) その他、作者ならびに刊行年月不詳の『郷土史 相内村』、『史跡案内図 相内村 山内持』
(山内英太郎氏所持のものか) が現存している。

第1表 山王坊遺跡の調査履歴

調査次数	西暦	調査主体	調査期間	調査原因(費用負担)	報告書	主な論文等
第1次	1982 (昭和 57)	山王坊跡 調査団	11/29～12/12	文部省人文科学研究費補助金による総合研究A「北方日本南文化の形成」		加藤孝・坂田泉・新野吉古 1983・3「山王坊跡発掘調査報告」「北文化」第4号
第2次	1983 (昭和 58)	山王坊跡 調査団	11/25～12/29	研究者個人による研究費負担		
第3次	1984 (昭和 59)	山王坊跡 調査団	10/9～10/13 11/24～11/26	研究者個人による研究費負担		加藤孝「津軽安東氏山王坊跡の調査」・坂田泉「山王坊遺跡の建築的復元一考察」・新野吉古「北方日本南文化と安納安東(藤)氏」1984・6「東北文化研究所紀要」第16号東北大学院大学東北文化研究所
第4次	1985 (昭和 60)	山王坊跡 調査団 発掘 (東北学院大) 測量 (東北大学)	8/6～8/11 10/23～10/31 8/9～8/10 10/29～10/31	山王坊跡調査団と旧市浦村による「安東文化のふるさと」計画事業に伴う発掘調査委託契約	昭和 60 年度調査分・事業報告書提出	加藤孝「中世津軽十一箇日古神社(仮称) 東本宮社殿跡跡考(その1) - 青森県市浦村山王坊跡の考古学上の意義」1986・7「東北文化研究所紀要」第 18 号東北大学院大学東北文化研究所
第5次	1986 (昭和 61)	山王坊跡 調査団 発掘 (東北学院大) 測量 (東北大学)	8/4～8/14 10/18～10/24 8/12～8/13	山王坊跡調査団と旧市浦村による「安東文化のふるさと」計画事業に伴う発掘調査委託契約	昭和 57～61 年度調査分・中間報告書刊行 山王坊跡調査団 1987 「青森県北津軽郡市浦村山王坊跡 昭和 57 年度～昭和 61 年度調査中間報告」刊行	加藤孝「中世津軽十一箇日古神社(仮称) 東本宮社殿跡跡考(その1) - 青森県市浦村山王坊跡の考古学上の意義」1986・7「東北文化研究所紀要」第 18 号東北大学院大学東北文化研究所
第6次	1987 (昭和 62)	山王坊跡 調査団 発掘 (東北学院大) 測量 (東北大学)	8/3～8/20 10/30～11/4 12/6～12/8 8/19～8/20 9/14～9/15	山王坊跡調査団と旧市浦村による「安東文化のふるさと」計画事業に伴う発掘調査委託契約	昭和 62 年度調査分・事業報告書提出	加藤孝「中世津軽十一箇日古神社(仮称) 東本宮社殿跡跡考(その2)」1987・10「山王坊跡発掘調査情報」「郷土誌 北文化」第 8 号。 加藤孝 1987 「中世津軽十三箇日古神社(仮称) 東本宮社殿跡跡考(その2)」『東北文化研究所紀要』第 19 号東北大学院大学東北文化研究所
第7次	1988 (昭和 63)	山王坊跡 調査団 発掘 (東北学院大) 測量 (東北大学)	8/15～8/27 10/2～10/6 8/25～8/28 11/3～11/7 12/9～12/11	山王坊跡調査団と旧市浦村による「安東文化のふるさと」計画事業に伴う発掘調査委託契約		加藤孝「中世津軽十三箇山王坊跡一昭和 62 年度考古学上の調査・研究」1988・8「東北文化研究所紀要」第 20 号東北大学院大学東北文化研究所
第8次	1989 (平成元)	山王坊跡 調査団 発掘 (東北学院大) 測量 (東北大学)	10/30～11/5 11/1～11/5	山王坊跡調査団と旧市浦村による「安東文化のふるさと」計画事業に伴う発掘調査委託契約		加藤孝「中世津軽安東氏関連跡の研究 -特に昭和 63 年度青森県北津軽郡市浦村山王坊跡の考古学的調査」1989・8「東北文化研究所紀要」第 21 号東北大学院大学東北文化研究所
第9次	2002 (平成 14)	青森県教育委員会	調査日時の記載なく不明	青森県教育委員会による試掘調査(山王坊跡特定河川等整備事業における歩道等整備に伴う)	青森県教育委員会 2003「十三遺跡調査 - 第 151 次～第 154 次調査」-1「青森県埋蔵文化財調査報告書第 355 集」	
第10次	2006 (平成 18)	五所川原市教育委員会	10/2～11/22	市内道路発掘調査事業(国庫補助及び県費補助事業)による	平成 18 年度調査分 実績報告書提出	
第11次	2007 (平成 19)	五所川原市教育委員会	10/15～11/9	市内道路発掘調査事業(国庫補助及び県費補助事業)による	平成 19 年度調査分 実績報告書提出	
第12次	2008 (平成 20)	五所川原市教育委員会	6/2～11/28 (12/1～12/8 判定)	市内道路発掘調査事業(国庫補助及び県費補助事業)による	平成 20 年度調査分 実績報告書提出	
第13次	2009 (平成 21)	五所川原市教育委員会	7/1～10/30	市内道路発掘調査事業(国庫補助及び県費補助事業)による	山王坊跡調査本報告書刊行 (平成 18～21 年度分)	

第2章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

十三湖西岸（五所川原市十三）にある十三湊遺跡は、中世後期の北日本を代表する港湾都市として、『通船式目』に記録される三津七湊の一つ「奥州津軽十三湊」に挙げられるなど、古くから知られてきた。また、室町時代には蝦夷の系譜を引く津軽の豪族安藤氏が拠点を置き、日本海交易の発展によって、津軽海峡を挟んだ北方世界と畿内を結ぶ交易拠点として、日本歴史上において重要な役割を果たした地域と位置付けられている。十三湊遺跡は平成3～15年にかけて行われた学術発掘調査の成果が認められ、平成17年7月に国史跡指定を受けることができた。

五所川原市では国史跡十三湊遺跡の保存と活用をはかるため、平成18～19年度にかけて「史跡十三湊遺跡保存管理計画策定事業」を実施して保存管理計画書を取りまとめる一方で、十三湖周辺に広がる十三湊関連の中世遺跡群（十三湊関連遺跡群と呼ぶ。）との関連性を捉えるため、新たに平成18年度から国庫及び県費補助事業（市内遺跡発掘調査事業）として十三湊関連遺跡群の調査研究を推し進めることとなった。

当初、平成18～20年度の3ヶ年計画で十三湊関連遺跡群である唐川城跡の発掘調査を行う予定で内示（平成18年3月31付け青教文第1416号）を受け、補助金の交付申請書（平成18年4月6付け五教十三湊第1号）を提出していた。しかし、その後の文化庁記念物課と青森県教育委員会文化財保護課の指導・助言を得て、十三湊関連遺跡群の中での重要性・緊急性を考慮した結果、山王坊遺跡の発掘調査を行うことに急遽変更となった。

山王坊遺跡は昭和57年から平成元年にかけて、山王坊跡調査団（代表：東北学院大学加藤孝教授）がすでに遺跡中心部の発掘調査を行っている。調査の結果、遺跡中心部に二組の社殿列跡とみられる遺構が確認されており、年代的にも安藤氏が活躍した時代に相当することがすでに判明している。しかし、山王坊遺跡は広範囲に及んでおり、山間に挟まれた平地のほかに丘陵部一帯も含まれているので、全体像の解明には到底至っていないかった。そこで、今回新たに実施する市内遺跡発掘調査事業（山王坊遺跡の発掘調査）は、国史跡指定の要件を目指すために必要となる遺跡の範囲や構造・性格などの全体像を明らかにするために行うものであり、当初、平成18～20年度の3ヶ年計画（20年度末に本報告書刊行）で実施することとした。そこで、改めて計画変更承認申請書（平成18年7月21付け五教十三湊第8号）の提出を行い、文化庁及び青森県教育委員会から事業計画変更（平成18年8月4日付け18委房財第15の33号、及び平成18年8月22付け青教文第642号）が承認され、山王坊遺跡の発掘調査が実施されるに至った。

平成19年度になると、市の財政健全化計画策定（平成19年2月23日）に伴い、事業費の削減を余儀なくされ、事業期間を1年間延長せざるを得ない状況となった。一方で過去の山王坊跡調査団による山王坊遺跡発掘調査記録類も整理・把握した上で本報告書に反映させるよう指導されていたので、時間をかけた調査ができる事業を進める上では好都合な結果となった。そこで改めて平成18～21年度の4ヶ年計画事業とし、最初の3ヶ年を範囲確認の発掘調査、最終年度に整理作業を中心とした本報告書の刊行をめざすことになった。これを受けた補助金の交付申請書（平成19年4月9付け

五教十三塗第2号）を提出し、交付決定（平成19年6月5付け青教文第348号）を受けて発掘調査が実施された。

平成20年度では、補助金の交付申請書（平成20年2月19付け五教十三塗第54号）を提出し、交付決定（平成20年4月1付け青教文第8号）を受けて発掘調査が実施された。調査の結果、日吉神社境内の入口、西側の山際から新たに2棟の礎石建物跡が新たに検出されて注目された。そのうちの1棟が大型の仏堂跡と考えられるようになり、神仏習合の建物配置が極めて良好に残る大規模な伽藍配置の状況が判明した。これは当初予想もしない大発見があったことから、翌年度も周辺の範囲確認を中心とした発掘調査が必要となった。

平成21年度では、先述したように整理作業を中心とした事業内容であったが、前年度の成果を受け継続した範囲確認調査を行うこととなった。補助金の交付申請書（平成20年2月17付け五教十三塗第48号）を提出し、交付決定（平成21年4月17付け青教文第127号）を受けて発掘調査が実施された。なお、調査の最終年度でもあることから、平成22年1月14～15日にかけて山王坊遺跡報告書作成会議を行った。調査成果の公表に万全を期すため、発掘調査指導員の指導を仰ぎ、報告書の作成方針・内容・執筆分担等を打ち合わせた。そして、平成22年3月末に本報告書を刊行した。

第2節 調査要項

a) 調査の目的

史跡十三塗遺跡の関連遺跡群の調査として、山王坊遺跡の発掘調査を実施する。山王坊遺跡は昭和57年～平成元年度にかけて山王坊跡調査団（代表：東北学院大学・加藤孝教授）が中心部の発掘調査を実施しており、すでに学術的価値の裏付けが行われている。年代的にも安藤氏が活躍した時代に相当することがすでに判明しているが、遺跡の全体像の解明には至っていない。安藤氏に関わる一大宗教施設であり、歴史的にも非常に価値の高い重要な遺跡であると言える。平成18～21年度の4ヶ年計画で範囲確認の発掘調査を実施する。それは国史跡指定の要件を目指すために必要となる遺跡の範囲や構造・性格等、全体像を明らかにするための範囲確認調査が中心であり、遺跡範囲を示す測量調査も実施する。また、過去の発掘調査記録の再整理や文献調査、周辺遺跡の調査研究を行い、その調査成果をまとめた本報告書を刊行する。そして、平成22年度には山王坊遺跡の保存と活用を図るために、国史跡十三塗遺跡関連として史跡指定を目指していく。

b) 遺跡名及び所在地

山王坊遺跡 青森県五所川原市相内岩井87-1、84-22～84-24外（遺跡番号205159）

c) 発掘調査期間

平成18年10月2日～平成18年11月22日

平成19年10月15日から平成19年11月9日

平成20年6月2日から平成20年11月28日

（※測量調査：平成20年12月1日から平成20年12月8日）

平成21年7月1日から平成21年11月24日

d) 調査面積

平成 18 年度 230 m²、平成 19 年度 140 m²、平成 20 年度 300 m²、平成 21 年度 160 m²

e) 調査体制

五所川原市発掘調査指導員

村越 深（弘前大学名誉教授／考古学）
佐藤 仁（元青森県文化財保護審議会委員／文献史学）
坂田 泉（元東北大学教授／建築史）
岩崎 繁芳（北奥文化研究会会長／文献史学）
川村 貞一（日本地学教育学会会員／地質学）
高島 成侑（元八戸工業大学教授／建築史）
三浦 圭介（北里大学講師／考古学）
千田 嘉博（奈良大学教授／考古学）
永井 康雄（山形大学教授／建築史）
佐藤 智雄（市立函館博物館学芸員／考古学）
小野 正敏（国立歴史民俗博物館教授／考古学）

事務局 五所川原市教育委員会

(平成 18 年度)

高松隆三（教育長）、葛西皓（教育部長）、中村健（生涯学習課長）古川徹（生涯学習課十三添
発掘調査室長）、近藤昌浩（同室主査）、柳原滋高（同室主査）、長利豪美（同室主事）

発掘調査作業員 秋田谷久、成田正行、三上光治、山内れい子、吉田ルリ子、工藤慶子、
工藤輝美、今由里子、佐藤典子、古川美恵子、白川悦代、丹場幸子、
成田ヨシエ、吉田勝行

発掘整理作業員 佐藤典子、白川悦代、丹場幸子

(平成 19 年度)

木下巽（教育長）、木村 一善（教育部長）、前田晃（生涯学習課長）、古川徹（生涯学習課十三
添発掘調査室長）、近藤昌浩（同室主査）、柳原滋高（同室主査）、長利豪美（同室主事）

発掘調査作業員 伊藤美枝子、工藤慶子、工藤輝美、今由里子、古川美恵子、白川悦代、
白川由美子、武田恭兵、丹場幸子、成田ヨシエ、吉田勝行

発掘整理作業員 伊藤美枝子、工藤慶子、工藤輝美、今由里子、白川悦代、丹場幸子

(平成 20 年度)

木下巽（教育長）、福井定治（教育部長）、前田晃（社会教育課長）、石岡芳幸（社会教育課
十三湊発掘調査室長）、近藤昌浩（同室副主幹）、柳原滋高（同室主査）、長利豪美（同室主事）

発掘調査作業員 伊藤美枝子、工藤慶子、工藤輝美、今由里子、成田ヨシエ、村元秀子、
葛西節子、丹場幸子

発掘整理作業員 伊藤美枝子

(平成 21 年度)

木下巽（教育長）、福井定治（教育部長）、前田晃（社会教育課長）、一戸俊一（社会教育課
十三湊発掘調査室長）、近藤昌浩（同室副主幹）、柳原滋高（同室主査）、長利豪美（同室主任）

発掘調査作業員 小寺一幸、佐々木まさ子、山田ひとみ、山田佳大、吉田重夫、今由里子、
成田ヨシエ、葛西節子

第3節 調査の計画と方法

山王坊遺跡は山王沢の一一番奥まった山間の谷間に位置し、現口吉神社境内の一帯とされている。境内入口あたりで東西幅 100 m ほどの平地が広がっているが、北側の奥地へと序々に進んで行くと平地の幅がどんどん狭まっていき、最終的には 500 m ほど奥へ行ったところで、山王坊川にぶつかって平地は失われてしまう。また、平地を挟むように東西に丘陵が広がっており、これまでの調査で山の中腹にも遺構が確認されている。第1章で村越氏が指摘したように、山王坊跡調査団による遺跡中心部の礎石建物跡群の様相がある程度明らかになってきたものの、遺構が広範囲及んでいる可能性が高く、遺跡がどこまでの広がりをもつのか、実のところ全く不明であった。特に史跡指定の要件を満たすためには遺跡の範囲、主な遺構配置の解明による構造や性格等の把握が必要であった。そこで、まずは遺跡全体の測量図の作成が急務であり、これに基づいた発掘調査区の設定を行う必要があった。

a) 測量調査と全体測量図の作成について

幸いにも平成 14～15 年の山王川地方特定河川等環境整備事業に伴って作成された設計平面図（縮尺 1/500、五所川原県土整備事務所作成）が残されていた。設計平面図には山王坊遺跡を含む山王坊川沿いが描かれていたが、唐川城跡（春日内観音堂）に通じる西側の丘陵地一帯が図面に含まれていないことや、工事用の図面であるため等高線が標高で示されていないなど、平面図として使用するためには修正が必要であった。

平成 18 年度では、調査する遺跡変更等の影響もあって十分な事前準備ができなかつたので、まず西側の丘陵地一帯（後述する D 地区）の測量調査を行ったが、調査区域に任意のグリッドを設け、トータルステーション、レベル機器、平板を利用し、50 cm ごとの等高線を示した測量図を作成することで対応せざるを得なかつた。

平成 19 年度では、株式会社東北建設コンサルタントと測量業務の委託契約を結び、精度の高い測量図を作成するため、3 級基準点測量（標杭 2 点設置）、3 級水準点測量（新設点 1 点）、平面図修正作業の 3 業務を依頼した。3 級基準点測量では前年度に任意のグリッドを組んで作成した測量図を合成するため、設定したグリッド杭の国土座標（世界測地系準拠）を算出する必要があった。また、遺跡全体でかなりの高低差があるため、3 級水準点測量を必要とした。平面図修正作業では、新たに 3 級基準点測量、3 級水準点測量で算出した標杭を基に、先述した設計平面図を修正したデジタルデータ化をはかった。もちろん平成 18 年度の測量図データも修正図に取り入れた。

平成 20 年度では、前年度までに完成した測量図の確認・修正を行うため、発掘調査が終了した 12 月 1 ~ 8 日にかけてトータルステーションによる現地測量を調査担当職員（榎原・長利）で行った。沢に分け入って、図化されていない微細な沢筋の測量や、或いは丘陵緩斜面における人工の造成面（平場）の測量など、微細な測量を行いデータ化していった。

一方で、過去の山王坊調査団による遺構測量図（礎石建物配置図）を永井康雄発掘調査指導員から頂戴することができた。永井氏は当時、山王坊調査団の測量班（東北大）として調査に参加されており、精緻な遺構測量図を保管されていた。この頂いた遺構測量図をデジタルデータ化して、全体の測量図に配置することができた。こうして出来上がった測量図は、一般に利用できるグラフィックソフトであるアドビシステムズ株式会社の illustrator で利用できるようにした。

そして、平成 18 ~ 21 年度にかけて行った調査区はすべてデジタルデータ化して、全体測量図に取り入れて完成した。

b) 調査地区的名称設定について

ここでは完成した全体測量図と調査で検出された遺構群のまとめを考慮して、本報告書での説明の便宜を図るために、調査地区を A ~ F 地区にわけて説明することとする（第4図）。

地区ごとの概要説明をすると、以下のとおりである。

A 地区：山王坊川の西側丘陵緩斜面に位置する。現日吉神社の社殿を含む東側。大きく二ヵ所の平場が認められる。山王坊跡調査団によって、奥院とされる方形配石墓や礎石建物跡が検出されている。磐座跡も含む。

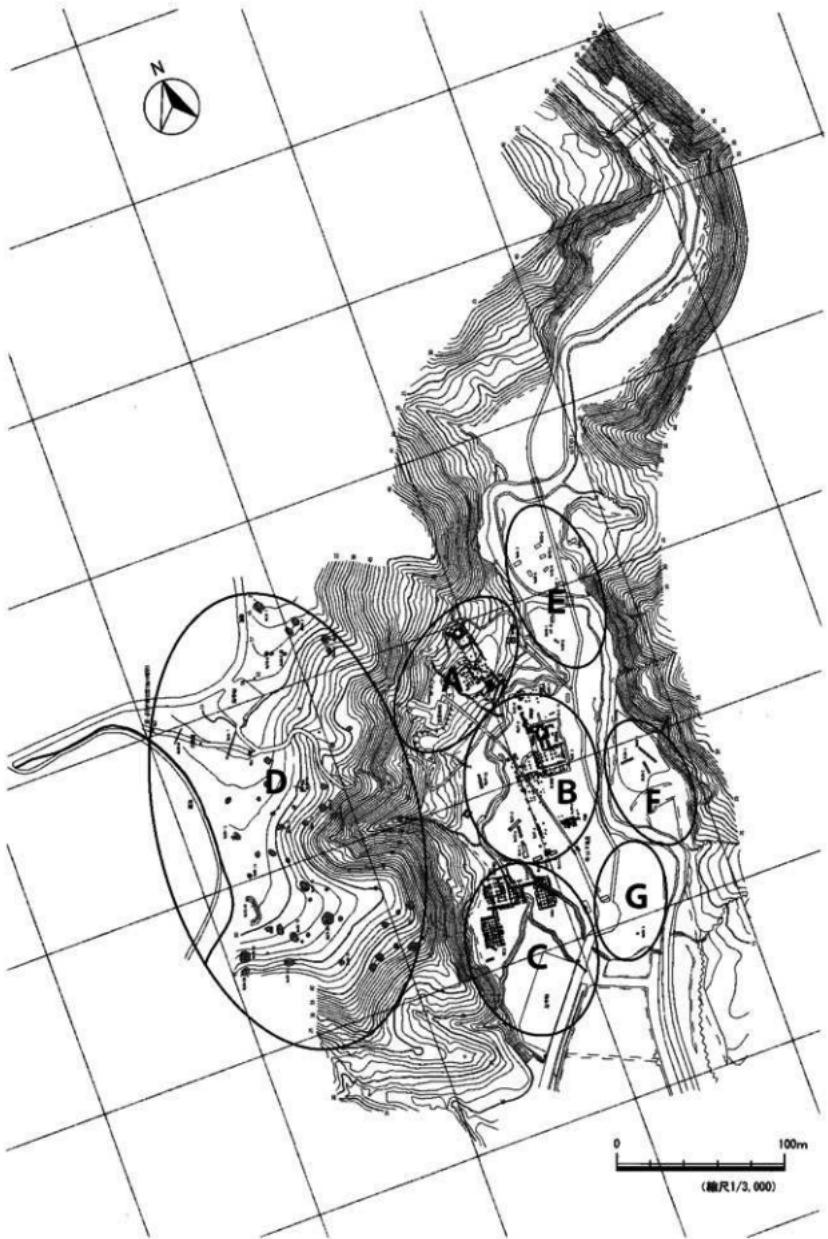
B 地区：山王坊川の西側平坦面に位置する。山王坊跡調査団によって、社殿跡跡が検出されている。平成 19 ~ 21 年度には五所川原市教育委員会でトレーニングを行った。

C 地区：山王坊川の西側平坦面、西側丘陵の山際に位置する。平成 20 ~ 21 年度に五所川原市教育委員会のトレーニング調査によって、3 棟の礎石建物跡が確認された。

D 地区：山王坊川の西側丘陵地帯。唐川城跡（春日内觀音堂）に通じる旧参道が走っている。

平成 18 年度に五所川原市教育委員会がトレーニング調査を行い、多くの炭焼き窯を検出した。

E 地区：A 地区の東側。山間に挟まれた山王坊川が大きく蛇行する平坦地。平成 14 年度に青森県教育委員会が 8ヶ所の試掘確認調査を行っている。平成 21 年度には五所川原市教育委員会で 2ヶ所のトレーニングによる確認調査を行った。調査の結果、山王坊川の氾濫原となっており、遺構・遺物は全く確認されていない。



第4図 山王坊遺跡全体図と地区別図

F地区：山王坊川の東側平坦地に位置する。地形的にはC地区に良く似た雰囲気があって、東側の丘陵斜面には岩盤が露出している。平成21年度には五所川原市教育委員会で3ヶ所のトレーニング調査を行った。調査の結果、山王坊川の氾濫原となっており、遺構・遺物は全く確認されていない。山王坊川の旧流路のくぼんだ箇所も認められる。

G地区：山王坊川の西側平坦地に位置する。明治24年作成の相内村「字岩井」地籍図によれば、元々は山王坊川の土手沿いに参拝道があったことから、境内の入口に相当する場所といえる。平成21年度には五所川原市教育委員会で1ヶ所のトレーニング調査を行った。調査の結果、中世の柱穴が確認されており、掘立柱建物、或いは柵塀等の存在が推定される場所である。

c) 発掘調査の方法と年度ごとの概要

調査は遺構確認による遺跡の広がりや範囲を把握するためのものであり、基本的にトレーニング調査を中心に行った。遺構の図化作業の方法については、トレーニングの両端にグリットピンを設置して、両端の点を水糸で結び、片方のグリットピンを原点に定めて、コンベックスで直交に測り込む方法で行った。微細図は縮尺10分の1、それ以外は縮尺20分の1の図面を作成していく。またその後、設置した2点のグリットピンはトータルステーションによって、国土座標（世界測地系準拠）を求めて全体測量図に落とす作業を行った。ただし、平成20・21年度調査で検出されたSB01～03礎石建物跡に伴うトレーニングについては、当初、建物跡全体が納まるようにトータルステーションで杭打ち作業を行った任意の座標基準点を用いて、縮尺20分の1の平面図を作成した。これは調査を進めながら、即座に現場で建物跡を把握するためのものであった。後日、基準点及び周辺杭の国土座標を求めて、全体測量図に張り合わせて合成した。なお、トレーニング調査では、検出面の精査後に写真撮影を適宜行った。写真撮影は35mmカメラ、デジタル一眼レフカメラを用い、フィルムはカラーリバーサルを用いた。出土遺物は1点ごとに遺物番号、層位、レベルを付して全点ドットで取り上げることを基本とした。ただし、表土から出土したものについては、トレーニング名を付して一括で取り上げた。また、基本的にトレーニングごとに土層断面図の作成を行い、写真撮影を行った。基本層序については、ローマ数字で表記し、それ以外の層位は任意の記号・番号等を付した。

次に調査年度ごとの説明を付しておく。

平成18年度は、D地区の丘陵部及び斜面において、多数の窪地やマウンド状の盛土が認められたので、任意に24ヶ所のトレーニング調査区を設けて確認調査を行った。

平成19年度は、B地区において、12ヶ所のトレーニングを設けて確認調査を行った。調査は山王坊跡調査団で確認された礎石跡の再調査や新規の調査箇所が含まれている。

平成20年度は、C地区において、46ヶ所のトレーニングを設けて確認調査を行った。このC地区ではこれまでの調査方法とは違って、まずはピンポールを利用して礎石の位置を確認するボーリング調査を実施した。日吉神社の境内は杉林で囲まれているため、やみくもに調査区を設けて発掘してもそれほどの成果が表れないことが前年度までの調査で明らかであった。ボーリング調査によって、礎石のある場所が経験的に判別できるようになった。礎石のありそうな場所が1つ判明すると、凡そ2m間隔で次の礎石を探していく、一つの柱筋（建物軸線）が確認できる。後はそのラインを直行させて建物全体を把握していく。礎石の位置を確認できた場所にピンポールを立てておき、トレーニングを設定する目安とした。

礎石を確認するために設置したトレーニングチはなるべく建物の軸線に沿うよう設定したが、杉の木立も多く、礎石を壊したりするようなトレーニングチも設定せざるを得なかった。

平成 21 年度は前年度に統いて C 地区で 20 ヶ所のトレーニングチを設定した。ただし、前年度と異なり、礎石の設置状況を断面で観察できるように、一部のトレーニングチで礎石を半分だけ検出する作業を行っている。また、調査の最終年度ということもあって、B 地区で 2 ヶ所、F 地区で 3 ヶ所、G 地区で 1 ヶ所、E 地区で 2 ヶ所のトレーニングチ区を設定した。すべて合計すると、28 ヶ所のトレーニングチ区を設けた。

d) トレーニングチ調査区の名称について

以上、調査の基本方法と年度ごとの概要を述べてきたが、本報告書では各年度に実施したトレーニングチ調査区を説明する上で、便宜的に次のようにして表記することとした。

平成 18 年度に設定した 24 ヶ所のトレーニングチ調査区については、06-1 トレーニングチ、…、06-24 トレーニングチと表記する。トレーニングチ番号はトレーニングチ調査区を設定した順に付している。また、トレーニングチ名の頭に冠した（06-）の記号は、西暦 2006 年の下二桁を指しているので、同様に各年度のトレーニングチ名を表記すると、平成 19 年度は、07-1 トレーニングチ、…、07-12 トレーニングチとなる。平成 20 年度は、08-1 トレーニングチ、…、08-46 トレーニングチとなる。平成 21 年度は、09-1 トレーニングチ、…、09-28 トレーニングチとなる。

e) 磂石番号の表示について

煩雑なトレーニングチ名称の他にも、検出された個々の礎石に対しても番号を付して説明を加えている。それは文中で個々の礎石を説明する必要があるだけでなく、写真図版で示された礎石の写真がどの礎石を示したものかを明らかにするためである。礎石番号の順番は任意に示しており、詳細な礎石の観察は第 5 表の礎石観察表に譲ることにする。

f) 山王坊調査団による調査記録の整理について

山王坊遺跡の全体像を把握する上で、過去に実施した山王坊調査団による調査成果は欠かせない。先述したように、遺構測量図（礎石建物配置図）は永井康雄発掘調査指導員から頂戴することができた。一方で、出土遺物に関しては、今回佐藤智雄発掘調査指導員から返還を受けた。佐藤氏は山王坊調査団の考古班として携わっており、故加藤孝教授から引き継いで調査成果を取りまとめることになっていったが、今回、事務局でこれらの出土遺物を整理したものを第 5 章第 3 節で報告する。

第3章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地理的環境

川村眞一

1. 遺跡の地形概観

津軽半島北部は中山山地と共に続く梵珠山地が脊梁をなし、東部の陸奥湾岸地域と西部の日本海側地域とに分かれている。

中山山地は北端の龍飛崎を起点に矢形石山(587m)・増川岳(714m)・浜名岳(603m)・四ツ滝山(670m)・木無岳(587m)などの峰々が北北西から南南東方向に連なり、南側の梵珠山地へと続いている。山地は晩壯年期のやや急な山容を呈している。四ツ滝山南方斜面末端部には小規模・狭小ではあるが、三段の海成段丘がみられる。

これら山地を流れる河川は、増川岳・四ツ滝山・木無岳を分水嶺として放射状に直線的な深い谷を刻んでおり、おもな河川に北から南へ冬部川、小泊川、磯松川、山王坊川、桂川、長根沢、相内川(太田川)、今泉川があり、前二者は直接日本海へ、それ以外の河川は十三湖へ流入する。

平野は各河川の谷底にみられるほか、相内川が十三湖へ注ぐ河口に形成された三角州にも小規模ながらみられる。

十三湖の西側には長い砂嘴が形成されているほか、海岸沿いに低い砂丘が発達している。車力から磯松までの海岸は砂質海岸となっているが、それより北の小泊、龍飛までは荒磯の岩石海岸で海食崖が発達している。

2. 遺跡周辺の地形と遺跡の地形

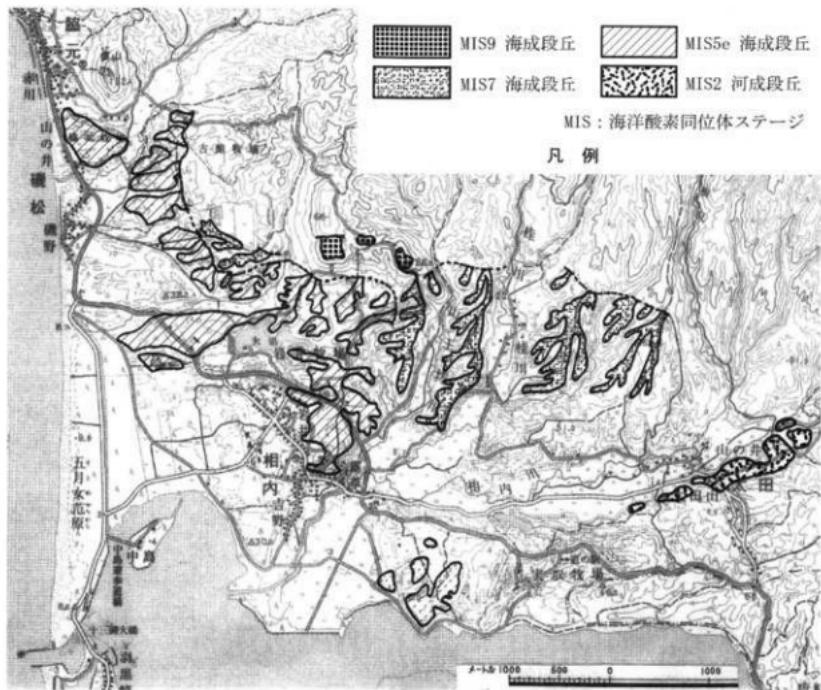
(ア) 遺跡周辺の地形

遺跡周辺は四ツ滝山、木無岳南方斜面末端部を占め、これを山王坊川、桂川、長根沢が南流して谷を形成している。これら河川に挟まれた尾根部には、海洋酸素同位体ステージ(MIS)7(約20万年前)と考えられる南北に伸びる海成段丘面が見られる。それらの標高は60m~30mである。山王坊川の西側の支流から西方磯松までの間には標高20m~30mの平坦面が広がっており、これらの平坦面はMIS 5e(約12万年前)の海成段丘と考えられる。なお、福島城跡はこのMIS 5eの海成段丘面上に立地している。

山王坊川、桂川、長根沢が合流する相内川(太田川)には、二段の河成段丘が認められる。上位の更新世末期の段丘は左岸の太田地区に見られ、面上には太田集落が立地する。下位の完新世初期の段丘は太田集落の少し上流右岸に流路に沿い細長く形成されている。

(イ) 遺跡の地形

遺跡は山王坊川が谷あいから平地に出る出口付近、川の右岸に形成された小規模な自然堤防と後背低地の地形と低地の北側斜面に展開する。現地形面の標高はこれまでの発掘地のうち、最も北側に位置する山王坊川が曲流する部分の左岸で02年度県教委発掘地が14m、それより南側山王坊川右



第5図 遺跡周辺の段丘分布図

(小池・町田編、2001:「日本の海成段丘アトラス」による)

岸の本殿跡、拝殿跡付近では14m～13.5m、さらに南側の07年度、08年度発掘地では12.8m～12.2mとなっており、この後背低地では上流から下流側へ緩く傾斜した地形となっている。低地の最大幅はSB03区南で約1kmである。

3. 遺跡周辺の地質

津軽半島北部の地質は、小泊岬の先第三系を基盤とし、これを覆う新第三系が広く発達する。新第三系は主として中新統の堆積岩からなるが、ほかに火山岩や火山碎屑岩も多く分布する。これらの地質を規制する地質構造に、小泊付近から南南東へ延びる小泊向斜と冬部川流域から南南東へ延びる磯松背斜がある。

先第三系は小泊岬先端に見られる。主として赤褐色～紫褐色板状の褶曲をしたチャート、黒灰色の泥岩中に砂岩をレンズ状にはさんだ混在岩(メランジ)、角礫状でドロマイト化した石灰岩等からなり小泊岬層とよばれていて、付加体堆積物である。この先第三系を新第三系が覆う。

新第三系は下位から上位へ権現崎層、磯松層、冬部層、長根層、小泊層、塩越層の順に北ないし北東の走向で東方へ堆積する。火山岩類には冬部層ないし長根層とほぼ同時期に活動した竜飛安

山岩類、小泊層とほぼ同時期に噴出し、一部はこれを貫いて進入した三廻流紋岩および粗粒玄武岩類、小泊層上部から塩越層にかけて生成した今別安山岩類、および小泊層を貫いて貫入したと思われる増川岳デーサイトが見られる。

権現崎層は先第三系の小泊岬層を直接覆い、帶紫緑色の凝灰岩を主とし、プロピライト(propylite)や溶結凝灰岩を伴っている。その上位の磯松層は四ツ瀧山南西付近を通る磯松背斜の南西翼に分布し、主として礫岩・砂岩・泥岩などの互層からなる。冬部層は緑色凝灰岩とよばれる変質した安山岩質の火山碎屑岩を主とする地層で、流紋岩、プロピライト、玄武岩を多く挟み、貝化石や植物化石に富む。長根層は緑色の凝灰質砂岩を主体とする地層である。小泊層は硬質頁岩など細粒の堆積物を主体とする地層で、軽石質凝灰岩と互層することがある。塩越層は珪藻質の泥岩を主体とする地層で、珪藻のほか放散虫や海綿骨針を多産する。

遺跡付近の地質は、山王坊川谷底平野両岸は冬部層が、その上流には長根層が広く分布する。遺跡のやや上流には北東から南西に堆積している冬部層中にプロピライト、灰長石安山岩、玄武岩が挟在する。また、桂川集落南の冬部層中には溶結凝灰岩が見られる。

4. 遺跡の土層

07～09年度発掘地の土層を次のように区分した。各層とも山王坊川の後背低地堆積物からなる。

全 域		SBO1 磐石建物跡地区			
遺跡標準層序		08-1、4、3 トレンチ	09-28 トレンチ	08-27 トレンチ	
I層		I層	I層	I層	
II層		II層	II層	II層	
III層	III-a	III-a	III-a'	III-a	
			III-a		
	III-b	III-b1			
		III-b2	III-b2	III-b2	III-c
		III-b3	III-b3		
IV層		IV層	IV層	IV層	

層	厚さ(cm)	注記
I	5-7	10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～シルト。表土。植物の根、茎、斜長石と思われる白色鉱物粒子を多く含む。乾燥面では 3cm程度の方形クラックが目立つ。近現代の遺物を含む。
II	15-17	10YR4/4 暗灰褐色砂。極細砂粒子間は褐色のシルト～泥で膠結されているが、もろい。白色鉱物粒子を含む。無遺物である。
III	III - a'	流水路の両岸にみられる層である。09-28 トレンチのものは III - a 層の上に堆積し、2.5Y5/3 黄褐色で均質な細砂。層にやや平行な 5YR4/6 赤褐色をした酸化鉄の斑紋がみられる。炭化物が若干混入している。
	11-13	2.5Y5/2 暗灰黄色～10YR4/3 にぶい黄褐色。空気中に触れた外見は 5Y6/2 灰オーリーブ色を呈している。極細砂質細砂を含むやや均質なシルト。5YR4/6 赤褐色をした酸化鉄の斑紋がみられるが、あまりはっきりしないところもある。炭化物は少しみられる。少ないが中世遺物を含む。
	III - a	08-27 トレンチでは、2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂。2-5mm 大の炭化物を多く含む。植物根痕の管状孔隙に還元溶出した鉄が酸化・沈殿して鉄サビ色 (5YR4/4 赤褐色) を呈す。輪郭が鮮明である。他の部分は暗灰黄色である。中世の遺物を含む。下位は全体的に、にぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈するが、新鮮面は暗灰黄色 (2.5Y5/2)。1-2mm 大の炭化物を含むが、少ない。
	III - b	2.5Y5/2 - 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂。一部細粒砂質のところもある。不均質。外見は 10Y5/1 灰色を呈する。3-5mm 大の炭化物を含む。5YR4/6 赤褐色をした酸化鉄の不均一斑紋がみられるが、III - a 層より多い。本層には中疊から大疊サイズの焼石を含むことがある。中世遺物包含。上面には角張った小石を含むことがあり、III - a 層との境界を示す。
	III b1	5BG5/1 青灰色シルト質極細粒砂。SBO1 区礎石建物整地層を覆う、填圧したと思われるしまりのある粘土質シルト層。SBO1 区にのみ見られる。
	III b2	5BG5/1 青灰色シルト質極細粒砂。08-27 トレンチでは、2.5Y5/1 黄灰色極細砂。植物根痕の管状孔隙に鉄 (褐鉄鉱) が酸化・沈殿し、鉄サビ色 (5YR5/6 明赤褐色) をした植物根痕が多く見られる。炭化物粒子を少量含む。褐鉄鉱沈着約 20%。遺物を含む。
	III b3	5BG4/1 暗青灰色シルト質極細粒砂。層相は III - b2 とほぼ同質であるが、鉄分の酸化沈積程度は約 10% で III - b2 よりやや少ない。遺物を含む。
	III - c	流水路の両岸流路沿いのみに分布する。地山層上の堆積物で、植物遺体を多く含む細粒砂である。08-27 トレンチのものは、7.5Y4/1 灰色細砂。葉、茎、根、実などの植物体を含む細砂。09-28 トレンチのものは No3・No4・No5 層が本層に相当し、2.5Y3/2 黒褐色シルト、2.5GY4/1 暗オリーブ灰細砂、5GY4/1 暗オリーブ灰細砂に毛根、細茎、小枝、葉を多く含む。本 III - c 層は III - b2 層、III - b3 とは同時異相である。
IV		5Y5/1 灰色 - 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂。3-5mm 大の 5YR5/6 明赤褐色をした酸化鉄の斑紋がきわめて顕著。場所によってはグラライ化による青灰色 (5B5/1) を示すところもある。ところによっては高師小僧が形成されており、その中心周囲はにぶい赤褐色 (5YR5/4) 呈している。種子 (0.5mm 大)、炭化物がまれにみられる。粘着性がある。流路跡では中疊サイズの砂疊となっている。地山層。

5. 碓石石材の石質と分布

碓石の石材には propylite(プロビライト)変朽安山岩)、溶結凝灰岩および灰長石安山岩がみられる。平成 20 年度検出した碓石石材の割合は、大略 propylite 75%, 溶結凝灰岩 17%, 灰長石安山岩 8% である。

(ア) 石材石質の概要

灰長石安山岩は溶岩流をなすものは、濃緑色～黒色を呈しやや緻密な石基中に、大型の白色斜長石(2 cm 大)斑晶を多量に含む特徴があり、塩基性の安山岩である。ときには柱状節理を示す。

propylite プロビライトは熱水変質した安山岩で、緑泥石、緑れん石、方解石、斜長石の一種である曹長石やカリ長石、石英などの鉱物が生成し、全体として緑色を帯びる特徴をもつ。変質前の原岩は輝石安山岩である。

玄武岩は暗緑色～黒色緻密な岩石で、斑晶は斜長石・橄欖石からなり、橄欖石玄武岩である。柱状節理を示すこともあるが、風化すると玉葱状に崩れやすい。

溶結凝灰岩は、火山噴火による岩片、軽石、火山灰等からなる火碎流堆積物が高温と自重のために圧縮され、引き延ばされて薄いレンズ状になって固結した岩石で、遺跡の碓石石材に利用されているものは第三紀中新世冬部層中のものである。

(イ) 石材の分布(第6図)

灰長石安山岩は山王坊沢、相内(現在は採掘されつくしてない)、四ツ滝沢上流、太田川上流に分布。遺跡周辺では山王坊川上流、遺跡の北約 600m 付近および山王坊川と桂川間の尾根南端に分布。後者の産出地は採掘により現在は見られない。

propylite プロビライトは山王坊沢下流および上流、太田川上流に分布する。遺跡の周辺では山王坊川上流、遺跡の北約 900m 付近に分布。

玄武岩は太田川上流に分布。遺跡の周辺では遺跡北側約 200m の山王坊川両岸と春日内神社北西 50 m 付近に分布。

溶結凝灰岩は市浦桂川集落南および北側、通称観音堂付近に分布。この付近ではこの溶結凝灰岩を切石として採石した。

引用参考文献

青森県史編さん自然部会(2001) 青森県史 自然編 地学

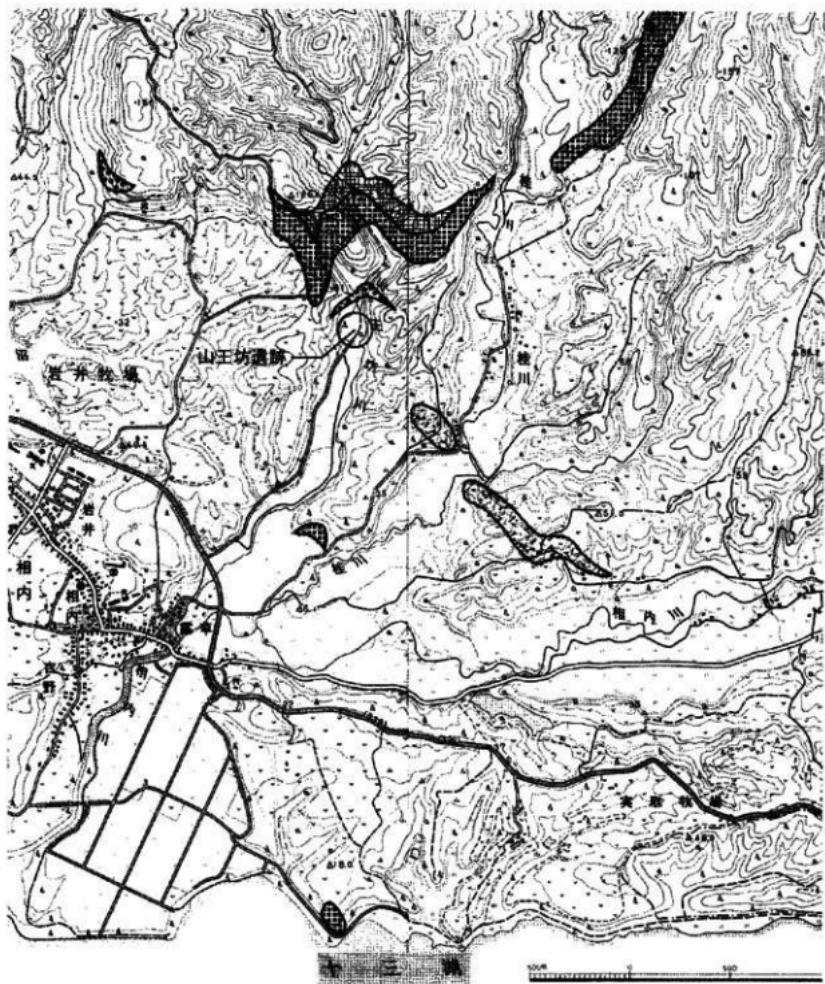
小池一之・町田 洋編(2001) 日本の海成段丘アトラス 東京大学出版会

市浦村教育委員会・山王坊跡調査団(1987) 山王坊跡

対馬坤六・上村不二雄(1959) 5 万分の 1 地質図幅 同説明書「小泊」地質調査所



凡 例



第6図 遺跡周辺の礫石石材分布図

(対馬・上村、1959: 5万分の1地質図幅「小泊」地質調査所に一部加筆。)

第2節 周辺遺跡と山王坊周辺出土の中世陶器壺類について

柳原滋高

五所川原市・市浦地区が位置する十三湖周辺地域は、海上・水上交通の要衝地として物資が集散する湊町が発達し、古代から近世にかけて繁栄した。特に中世には在地豪族安藤氏が十三湊を拠点にして日本海交易の活動舞台としたために、十三湊安藤氏関連の中世遺跡が多数存在している。

ここでは十三湖一帯の遺跡を時代順に、さらに山王坊周辺出土の中世陶器壺類の事例を紹介する。

1. 周辺の遺跡について

縄文時代の遺跡

現在までに解明された考古学的知見によると、十三湖周辺地域に人々が暮らし始めたのは、縄文時代前期～中期である。この時期は気候温暖化によって海面が上昇し、海岸線が陸地側に大きく入り込むようになる。津軽平野の大部分は内海となり、現在よりも広大な十三湖が形成されていたものとみられる。十三湖北岸地域では、丘陵端部において集落および貝塚形成が認められる。標高20mの丘陵端部にヤマトシジミを主体としたオセドウ貝塚や笹畠貝塚といった貝塚遺跡が形成されている。笹畠貝塚の丘陵上には竪穴住居跡とみられる窪地も確認されており、隣接して集落があったとみられている。¹

縄文時代後期前半になると、前段階に比べて遺跡・遺物の情報は極めて乏しい状況となる。管見の限りでは、岩井大沼遺跡²、笹畠貝塚³、蛇石遺跡⁴からそれぞれ変形土器が出土・表採されているだけである。

縄文時代後期末・晩期には、五月女瀬遺跡、岩井大沼遺跡が現れる。五月女瀬遺跡は十三湖北岸の丘陵縁辺、標高5～10mほどの砂丘上に形成された大規模な遺物包含層である。縄文時代後期末葉～晩期後葉（十腰内V式～大洞A式）の土器・石器類が多量に出土している。⁵ 大規模な集落跡の存在が推測されるが、竪穴住居等の居住域は未確認である。この頃には海退によって、海岸線が海側に後退し陸地化が進み、丘陵縁辺部の砂丘低地帯に当たるような場所でも生活が可能だったようである。また、五月女瀬遺跡は海岸部に近い環境であり、製塙土器も発見されている。しかし、五月女瀬遺跡は晩期末葉になると廃絶する。一方、唐川城跡下の標高20mほど大沼周辺で岩井大沼遺跡が新たに形成される。ここからは晩期末葉の大洞A'式に相当する遺物包含層が確認されている。これによって五月女瀬遺跡から岩井大沼遺跡のある内陸部への集落移動が想定可能である。このよう

1 豊島勝蔵編 1984『市浦村史』第一巻 117頁。

2 五所川原市教育委員会 2008『五所川原市遺跡詳細分布調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第29集 39頁。

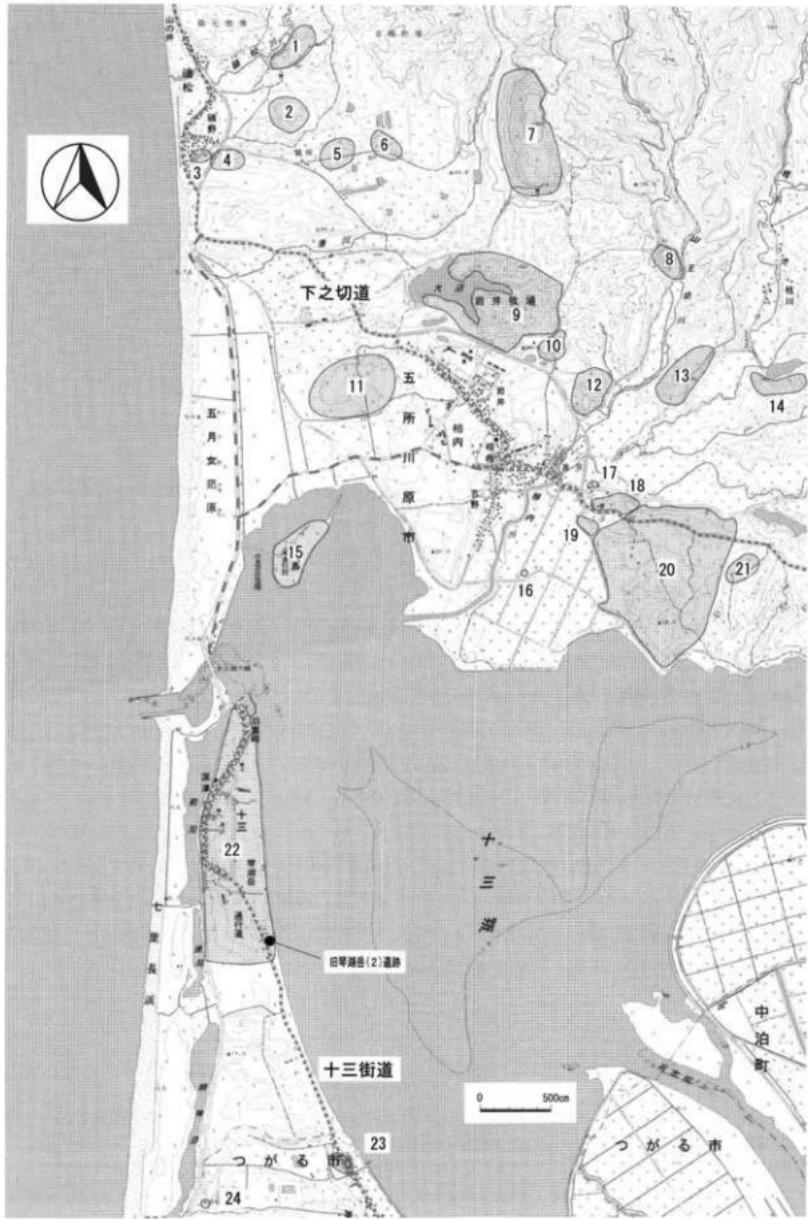
3 註2に前掲 40頁。

4 市浦村教育委員会 1995『福島城跡～平成6年度実取地区農道整備事業にかかる緊急発掘調査報告書～』現在、蛇石遺跡は福島城跡から分かれて遺跡登録されている。

5 五所川原市教育委員会 2006『五月女瀬遺跡～市内遺跡発掘調査事業における埋蔵文化財発掘調査～』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第27集 39頁。

6 新谷雄三編 1983『市浦村五月女瀬遺跡』市浦村教育委員会

7 市浦村教育委員会 2001『岩井・人沼遺跡～県営人沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告～』市浦村埋蔵文化財調査報告書第12集



第7図 十三湊遺跡と十三湖周辺の遺跡

第2表 十三湖周辺の遺跡一覧表

※No.は第7図の番号に対応する。

No.	遺跡名	遺跡番号	主な時代	種別
1	古越遺跡	205152	平安・中世	城郭跡
2	唐川(3)遺跡	205175	縄文・平安	集落跡
3	礪松遺跡	205155	中世・近世	散布地
4	礪松砂引遺跡	205151	縄文	散布地
5	唐川(1)遺跡	205153	平安	集落跡
6	唐川(2)遺跡	205176	平安	散布地
7	唐川城跡	205160	縄文・平安・中世	散布地・城郭跡
8	山王坊遺跡	205159	縄文(晚)・平安・中世	寺社跡
9	岩井大沼遺跡	205161	縄文(後・晚)	散布地
10	二ノ沢遺跡	205158	縄文(第)・平安・中世	集落跡
11	五月女西遺跡	205171	縄文(後・晚)・弥生・余良	散布地
12	猿田遺跡	205157	縄文(前～後)・中世	貝塚・集落跡
13	赤坂遺跡	205162	平安	集落跡
14	ナガレ川遺跡	205154	縄文・平安	散布地
15	中島遺跡	205168	奈良	散布地
16	実取(2)遺跡	205177	平安	集落跡
17	露草遺跡	205163	中世	寺社跡
18	オセドウ遺跡	205164	縄文(前～後)・平安・中世	貝塚・集落跡
19	蛇石遺跡	205167	縄文(前～後)・平安	集落跡
20	福島城跡	205166	縄文(晚)・平安・中世	城郭跡・集落跡
21	実取(1)遺跡	205165	平安	集落跡
22	十三湖遺跡	205172	縄文・平安・中世・近世	集落跡(港湾)
23	清水遺跡	209108	縄文(前～後)・弥生・平安	集落跡
24	町崎沼遺跡	209109	中世・近世	散布地

に縄文時代は気候変動による海進と海退を繰り返しながら、自然環境の変化に適応した縄文人たち姿を窺うことができる。

弥生・奈良時代の遺跡

弥生時代の様相はこれまで全く不明であったが、近年、五月女瀬遺跡から弥生時代後期に比定される天王山式土器、後期後葉に比定される後北C1式土器が採集された。後北C1式土器は北海道の続縄文土器であり、津軽海峡を南下して十三湖北岸地域で交流があったことを示している。

奈良時代の遺跡には中島遺跡と五月女瀬遺跡がある。中島遺跡は現在、十三湖中の北西に浮かぶ中島に位置しており、昭和27年に不時発見による土師器がまとまって出土し、櫻井清彦氏によって北東北の土師器第I型式の標識資料の一つに挙げられたことで知られている。近年では8世紀前半～中頃に比定されている。中島遺跡の旧地形について、当時から島状を呈していたのか、或いは十三湖西岸の砂洲と陸続きだったものが時代とともに岩木川の浸食作用によって洗われ、砂洲の一部が取り残されて現在の島状に変化したものは明らかではないが、当時の環境の把握は極めて重要である。一方、前述した五月女瀬遺跡からも近年、奈良時代の土師器が出土している。型式的には中島遺跡よりも後出的な特徴を有していることから、8世紀中葉～後葉と考えられる。

平安時代の遺跡

平安時代になると、前段階に比べ、飛躍的に遺跡数が増加する。十三湖西岸の砂丘低地に十三

8 柳原滋高 2010「五月女瀬遺跡出土の弥生・奈良時代の土器について」『研究紀要』第15号 青森県埋蔵文化財調査センター

9 櫻井清彦 1954「青森県十三村中島発見の土師器」『考古学雑誌』第40巻第1号。櫻井清彦 1958「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址—東北地方における集落址の研究』東北大学出版会

10 宇部剛保 1997「7・8世紀の沈縄文土師器」『姫夷・律令国家・日本海シエンボジウムII・資料集』日本考古学協会
1997年度秋田人会実行委員会

11 注8に前掲。

¹² 游跡、清水遺跡¹³があり、一方の十三湖北岸では平安時代後期の10世紀後半から11世紀にかけて集落形成が顕著に認められる。この時期に相当する遺跡には古館遺跡、唐川（3）遺跡、唐川城跡、赤坂遺跡¹⁴、福島城跡、オセドウ貝塚、ナガレ山遺跡、実取（2）遺跡¹⁵が所在する。こうした遺跡の立地は、沖積地にある実取（2）遺跡を除くと、すべて丘陵上や丘陵端部に立地する特徴をもっている。そのなかで古館遺跡や唐川城跡は近年の調査によって、集落の周りに堀を巡らす環濠集落であることが判明している。唐川城跡の調査では、精錬炉跡とみられる製鉄遺構や鍛冶工房の役割を担った堅穴住居跡が検出されており、主な生業の一つに鉄生産があったことが判明し、鉄製品等を交易品として北海道への供給する交易活動が想定されるまでになった。さらに、こうした十三湖周辺の遺跡からは、北海道に起源をもつ擦文土器が客体的ではあるもの出土している（十三湊遺跡・唐川城跡・赤坂遺跡・オセドウ貝塚・実取（2）遺跡）。こうした擦文土器が出土する背景には、先に触れた交易のほか、婚姻関係による人的交流等を想定することができるであろう。このように、中世十三湊前史の古代には、北海道との活発な交易や人的交流がすでに行われていたことが明らかとなりつつある。

中世の遺跡

十三湖西岸に位置する史跡十二湊遺跡（以下、「十三湊」とする）は、これまでの発掘調査の結果、13世紀初めから15世紀中葉までの間に機能し、都市的機能や遺跡の盛衰や景観の変化を含めて、考古学的にも港湾都市の実態が飛躍的に明らかとなってきた。また、十三湊の南端周縁には檀林寺跡の宗教施設も確認されている。

十三湊は十三湖を日本海から閉塞するように発達した標高2～10mの浜堤状砂丘上に立地している。浜堤状砂丘は七里長浜の北端部に位置し、浜堤を構成する成層砂とこれを被覆する砂丘砂で構成されている。浜堤状砂丘は十三湊の位置する十三湖側の旧期砂丘と日本海側に位置する新期砂丘が並行して発達しており、砂丘間には前潟、セバト沼、そして明神沼の沼沢が存在する。この沼沢は十三湊が栄えた中世には明神沼南端の切れ目を水戸口（十三湖の湖水が日本海へと流れ出る場所）としていたとされる。中世には一筋の水路として機能しており、日本海へと通じていたのである。また、明神沼南端の日本海に接する屏風山砂丘の中腹には浜明神と呼ばれる神社が鎮座しており、「出船入船の明神」として、現在も十三漁業関係者の信仰を集めている場所がある。ここから、かつて文久三年に境内から一一九体に及ぶ懸仏などの仏像類が出土したことが知られており、中世の水戸口付近に宗教施設が設けられていたことが判明している。¹⁶ このように十三湊の南端周縁部にあたる境界領域には檀林寺跡や浜明神遺跡といった宗教施設を配置していたことが判明している。

12 青森県 2005『青森県史 資料編考古3 弥生～古代』「十三湊遺跡」の項。606-607頁

13 青森県教育委員会 2002『清水道路一県道鰯ヶ沢蟹田線道路抜幅事業に伴う遺跡発掘調査報告書一』青森県埋蔵文化財調査報告書第331集

14 富山大学人文学部考古学研究室 2002『中軽唐川城跡—古代環濠集落の調査—』富山大学人文学部考古学研究室第7冊

15 櫻井清彦 1955『青森県相内村赤坂遺跡について』『古代』第17号

16 市浦村教育委員会 2002『実取（2）遺跡～平成13年度市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴う埋蔵文化財調査報告～』

17 柳原滋高 2006『国史跡・十三湊遺跡の調査成果について』「十三湊遺跡～国史跡指定記念フォーラム～」前川要・十三湊フォーラム実行委員会編 六一書房。

18 註1に前掲。『第十三節 古記録の明神遺跡』の項、238頁



第8図 明治期における相内村の道路景観復元

(1989年の航空写真を基に、明治24年作成の相内地区分限図の道路・河川等を当てはめたもの。)

次に十三湖北岸地域に目を転じてみると、大規模城館である福島城跡や唐川城跡、今回の調査対象となっている宗教施設の山王坊¹⁹遺跡、禪林寺跡の伝承を持つ露草遺跡、中世の堅穴造構群が発見されている二ツ沼²⁰遺跡、中世遺物が表採されているオセドウ貝塚、古館遺跡、磯松遺跡など中世遺跡が多数所在している。こうした十三湖北岸の中世遺跡群は近世に「下之切道」と呼ばれるようになる陸路に沿って点在している。この陸路は中世まで遡り、遺跡間を有機的につなぐネットワークを形成していたものと考えられる。「下之切道」は津軽平野内陸部の藤崎から中山（津軽）山地の西側丘陵縁辺部を通って津軽平野を北上し、十三湖を経て小泊まで通じる陸路であり、岩木川水運と同じく重要な交通・交流を果してきたのである。

19 山王坊跡調査団ほか 1987『青森県北津軽郡市浦村山王坊跡 昭和57年度～昭和62年度調査中間報告』北方日本海の中世宗教遺跡研究第1集

20 櫻井清彦 1955『青森県相内村二ツ沼遺跡について』『史觀』早稲田大学史学会編第45巻

このように十三湖という岩木川の河口に営まれた中世港湾都市・十三湊は、岩木川水系と日本海による水上・海上交通の要衝だけでなく、同時に「下之切道」という陸路が交差する場所でもあった。すなわち広義の十三湊の都市領域は、十三湖西岸一帯（十三湊南端周縁部の檀林寺跡・浜明神遺跡を含む）と十三湖北岸地域の「下之切道」に沿った中世遺跡群を含む広大な範囲であったとみられる。そして、十三湖周辺の中世遺跡群はすべて十三湊・安藤氏関連の遺跡とみられ、十三湊遺跡と同じく15世紀中葉にはすべて廃絶したものと考えられる。これらの遺跡からは、今のところ十三湊廃絶以降の遺物、つまり明らかに戦国時代の年代観を示す遺物は含まれていないのである。

ところで、最後に十三湊関連遺跡群で今最も注目されている福島城跡を取り上げておきたい。下之切道沿いに立地する城館で最大級の福島城跡は、現在、青森県教育委員会が平成17年～21年にかけて、土塁や堀跡、区画施設、門跡といった福島城跡に直接関わるとみられる城郭遺構を重点的に発掘調査している。その結果、福島城跡の「外郭東門」や「内郭」といった主要な城郭遺構は、それぞれ安藤氏が繁栄した14世紀後半～15世紀前半に構築されたことが判明している。²¹ 福島城跡はこれまで十三湖という立地環境から、日本海・岩木川水系における海上・水上交通の要衝に位置する城館という捉え方が第一義的に入った。しかし、注目される点は福島城跡「外郭東門」は十三湊へ入るための関所であり、「外郭土壠」は十三湊の都市領域の境界に設けられた防壁ではないかという捉え方である。以上、史跡十三湊遺跡を取り巻く十三湖周辺の歴史的環境が序々に明らかとなってきた。

2. 山王坊周辺出土の中世陶器壺類の事例について

山王坊遺跡とその周辺から出土した中世陶器壺類4点の事例を紹介する。

①珠洲焼壺

石川県能登半島の珠洲窯製品で、ロクロ水挽き成形の壺である。頸部にヘラ記号が認められる。吉岡編年では珠洲I期（12世紀後半）に比定されている。²²

なお、最も早くこの資料を紹介したのは鈴木古親（克彦）氏である。鈴木氏の報告を要約すれば、「出土場所は市浦村相内字赤坂69番地で、佐藤慶治氏の所蔵。法量は器高19.2cm、口径10.7cm、底径7.0cm、胴部最大径16.0cm。火葬による藏骨器として使用された可能性が強いが、出土時には藏骨器の様子はみられなかったといわれる。」となっている。このほかに、地元郷土史家である豊島勝藏氏が『市浦村史』第一巻で紹介している。それによると、笠畠貝塚は佐藤氏とも言われ、かつては五輪塔や鏡（光房の銘）が出土しており、笠畠が「寺屋敷」の跡ではないかという。さらに「佐藤慶治氏所蔵の笠畠出土品」として、五輪塔の火輪のほか、この珠洲焼壺を紹介している。出土地点については、前者と後者で異同がある。所蔵者はすでに故人となっており、詳細は不明であり、正確な出土地は明らかにできない。しかし、赤坂69番地と笠畠貝塚は山王坊川沿いで非常に近い位置関係にあるため、山王坊川沿いから出土したことは間違いないであろう。

21 青森県教育委員会 2006『福島城跡1－第5次調査概要報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第420集
青森県教育委員会 2007『福島城跡2－第7次調査概要報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第440集

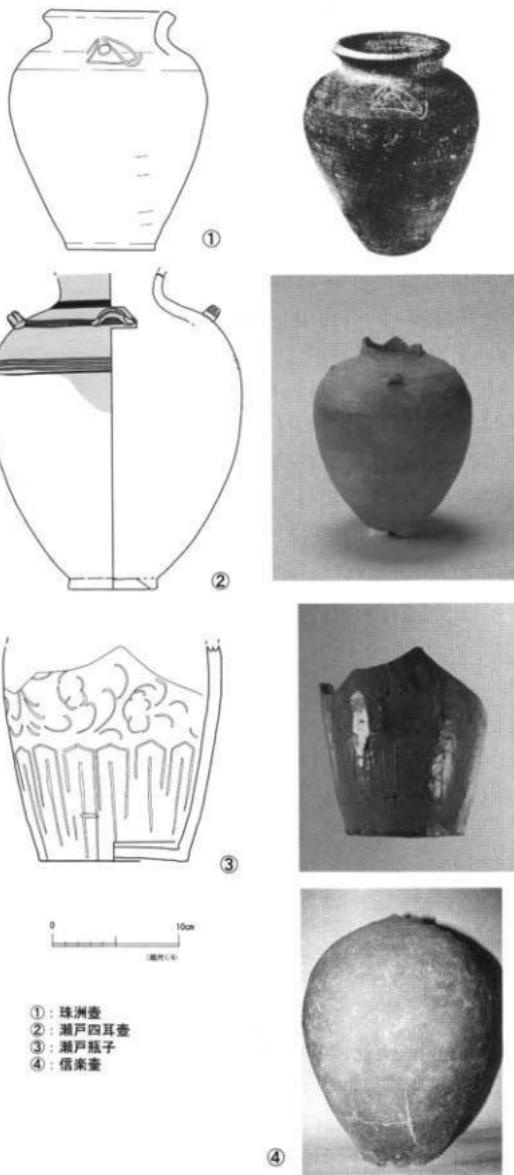
22 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』、資料編珠洲（系）陶器集成 76頁・120頁。

23 鈴木古親 1976『青森県出土の中世陶器二例』『考古風土記』創刊号

24 豊島勝藏編 1984『市浦村史』第一巻、「第七節笠畠（佐藤）貝塚遺跡」の項、117頁。

②瀬戸四耳壺

この資料は從来、愛知県常滑窯の四耳壺とされてきた。しかし、近年の藤澤良祐氏の研究によれば、愛知県の中世瀬戸窯の施釉陶器（いわゆる「古瀬戸」）成立直前の無釉の四耳壺とされるもので、12世紀後葉に位置づけられている。口縁部は欠損しているため残存高24.7cmであり、高台部径7cm、胴部最大径20.2cmの法量を持つ。3～4条の沈線が肩部に3段が巡る。耳は二本の粘土紐からなるものを張り合わせている。胎土は5mm大の白色礫を含むが概ね精良で、焼成は堅緻である。色調は赤褐色～淡黄褐色である。内部には火葬骨・灰のほかに大量の砂が入っている。藏骨器であることは間違いない。なお、山口博之によれば、火葬骨・灰のほかに四耳壺に納められた大量の砂について、砂を使用した呪術、真言土砂加持という葬送儀礼が想定できるとしている。この藏骨器の出土地点も二説あって、実際のところ正確な位置は明らかではない。一説目は『陸奥新報』昭和62年2月26日の記事によるもので、終戦後間もない時期に食糧増産の



①：珠洲壺
②：瀬戸四耳壺
③：瀬戸瓶子
④：信楽壺

25 藤澤良祐 1996 「古瀬戸流通の様相」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念企画展図録

26 山口博之 2002 「第十二章 陸奥の中世墓—火葬と納骨—」『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院

第9図 山王坊周辺出土の中世陶器壺類

ために山王坊一帯が開墾されることになり、その灌漑用水を確保しようと山王坊川の流れを変えたという。その際、河川工事で骨壺が発見されたとする。二説目は、『東奥日報』大正12年7月13日の記事によるもので、太田川と桂川が交わる俗称「中崎」と呼ばれる場所から発見された二個の藏骨器のうちの一つといふものである。これは近隣に禅林寺跡（露草遺跡）が推定されており、かなり信憑性が高いと考えられる。このように正確な出土位置は明らかではないものの、山王坊沢の奥にある山王坊遺跡から出土したものではないことは確かである。

③瀬戸瓶子

愛知県の中世瀬戸窯の施釉陶器、いわゆる「古瀬戸」の瓶子である。粘土紐輪積み成形痕が残る。底部は平底で、器形は梅瓶形となっている。外面全体に灰釉が施されており、体部には印花牡丹唐草文が施されている。法量は底径12cm、上部は大きく欠損しており残存高17cmである。藤澤良祐氏の古瀬戸編年に照らし合わせると、古瀬戸中期前半（中Ⅰ・Ⅱ期）の13世紀後葉～14世紀前葉に相当するものと考えられる。この資料は金木高校相内分校に陳列保管されていたもので、廃校とともに当方に引き取られたものである。近年、この資料が『郷土史相内村』²⁷に記載されていることが判明し、すでに大正時代末～昭和初期には発見されていたのではないかと考えられる。出土地点はやはり不明であるが、「相内尋常高等小学校陳列保存」との記載があることから、相内地区から出土したものが小学校に持ち運ばれたと考えるのが妥当である。筆者は前述した「中崎」から出土した二個の藏骨器のうちの一つではないかと推測している。

④信楽壺

滋賀県信楽窯の壺である。山王坊遺跡から出土したとされ、これまで越前窯の壺として紹介されてきた。²⁸個人蔵。15世紀代であろう。口縁部が欠損しており、やはり藏骨器として利用された可能性が高い。

以上、山王坊周辺出土の中世陶器壺の4事例を紹介した。特徴を挙げるとするならば、①～③の陶器は中世前期に相当する資料であり、正確な地点は明らかにできないものの山王坊沢の開けた沖積地、可能性としては太田川と桂川が交わる俗称「中崎」の地点とその向い側、俗称「四軒屋」と呼ばれる推定「禅林寺跡」の露草遺跡一帯から出土した可能性が高いということである。一方、④の信楽壺は山王沢の奥まった場所の山王坊遺跡から出土したものであり、中世後期の15世紀代に相当する資料である。これらのことから、中世前期の中心城が推定「禅林寺跡」とされる露草遺跡周辺にあり、中世後期になって山王坊遺跡のある山王沢奥に社寺が展開するようになった可能性が高く、今回の発掘調査成果もこのことを裏付けている。

27 『東奥日報』大正12年7月13日の記事、「相内地方史蹟六 十三史談会」の項に記載されている。

28 市浦村史編纂委員会を務めた葛西安十郎氏も著書『市浦その史跡を訪ねて』1985（有）西北印刷の中で、「中崎」から瀬戸四耳壺が出土したとする見解を示している。

29 藤澤良祐 2008「第4章 古瀬戸中期様式の編年」「中世瀬戸窯の研究」高志吉院

30 『郷土史相内村』については、年代・作者不明である。しかし、その内容をよくみると、註25の東奥日報の記事を写していること。また、末尾に掲載されている遺物について、「相内尋常高等小学校陳列保存」とある。相内小学校閉校記念誌2001「がっこ山」の「学校の沿革の概要」によると、大正12年に相内尋常高等小学校と改称され、昭和16年相内国民学校と改称されるまで続いている。つまり、「郷土史相内村」については、大正末～昭和初期に作成されたものと考えられる。

31 安倍・安東氏屋事務局 1989「日本海の駆け踏み 安倍・安東氏展」、3頁。

第4章 調査の成果

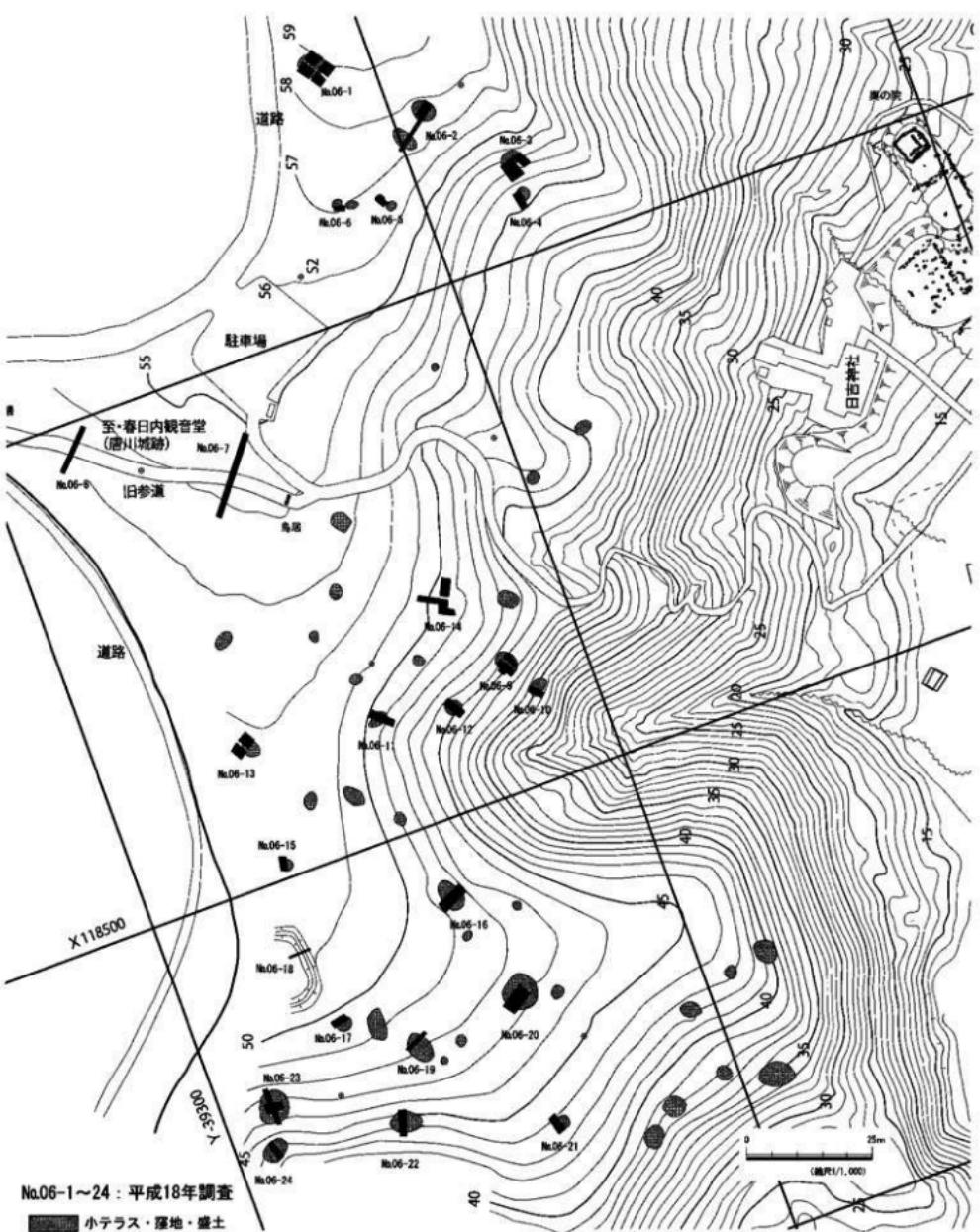
第1節 平成18年度の調査（第10次）

1. 調査の目的と調査位置

第1章で村越氏が示したように、山王坊跡調査団による遺跡中心部の様子（礎石建物跡群）がある程度明らかになってきたものの、遺構が広範囲及んでいる可能性が高く、遺跡がどこまで広がるのか分からなかった。特に史跡指定の要件を満たすためには遺跡の範囲、主要な遺構配置や構造・性格等の把握が必要不可欠であった。そこで、遺跡全体の測量図の作成を行つ一方で、トレンチ調査による遺跡範囲の確認調査を行う必要があった。幸いにも日吉神社中心部の測量図（五所川原県土整備事務所作成）があったので、調査1年目は、周辺部の調査を中心に行うこととした。まずは周辺部全域の踏査を行つて地表面観察をしたところ、山王坊川西岸の丘陵地で、現在の日吉神社本社殿の裏手にあたる場所に多くの窪地、小テラス、起伏のある地形が認められたことから、当初、墓域等の遺構が広がっているのではないかと推測された。これは第4図のD地区に相当する。また、この一帯は山王坊日吉神社から唐川城下の春日内観音堂へ通じる旧参道が残っており、相内地区では正月元日の三宮詣り（相内神明宮一日吉神社—春日内観音堂を巡つて参拝する）の参道として利用されてきたという由来があり、重要な地点と考えられた。そこで、地表面観察によって遺構の存在が推測された24ヶ所の地点（06-1～24トレンチ）を設定して、遺構確認調査を行うこととした。

2. 調査日誌

10月2日に器材の搬入を行う。調査地の丘陵一帯の平坦地や緩斜面に多数の窪地やマウンド状の高まりが確認できたが、黒松やナラなど雜木のほかに熊笹等の下草が深々と生い茂っていた。そこで、まずは地形測量を円滑に進めるため、またはトレンチの確保をはかるために3日から調査区全域の下草の刈払い作業を行つた。11日からは刈払いが終了した地点から地形測量を開始した。19日には遺構を確認するためのトレンチを順次設定し、合計24カ所（06-1～24トレンチ）になった。23日には06-1・2トレンチの調査を行つた。同様に、24日に06-3・7トレンチの調査を行つた。25日には06-4～6・8トレンチの調査を行つた。26日に06-9～11トレンチの調査を行つた。27日には06-9・11トレンチ調査の継続と06-14・22トレンチの調査を行つた。11月1日には06-16・24トレンチの調査を行つた。2日は06-20トレンチの調査を行つた。7日は06-13・17・21トレンチの調査を行つた。村越潔氏・佐藤仁氏（発掘調査指導委員）の現地指導を受ける。8日は06-21トレンチの継続調査を行つた。13日は測量調査の範囲を拡張するため、下草の刈払い作業を行つた。20日にはすべてのトレンチ区の調査を終了した。21日には調査区全体の測量調査も終了した。22日にはすべてのトレンチ区の埋め戻しが終わり、器材の撤収作業を行つた。全日程がこれで終了した。



第10図 平成18年度 山王坊遺跡（D地区）の調査位置

3. 基本層序

山王坊川西岸の丘陵地（D地区）の基本層序を次のように区分した。各層とも自然堆積層からなる。なお、後述する平成19～21年度調査区である山王坊川流域の低地帯の基本層序とは異なる。

第Ⅰ層：黒褐色（10YR2/3）シルト質土、現在の表土層、上層部は腐葉土、しまりソフト、保水性あり。

第Ⅰa層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト質土、盛土以前の旧表土層、しまりハード、保水性あり。

第Ⅰb層：褐色（10YR4/4）ローム質土、盛土以前の旧表土層、しまりややハード、保水性あり。

第Ⅱa層：褐色（10YR4/4）ローム質土、第Ⅲ層の漸移層、炭化物微量に含む、

しまりハード、保水性あり。

第Ⅱb層：明褐色（10YR5/6）ローム質土、第Ⅲ層の漸移層、しまりハード、保水性あり。

後述する06-3トレンチの成果から、縄文晩期の生活面と考えられる。

第Ⅱc層：褐色（10YR4/4）ローム質土、第Ⅲ層の漸移層、しまりハード、保水性あり。

第Ⅲ層：明黄褐色（10YR6/8）ローム質の地山土、しまりハード、保水性あり。

4. 検出遺構と遺物

ここではトレンチ調査区の順に結果を報告する。

06-1 トレンチ（第11図）

山王坊川の西岸丘陵上にある駐車場の中心を基準にしてトレンチの位置を示すと、1トレンチは北東～55mほどの地点にある。丘陵平坦地にマウンド状の高まりが確認できた場所であり、長さ5.8m×5mの矩形にトレンチを設定した。東西、南北方向に幅60cmほどの土層観察用の畔を設け、全体に掘り下げていった。Ⅲ層上面において南北2m、東西推定3mの楕円形プランで、深さ80cmほどの土坑状の掘り込みを確認した。しかし、土層の堆積状況や覆土から判断して、人為的な遺構ではなく、倒木による樹根の隆起等の自然作用によるものと考えられたので、風倒木痕とした。なお、Ⅱa層中から縄文晩期とみられる粗製土器片1点が出土した。摩滅が激しく器形等不明である。

06-2 トレンチ（第12図）

駐車場から北東へ50～60mの地点である。平坦地に起伏と凹みのある場所に、長さ11.3m×幅80cmのトレンチを設定した。調査の結果、北側の凹みのある場所から、炭焼窯とみられる遺構（SC01）の一部をⅢ層上面で検出した。半分ほどの検出状況であったが、平面形は直径1.4mほどの円形とみられる。深さは10～20cmほどの浅いもので、底面の2層では炭化物が充填されている。固化しなかつたが、底面は凸凹している。年代は不明である。また、南側の起伏のある場所では、風倒木痕の影響とみられる土層堆積（①～④層）が確認できた。

1 その他のトレンチ解説も駐車場を基点に位置を示すこととした。なお、山王坊川西岸の平坦地の口吉神社境内入口にある駐車場とは異なる。

2 なお、その他のトレンチでも同様な性格のものを風倒木痕とした。

06-3 トレンチ（第13図）

駐車場から北東へ60mの地点である。丘陵緩斜面の起伏のある場所に5m×4mのトレンチを設定した。中央に観察用の畔を設けて、さらに壁際にサブトレンチを設定して調査した。サブトレンチから、構造遺構（SD01）を検出した。SD01はII b層から掘り込まれている。上端幅70cmあったものが、下方に行くと窄まって幅10cmほどになる。深さは60cmである。Tピットと言われる形状をなしており、繩文時代の狩猟用の落とし穴と思われる。

06-4 トレンチ（第13図）

駐車場から東へ50mの地点である。丘陵緩斜面の窪地に3.5m×1.5mのトレンチを設定した。その結果、炭焼窯とみられる遺構（SC02）の一部をIII層上面で検出した。直径1.2mほどで、平面形は円形とみられる。深さは10cmほどで浅い。底面の4層は炭化物が充填される炭溜りの層となっている。また、底面からは杭で刺したような小ピットが多数検出されている。年代は不明だが、十層をみるとI層からの掘り込みであり、比較的新しいものである。

06-5 トレンチ（第13図）

駐車場から北東へ40mの地点である。平坦地の窪地に2.2m×1.2mのトレンチを設定した。その結果、土層断面で長さ1.5m、深さ15cmほどの深い土坑（SC03）を検出した。1層は炭化物が充填される炭溜りの層であり、炭焼窯或いは焚火跡とみられる。遺構がIII層面にまで達していない。年代は明らかではないが、I層からの掘り込みであり、比較的新しいものと思われる。

06-6 トレンチ（第13図）

駐車場から北東へ30mの地点である。平坦面の窪地に炭焼窯或いは焚火跡とみられる遺構（SC04）を検出した。土層断面で長さ1.2m、深さ20cmをはかる。1層に炭化物が充填される炭溜りの層である。底面付近に一部焼土も確認できた。遺構の掘り込みはIII層面にまで達していない。年代は明らかではないが、I層からの掘り込みであり、比較的新しいものと思われる。

06-7 トレンチ（第14図）

駐車場から南西へ20mの地点である。鳥居が残る旧参道上に長さ17.7m×幅90cmのトレンチを設定した。II a層上面で遺構確認を行ったところ、中央付近に現代の旧参道と重複する形で幅1.5mほどの硬化面を検出したが、特に遺構らしいものはなかった。さらに西側にサブトレンチを設けて、III層上面で精査したが、遺構等は何もなかった。

06-8 トレンチ（第12図）

駐車場から西へ40mの地点である。鳥居が残る旧参道上に長さ10m×幅90cmのトレンチを設定した。II a層上面で遺構確認を行ったところ、中央付近に現代の旧参道と重複する形で幅1.5mほどの硬化面を検出したが、特に遺構らしいものはなかった。さらに西側にサブトレンチを設けて、III層上面で精査したが、遺構等は何もなかった。

06-9 トレンチ（第15図）

駐車場から南東へ80mの地点である。丘陵緩斜面の場所に小テラスが認められたので、長さ4.2m×幅3mのトレンチを設定した。中央に土層観察用の畔を設けて、掘り下げていった。調査の結果、山側を削って平坦面にしていることが分かった。そこに長さ3m、幅が最大1.2mの楕円形形状の土坑（SK01）を検出した。深さは90cmをはかる。SK01の周囲や覆土中からは、鉄滓状の遺物が多数出土したが、自然科学分析の結果、単なる鉄分の高い土砂凝固物であるという（第6章第4節参照）。年代・性格ともに不明の土坑である。

06-10 トレンチ（第15図）

駐車場から南東へ90mの地点である。06-9トレンチに隣接する。やはり丘陵緩斜面の場所に小テラスが認められたので、長さ3m×幅1.2mのトレンチを設定した。調査の結果、小テラスは風倒木の影響によるもので、人為的な痕跡はみとめられなかった。遺構・遺物はなし。

06-11 トレンチ（第16図）

駐車場から南へ80mの地点である。丘陵緩斜面の起伏がある場所に長さ5.2m×幅1.5mのトレンチを設定した。調査の結果、Ⅲ層面上でSD02を検出した。SD02は上端幅70cmあったものが、下方に行くと窄まって幅10cmほどになる。深さは90cmである。Tピットと言われる形状をなしており、縄文時代の狩猟用の落とし穴と思われる。なお、起伏のある地形は土層観察から現代の盛土であることが明らかとなった。

06-12 トレンチ（第16図）

駐車場から南へ80mの地点である。06-11トレンチに隣接する丘陵緩斜面に小テラスが確認できた。そこに長さ4.3m×幅1.6mのトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC05）の一部を検出した。斜面の低い方に盛土をした後、SC05が構築されている。直径1.8mほどで、平面形は円形とみられる。深さは20cmほどで浅い。底面近くの2層は炭化物が充填される炭溜りの層となっている。また、底面では被熱による硬化面が認められる。なお、図化しなかったが、底面は凹凸が激しかった。

06-13 トレンチ（第17図）

駐車場から南西へ80mの地点である。丘陵緩斜面にマウンド状に高く膨らむ地形が認められたので、そこに長さ5m×幅2.6mのトレンチを設定した。さらに壁際にサブトレンチを設定して掘り進めた。調査の結果、土坑状の掘り込みをⅢ層上面で検出したが、風倒木痕とみられるものであった。遺構・遺物はなし。

06-14 トレンチ（第18図）

駐車場から南へ60～70mの地点である。丘陵緩斜面に大きな楕円形の窪んだ地形が認められたので、窪地に合わせて長さ7m×幅1.8mのトレンチを設定し、さらに直交する形で接続するトレンチを2ヶ所設けている。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC06）を検出した。SC06は長軸5.5m×幅1.6

mの長楕円形プランで、深さは20～30cmをはかる。さらに南側に幅60cm、長さ50cmの張り出しを伴っている。底面には杭で刺したような小ピットが北半部を中心認められるほか、長楕円形の真ん中を半分に割るように幅30cm、深さ10cmほどの溝状遺構が長さ5.5mにも渡って検出されている。張り出し部分は炭焼窯に伴う煙出し部分と考えられる。底面から検出された溝状遺構は水分を取り除く排水路の役割を果たしたものと考えられる。なお、SC06はIIa層上面から掘り込まれている。底面の4層は炭化物が充填される炭溜りの層となっている。4層の炭化物をAMS測定による放射性炭素年代測定を行った。その結果示された曆年校正年代は1020～1050AD(22.2%)、1080～1160AD(46.0%)というものであった(第6章第3節)。すなわち平安時代後期から末期に比定される。

06-15 トレンチ(第17図)

駐車場から南西へ100mの地点である。平坦地に窪んだ地形が認められたので、そこに長さ3m×幅1.5mのトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構(SC07)の一部をIIa層上面で検出した。直径1.4mほどで、平面形は円形とみられる。深さは15cmほどで浅い。覆土には炭化物が多く含まれている。また、底面からは杭で刺したような小ピットが3ヶ所検出されている。年代・時期は不明である。

06-16 トレンチ(第19図)

駐車場から南へ120mの地点である。丘陵緩斜面に大きな楕円形の窪んだ地形が認められたので、楕円形の南半分を検出するように、長さ6m×幅2.3mのトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構(SC08)を検出した。SC08の検出長は2.2m、幅2.2mをはかる。半分検出した状態なので、長さは不明であるが、残りの状況から5mはあるものと推測される。やはり長楕円形のプランが想定され、06-14トレンチで検出されたSC06と同じ形態と推測される。深さは20～30cmをはかる。また、底面からは杭で刺したような小ピットが多数検出されたほか、長さ30cmほどの大振りな炭化材が出土している。この炭化材を β 線計算法による炭素年代測定を行ったところ、その測定値は 750 ± 80 yrBPとなつた(第6章第1節)。ADの年代値で示すと、1120～1280ADという結果になり、すなわち平安時代後期から鎌倉時代前半に比定される。なお、炭化材の樹種同定を行った結果、ブナ科ブナ属という結果を得た(第6章第2節)。

06-17 トレンチ(第17図)

駐車場から南西へ135mの地点である。丘陵緩斜面に窪んだ地形が認められたので、そこに長さ3m×幅1.7mのトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構(SC09)の一部をIIa層上面で検出した。直径1.5mほどで、平面形は円形或いは隅丸方形とみられる。深さは10cmほどで浅い。底面の2層は炭化物が充填される炭溜りの層となっている。また、底面からは杭で刺したような小ピットが多数検出されている。年代・時期は不明である。

06-18 トレンチ(第19図)

駐車場から南西へ120mの地点である。平坦地にコの字型の土壘状に盛り上がった地形が認められ

たので、土壘状の高まりを截ち割るように、長さ 4.6 m × 幅 50 cm のトレンチを設定した。調査の結果、現代の盛土であることが判明したが、II a 層中から縄文晩期とみられる粗製土器 2 点が出土した。摩滅が激しく器形等不明である。また、廃土中から同様な 5 点を採取した。

06-19 トレンチ（第 20 図）

駐車場から南へ 140 m の地点である。丘陵緩斜面に起伏がある地形が認められたので、長さ 5 m × 幅 70 cm のトレンチを設定した。調査の結果、06-13 トレンチと同様に風倒木痕とみられる状況が確認できた。遺構・遺物はなし。

06-20 トレンチ（第 20 図）

駐車場から南へ 140 m の地点である。丘陵緩斜面にマウンド状の高まりが認められたので、長さ 5 m × 幅 3 m のトレンチを設定した。壁際にサブトレンチを設けて土層観察したが、人為的な土層堆積は認められなかつた。遺構・遺物はなし。

06-21 トレンチ（第 21 図）

駐車場から南へ 170 m の地点である。緩斜面に窪地が認められたので、長さ 3.8 m × 幅 1.7 m のトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC10）の一部をⅢ層上面で検出した。直径 1.6 m ほどで、平面形は円形とみられる。深さは 10 cm ほどで浅い。底面の 1 層は炭化物が充填される炭溜りの層となっている。また、底面からは杭で刺したような小ピットが多数検出されている。年代は不明である。

06-22 トレンチ（第 21 図）

駐車場から南へ 160 m の地点である。急な傾斜地に小テラスが認められたので、長さ 5.2 m × 幅 1.5 m のトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC11）の一部を検出した。平面形はやや梢円形となるであろうか。直径は判別しない。深さは 20 ~ 30 cm と浅い。七層観察では山側を崩した土を沢側に盛土して小テラスを造成した上で、SC11 を構築していることが分かった。覆土に含まれる炭化物は、これまでのものに比べてやや少なかつた。

06-23 トレンチ（第 22 図）

駐車場から南西へ 150 m の地点である。丘陵緩斜面に大きな梢円形の窪んだ地形が認められたので、梢円形の東半分を検出するように、長さ 8 m × 幅 8 m のトレンチを設定した。その後、南・北・東側にトレンチを拡張した。トレンチは十字型となり、最終的に南北で 7.5 m、東西 3.6 m の長さとなった。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC12）を検出した。SC12 の検出長は 2.3 m、幅 1.7 m をはかる。半分検出した状態なので、全長は不明であるが、残りの状況から 5 m 以上はあるものと推測される。やはり隅丸長方形或いは長梢円形のプランが想定され、06-14・16 トレンチで検出された SC06・08 と同じ形態と推測される。深さは 30 cm をはかる。また、底面からは杭で刺したような小ピットが多数検出された。底面の 3 層は炭化物が充填される炭溜りの層となっており、この炭化物を AMS 測定による放射

性炭素年代測定を行ったところ、その暦年較正年代は 1040 ~ 1160AD であった（第 6 章第 3 節）。すなわち平安時代後期に比定される。

06 - 24 トレンチ（第 22 図）

駐車場から南西へ 160 m の地点である。急な傾斜地に小テラスが認められたので、長さ 4 m × 幅 1.2 m のトレンチを設定した。調査の結果、炭焼窯とみられる遺構（SC13）の一部を検出した。直径 1.4 m ほどで、平面形は円形とみられる。深さは 10 cm ほどで浅い。山側を切り崩して、沢側に盛り土した整地地業を行った上で、SC13 を構築している。覆土には炭化物が少量だが、焼土粒も含まれている。底面は被熱による硬化が認められる。覆土中の炭化物を AMS 測定による放射性炭素年代測定を行った。その結果示された暦年較正年代は 1690 ~ 1730AD (18.8%)・1810 ~ 1920AD (49.4%) であった（第 6 章第 3 節）。近世というよりも近代の可能性が高いものといえる。

5. 小 結

山王坊川の西側丘陵地及び緩斜面（D 地区）において、多数の崖地、起伏のある盛土状の高まりが確認された。ここは山王坊日吉神社から唐川城下の春日内観音堂へ通じる旧参道の周辺であり、当初は丘陵緩斜面に山王坊に関連する墓域が展開するのではないかと期待された。周辺の測量調査と平行して、24 カ所のトレンチ調査（06 - 1 ~ 24）を実施した。その結果、中世とみられる遺構・遺物は確認されなかったが、次の事柄が明らかとなった。

縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の狩猟用の落とし穴と思われる遺構（T ピット）が 2 条検出された。SD01（06 - 3 トレンチ）、SD02（06 - 11 トレンチ）である。06 - 3 トレンチの土層観察によって、II b 層上面が縄文時代の生活面と考えられる。また、それぞれの遺構が等高線に対してほぼ平行して伸びていることから、緩斜面を通過する獲物に対して仕掛けられたものと考えられる。また、周辺の 06 - 1・18 トレンチにおいて、縄文晩期とみられる粗製鉢が出土しており、恐らく SD01・02 もこの時期の所産とみられる。近隣にある大沼周辺には縄文晩期末葉（大洞 A' 式）の岩井大沼遺跡があることから、この時期の狩猟場となっていたものと思われる。

炭焼窯について

今回の調査で注目されたのは、13ヶ所のトレンチで炭焼窯（一部、焚火跡を含む）を検出したことである。炭焼窯としたものは、基本的に覆土に大量の炭化物が充填される炭溜りを伴うものであり、一部に焼土を含むものもある。また、底面が被熱により硬化しているものも認められる。丘陵緩斜面にあるものは山側を切り崩して沢側に盛土をして整地・地業し、窯体を掘り込んで構築しているといった特徴がみとめられる。平面形の違いによって、大きく二類（I・II 類）に分けられる。さらに I 類を二つに細分した。

3 市浦村教育委員会 2001「岩井・人沼遺跡～県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告～」
市浦村埋蔵文化財調査報告書第 12 集

I類：平面プランが直径1.4～1.8mほどの円形タイプで、深さ10～20cmと浅いものである。丘陵の平坦地のほか、急斜面にまで構築されている。次の二つに細分される。

I a類：III層のローム土を掘り込んでおり、底面に杭で刺したような多数の小ピットが認められるものや底面が凸凹になっているもの。次の8遺構が挙げられる。

SC01 (06-2トレンチ)、SC02 (06-4トレンチ)、SC05 (06-12トレンチ)、
SC07 (06-15トレンチ)、SC09 (06-17トレンチ)、SC10 (06-21トレンチ)、
SC11 (06-22トレンチ)、SC13 (06-24トレンチ)

I b類：III層のローム土を掘り込まないものであり、炭焼窯というよりも焚火跡にふさわしいもの。次の2遺構が挙げられる。

SC03 (06-5トレンチ)、SC04 (06-6トレンチ)

II類：標高48～50mの範囲で、丘陵の平坦面から緩斜面に変化する傾斜返還点に相当する場所に設けられている。長軸5～5.5m、幅1.6～2.2mほどの長楕円形或いは隅丸長方形のプランで、深さは20～30cmに及んでおり、堅穴状に座む半地下式タイプである。

底面には杭で刺したような多数の小ピットが認められる。次の3遺構が挙げられる。

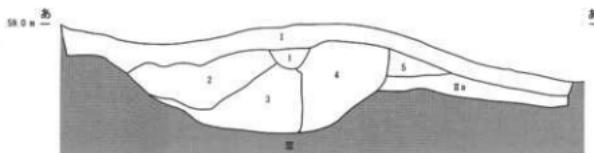
SC06 (06-14トレンチ)、SC08 (06-16トレンチ)、SC012 (06-23トレンチ)

この中で完掘したSC06については、煙出し部分と推定される付属的な突出部分や、さらに底面に排水のための溝状遺構を伴うことが判明している。

以上、山王坊遺跡では二種類の炭焼窯が認められるが、この中でII類とした炭焼窯と類似する遺構が下北郡東通村南通遺跡で確認されている。その報文によれば、遺構の構造から伏焼法によるものと考えられており、II類も同様であろう。地面を大きく掘り下げて、その中に木材を積み重ねて、上部に土をかけて蒸し焼きにする最も原始的な製炭法であるといふ。炭焼窯内部で検出された炭化材は樹木の枯死（伐採）年代に近く、炭素年代測定法で得られた値は炭焼窯の稼働時期をそのまま示しているものと考えられる。分析結果が示すように、II類の炭焼窯の構築年代については、平安時代後期（SC06・SC012）を中心に稼働し、遅くても鎌倉時代前半（SC08）には終焉を迎えるものと考えられる。

一方、I類とした炭焼窯は極めて小規模なものである。地山を掘り込んでいるが、極めて浅い形状である。底面に認められる杭状の小ピットは木炭材を突き立てて配置した状況を示すものと推測されるが、製炭の過程は全く不明である。I類の構築年代については、SC13の炭素年代測定の事例しかないが、近世というよりも近代の可能性が高いという結果となっている。I類のSC02はI層からの掘り込みでもあり、新しい時期に構築されていることが層位からも明らかである。その他のI類についても新しい時期の可能性が極めて高いと考えられる。今後は民俗学的事例との比較研究も必要である。

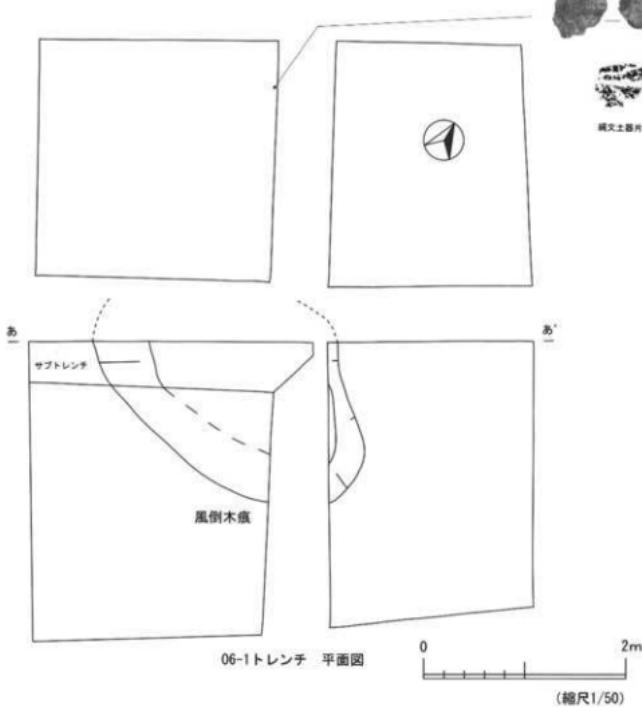
4 青森県教育委員会 1983「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
前坂下（13）追跡・南通追跡・銅屋（1）追跡」



06-1トレンチ 断面図

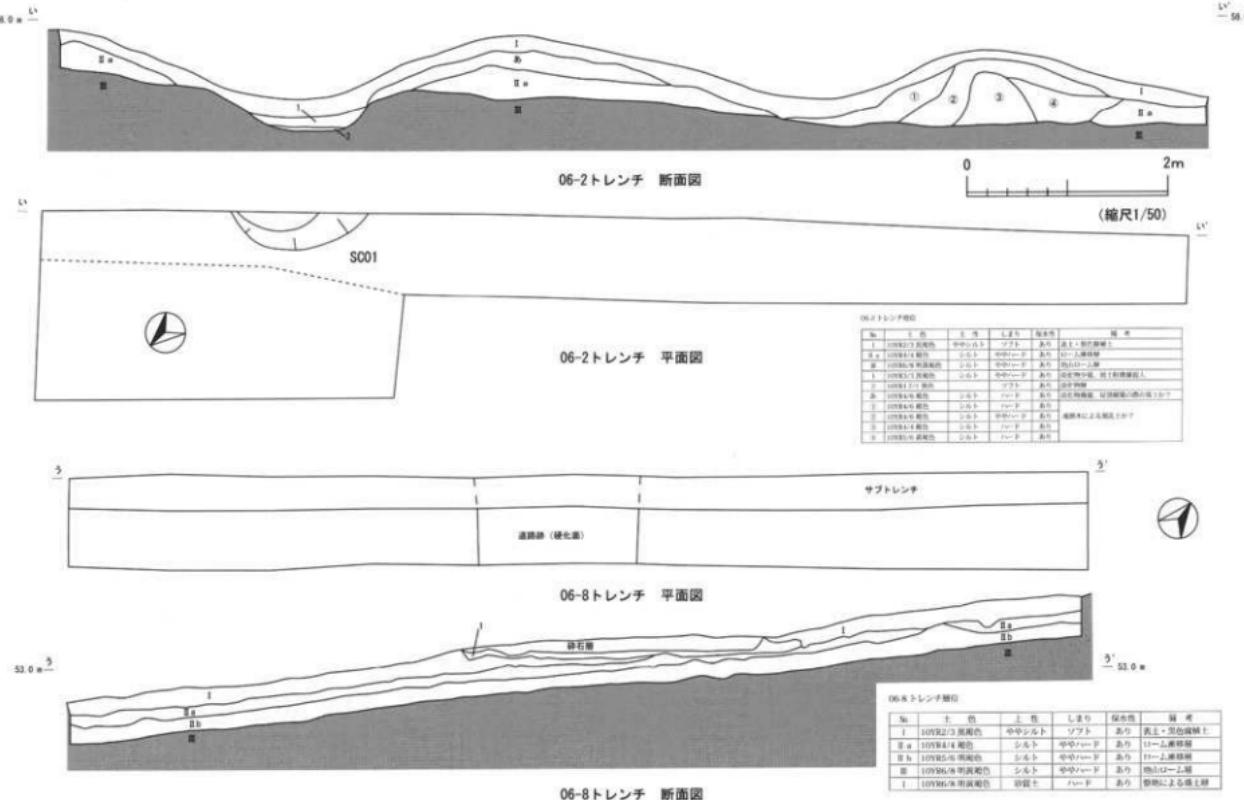
06-1トレンチ断面

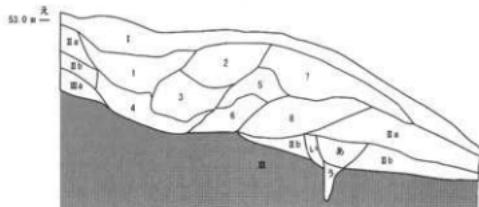
%	上色	土性	しまり	保水性	備考
I	10YR2/2 黒褐色	砂やシルト	ツブト	あり	表土・黒色腐植土
II a	10YR4/4 暗褐色	シルト	ややツブド	あり	ローム層付近
III	10YR6/4 明黄褐色	シルト	ややツブド	あり	地山ローム層
1	10YR4/6 褐色	シルト	ややツブド	あり	
2	7.5YR5/6 切割色	シルト	ツブド	あり	炭化物塊体に富む
3	7.5YR5/8 明褐色	シルト	ややツブド	あり	
4	10YR4/6 褐色	シルト	ツブド	あり	炭化物塊体に富む
5	10YR4/6 褐色	シルト	ややツブド	あり	



第11図 06-1トレンチ 平面図・断面図

第12図 06-2・8トレーニチ 平面図・断面図

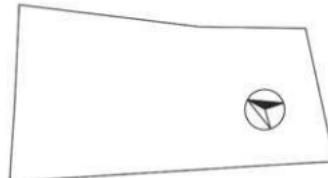




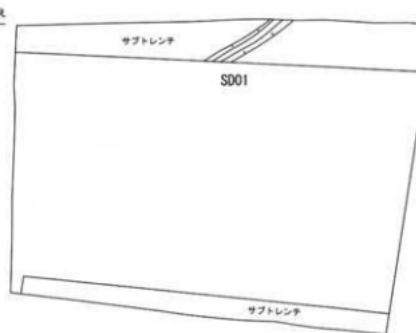
06-3トレンチ 断面図

(06-3トレンチ断面)

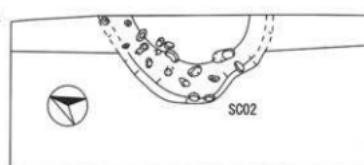
No.	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
1	(06031-2) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
2	(06031-3) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
3	(06031-4) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
4	(06031-5) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
5	(06031-6) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
6	(06031-7) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
7	(06031-8) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
8	(06031-9) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
9	(06031-10) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
10	(06031-11) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂



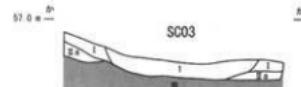
06-3トレンチ 平面図



06-3トレンチ 平面図



06-4トレンチ 平面図

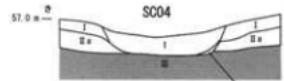


06-5トレンチ 断面図

No.	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
1	(06032-1) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
2	(06032-2) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
3	(06032-3) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
4	(06032-4) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂

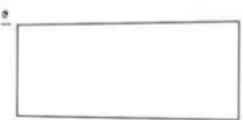


06-5トレンチ 平面図



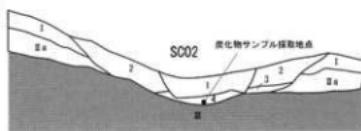
06-6トレンチ 断面図

No.	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
1	(06033-1) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
2	(06033-2) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂
3	(06033-3) 黄褐色	シルト	砂	砂	粘土	砂	砂	砂	砂	砂



06-6トレンチ 平面図

0
2m
(縮尺1/50)

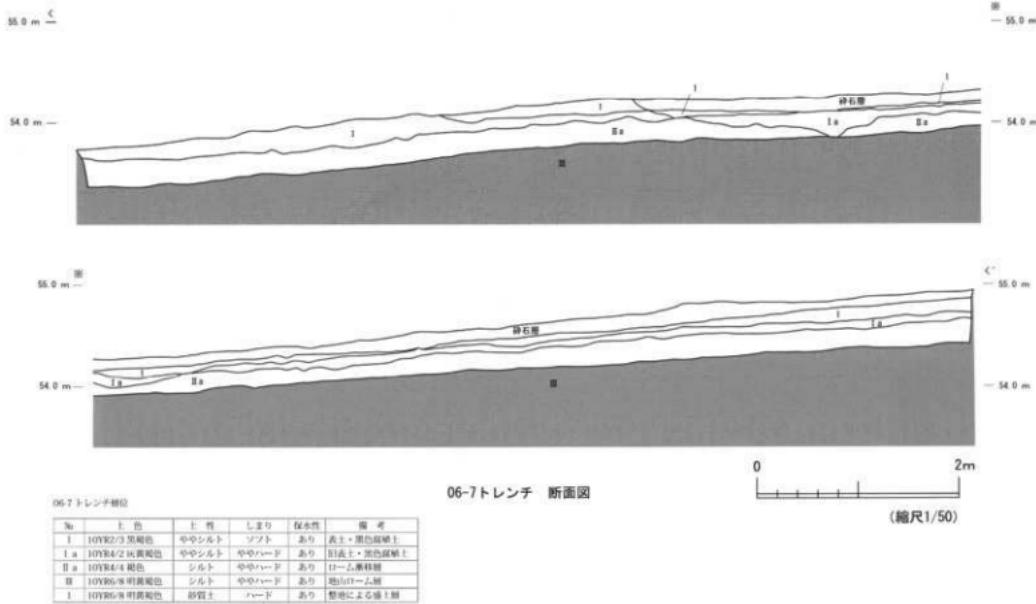


06-4トレンチ 断面図

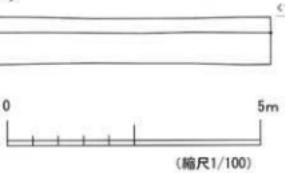
No.	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
1	(06042-1) 黄褐色	中砂	シルト	ソフト	砂	砂	砂	砂	砂	砂
2	(06042-2) 黄褐色	シルト	シルト	ソフト	砂	砂	砂	砂	砂	砂
3	(06042-3) 黄褐色	シルト	シルト	ソフト	砂	砂	砂	砂	砂	砂
4	(06042-4) 黄褐色	シルト	シルト	ソフト	砂	砂	砂	砂	砂	砂

第13図 06-3～6トレンチ 平面図・断面図

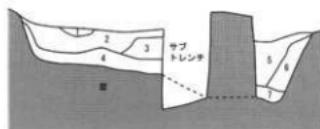
第14図 06-7トレーンチ 平面図・断面図



06-7トレーンチ 平面図

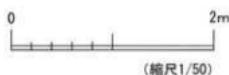


44.0 m



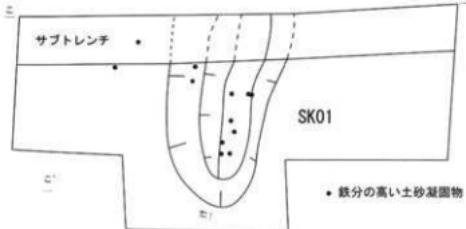
06-9トレンチ 東西断面図

北



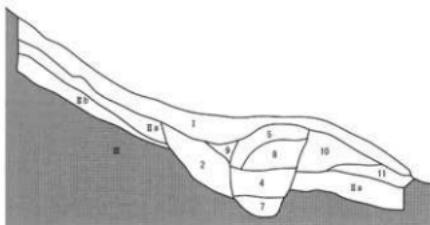
(縮尺1/50)

北



06-9トレンチ 平面図

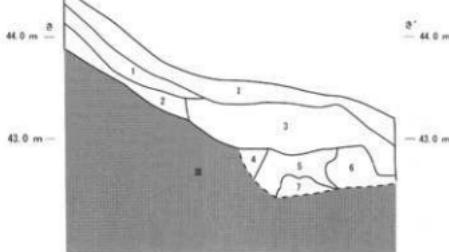
45.0 m



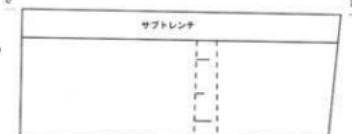
06-9トレンチ 南北断面図

06-9トレンチ断面

No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	サルシット	ソフト	あり	表土・黑色腐植土
2	10YR6/8 黄褐色	シルト	サルシット	あり	地山・ローム層
3	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	ハード	あり	3mm～5cm 大の石礫少量含む
4	10YR4/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	5mm～5cm 大の石礫少量含む
5	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	5mm～5cm 大の石礫少量含む
6	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	5mm～3cm 大の石礫少量含む
7	10YR4/4 黄褐色	シルト	ソフト	あり	



06-10トレンチ 断面図



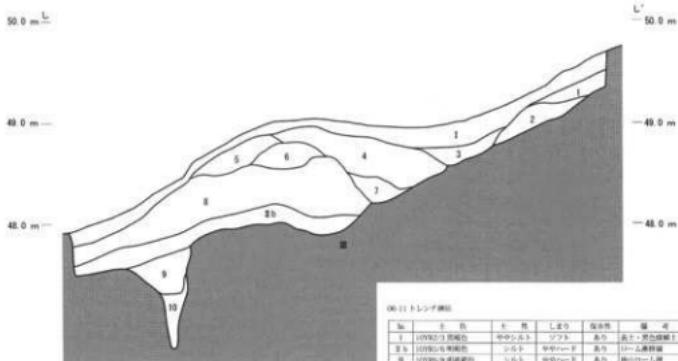
06-10トレンチ 平面図

06-10トレンチ層位

No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	サルシット	ソフト	あり	表土・黑色腐植土
2	10YR6/8 黄褐色	シルト	サルシット	あり	地山・ローム層
3	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	ハード	あり	3mm～5cm 大の石礫少量含む
4	10YR4/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	1～2cm 大の石礫少量含む
5	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	
6	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	
7	10YR4/4 黄褐色	シルト	ソフト	あり	

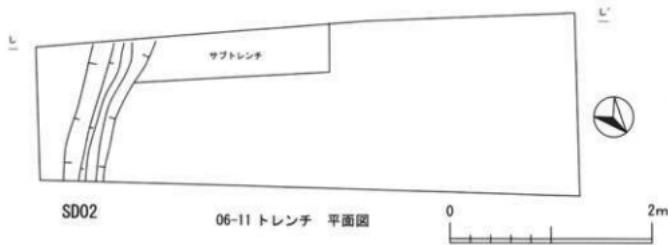
※ 3～7は既例木による推移か?

第15図 06-9・10トレンチ 平面図・断面図

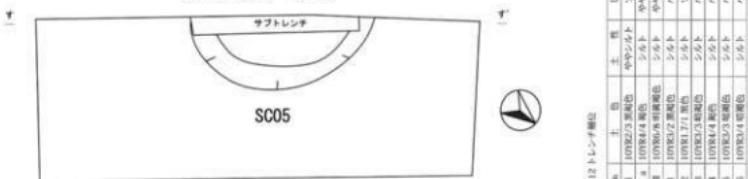


06-11 トレンチ 断面図

No.	ナ. カ.	キ. 特	しまり	保水性	層. 号
1	010923.3 黄褐色	サルシベト	ソフカト	高さ	黄土化地盤上
2	010924.0 黄褐色	シルト	サルリード	あり	リム風成層
3	010924.1 黄褐色	シルト	サルリード	なし	地表付近
4	010924.2 黄褐色	シルト	サルリード	なし	
5	010924.3 黄褐色	シルト	サルリード	なし	
6	010924.4 黄褐色	シルト	サルリード	なし	
7	010924.5 黄褐色	シルト	サルリード	なし	
8	010924.6 黄褐色	シルト	サルリード	なし	
9	010924.7 黄褐色	シルト	サルリード	なし	リムの層上
10	010924.8 黄褐色	シルト	サルリード	なし	リムの層上

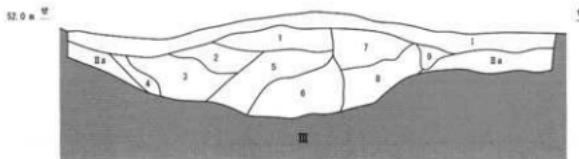


06-12 トレンチ 断面図



06-12 トレンチ 平面図

第 16 図 06-11・12 トレンチ 平面図・断面図



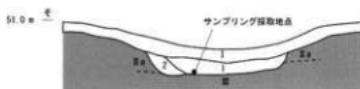
06-13 レンチ 断面図

06-13 レンチ断面

No.	土色	土性	しまり	保水性	腐朽
1	10YR4/3 黄褐色	中砂シルト	ソフト	あり	表土・地衣被覆土
2 a	10YR4/4 黄褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
2 b	10YR5n5 呈眞褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
3	10YR5n6 黄褐色	シルト	ハード	なし	地山ヒーム層
4	10YR4/3 黄褐色	シルト	ハード	なし	
5	7.5YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	なし	
6	7.5YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	なし	
7	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	なし	
8	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	なし	
9	10YR4/3-5 黄褐色	シルト	ハード	なし	

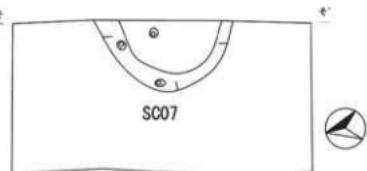


06-13 レンチ 平面図



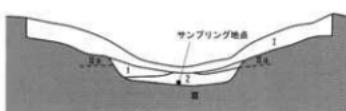
06-15 レンチ 断面

No.	土色	土性	しまり	保水性	腐朽
1	10YR4/3 黄褐色	中砂シルト	ソフト	あり	表土・地衣被覆土
2 a	10YR4/4 黄褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
2 b	10YR5n5 呈眞褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
1	10YR4/4 黄褐色	中砂シルト	ハード	あり	地山ヒーム層
2	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	地山ヒーム層



06-15 レンチ 平面図

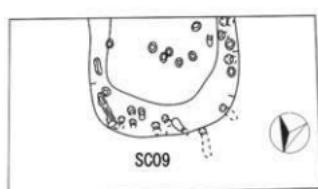
た



06-17 レンチ 断面図

06-17 レンチ断面

No.	土色	土性	しまり	保水性	腐朽
1	10YR4/3 黄褐色	中砂シルト	ソフト	あり	表土・地衣被覆土
2 a	10YR4/4 黄褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
2 b	10YR5n5 呈眞褐色	シルト	中砂ハード	あり	ヨーハム黒鉄土
1	10YR4/2 黄褐色	シルト	中砂ハード	あり	地山ヒーム層
2	10YR4/7.1 黄褐色	シルト	ソフト	あり	地化物被覆



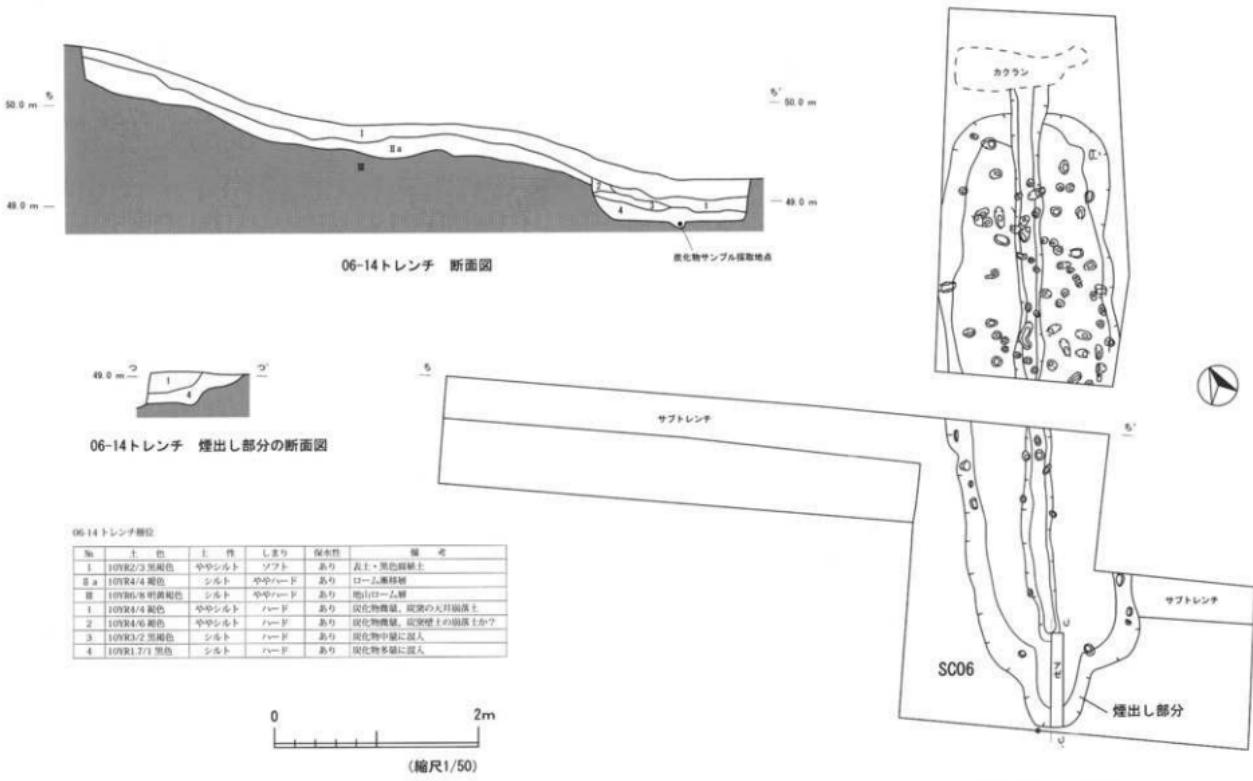
06-17 レンチ 平面図

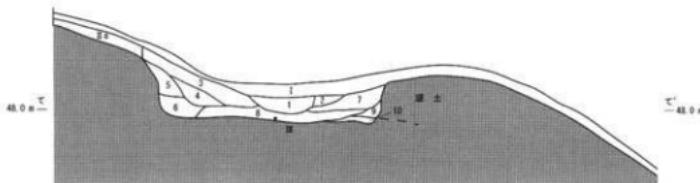
0
2m
(縮尺1/50)

第17図 06-13・15・17 レンチ 平面図・断面図

第18図 06-14 トレンチ 平面図・断面図

- 48 -

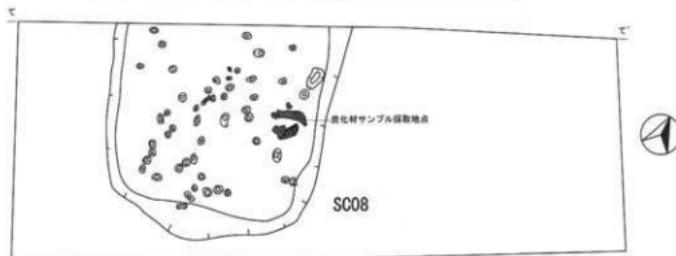




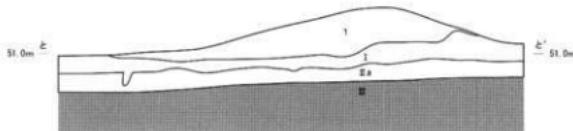
06-16トレンチ 断面図

06-16 トレンチ剖位

No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
1	10VR2/3 黒褐色	ややルート	ソフト	あり	表土・黒色腐葉土
II a	10VR4/4 黄褐色	シルト	ややハード	あり	白一ム赤鉄鉱
III	10VR6/8 明黄褐色	シルト	ややハード	あり	鈍山ローム層
I	10VR2/1 黑色	シルト	ややソフト	あり	炭化物飛散に嵌入
2	10VR4/3 にぶく黒褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散に嵌入
3	10VR4/2 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散に嵌入
4	10VR4/6 黄褐色	シルト	ややハード	あり	炭化物飛散に嵌入
5	10VR6/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散に嵌入
6	10VR4/4 黄褐色	シルト	ややハード	あり	炭化物飛散に嵌入
7	7.5VR4/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散に嵌入
8	10VR1.7/1 黑色	シルト	ややハード	あり	炭化物飛散
9	10VR5/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散に嵌入
10	10VR3/3 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物飛散、土軽飛散に嵌入



06-16トレンチ 平面図



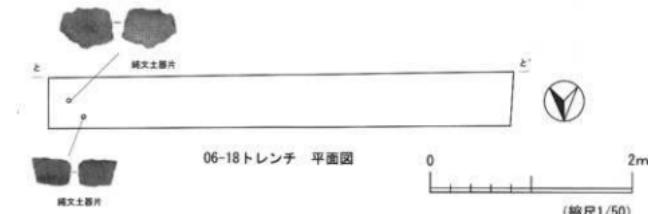
06-18トレンチ 断面図

06-18 トレンチ剖位

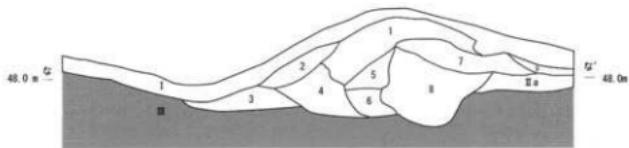
No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
I	10VR2/3 黒褐色	ややシルト	ソフト	あり	表土・黒色腐葉土
II a	10VR4/4 黄褐色	シルト	ややハード	あり	白一ム赤鉄鉱
III	10VR6/8 明黄褐色	シルト	ややハード	あり	鈍山ローム層

10VR3/4 黄褐色

ややシルト ソフト



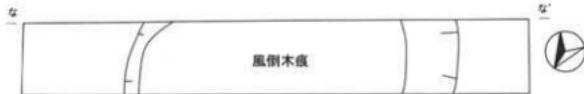
第 19 図 06-16・18 トレンチ 平面図・断面図



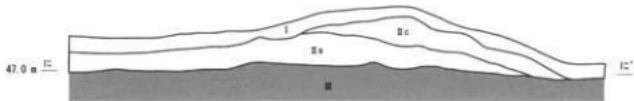
06-19トレンチ 断面図

06-19トレンチ部位

No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
I	10YR2/3 黒褐色	ややシルト	ソフト	あり	表土・黒色腐植土
II a	10YR4/4 剛色	シルト	ややハード	あり	ローム・堅硬層
II	10YR6/4 明黄褐色	シルト	ややハード	あり	地山ローム層
1	7.5YR5.6明褐色	シルト	ハード	あり	炭化物微量に混入
2	7.5YR4/4 剛色	シルト	ハード	あり	
3	10YR4/4 剛色	シルト	ハード	あり	
4	7.5YR4/4 剛色	シルト	ややハード	あり	
5	7.5YR5/6明褐色	シルト	ハード	あり	
6	7.5YR4/6褐色	シルト	ハード	あり	
7	10YR4/6褐色	シルト	ややハード	あり	炭化物微量に混入
8	10YR5/6 深褐色	シルト	ややハード	あり	炭化物微量に混入
9	10YR4/4 剛色	シルト	ややソフト	あり	



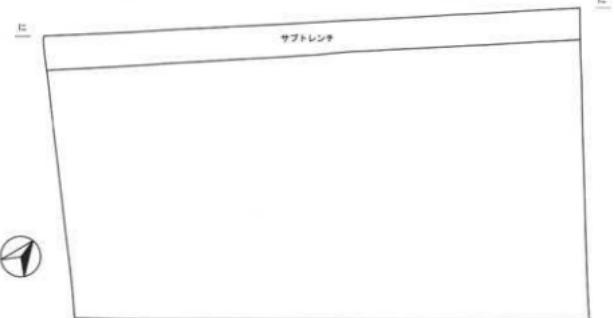
06-19トレンチ 平面図



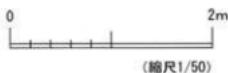
06-20トレンチ 断面図

06-20トレンチ部位

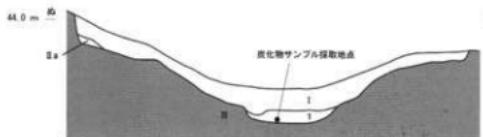
No.	土色	土性	しまり	保水性	備考
I	10YR2/3 黒褐色	ややシルト	ソフト	あり	表土・黒色腐植土
II a	10YR4/4 剛色	シルト	ややハード	あり	ローム・堅硬層
II c	10YR4/4 剛色	シルト	ややハード	あり	
III	10YR6/8 明褐色	シルト	ややハード	あり	地山ローム層



06-20トレンチ 平面図



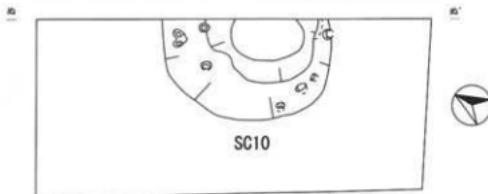
第 20 図 06-19・20 トレンチ 平面図・断面図



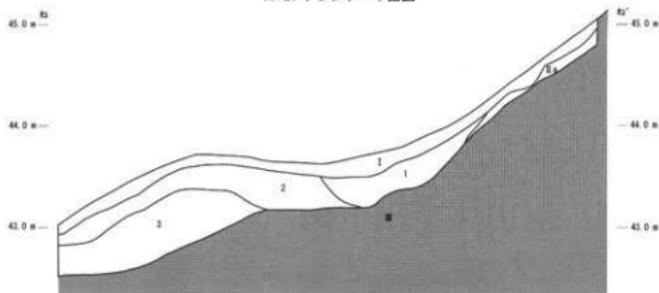
06-21 トレンチ 断面図

06-21 トレンチ断面

No	土色	土性	しまり	保水性	備考
1	10VR2/3 黒褐色	ややシルト	ソフト	あり	表土・黑色腐植土
II a	10VY4/4 黄褐色	シルト	ややハード	あり	ローム層
II b	10VY6/8 咸褐色	シルト	ややハード	あり	泥岩
1	10VY2/1 黒色	シルト	ややハード	あり	炭化物多量、鉄土粒微細に混入



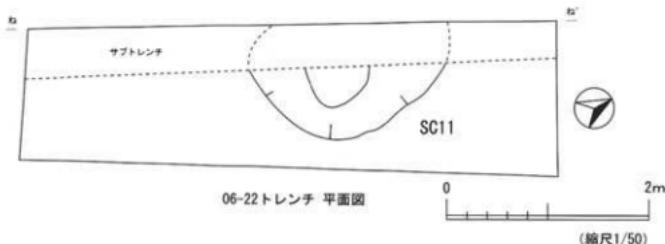
06-21 トレンチ 平面図



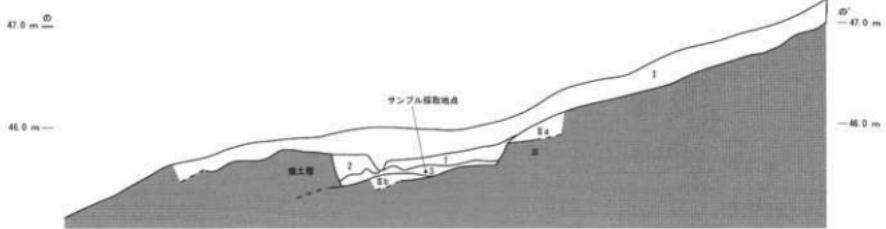
06-22 トレンチ 断面図

06-22 トレンチ断面

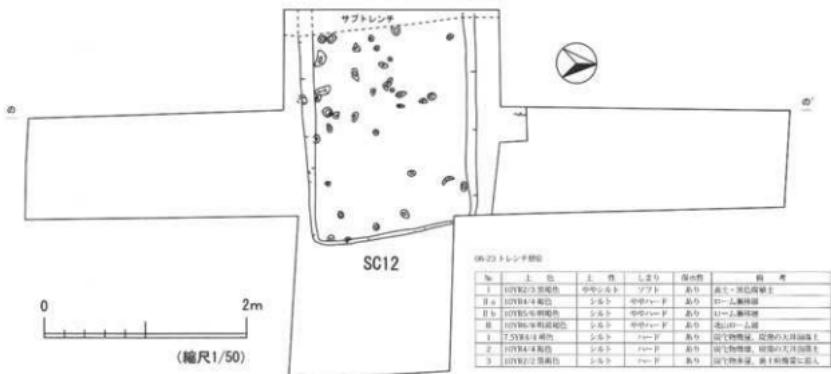
No	土色	土性	しまり	保水性	備考
1	10VY2/3 黒褐色	ややシルト	ソフト	あり	表土・黑色腐植土
II a	10VY4/4 黄褐色	シルト	ややハード	あり	ローム層
II b	10VY6/8 咸褐色	シルト	ややハード	あり	泥岩
1	10VY2/3 黑褐色	シルト	ハード	あり	炭化物微量に混入
2	7.5YR4/6 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物微量に混入
3	10VY4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	炭化物微量に混入



第 21 図 06-21・22 トレンチ 平面図・断面図



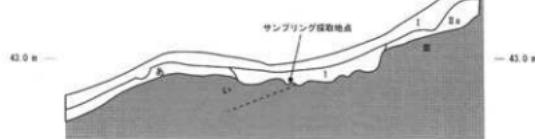
06-23 トレンチ 断面図



06-23 トレンチ 平面図

44.0 m

— 44.0 m

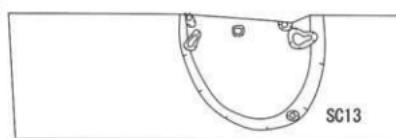


06-24 トレンチ 断面図

No.	土色	土性	しまり	保水性	固有
I	10YR2/2 暗褐色	砂質シルト	ツブリ	あり	赤土・黒化腐植土
II a	10YR4/4 黄褐色	シルト	中やハード	あり	ローム・黒化腐植
II b	10YR5/6 明瞭褐色	シルト	中やハード	あり	ローム・黒化腐植
III	10YR6/6 明瞭褐色	シルト	中やハード	あり	ローム・黒化腐植
1	7.5YR4/4 黄色	シルト	ハード	あり	赤土・物産層、炭酸の入る鉄鉱土、鉄は鉄錆層に形成している。
2	10YR4/2 黄褐色	シルト	ハード	あり	赤土・物産層に形成
3	10YR4/4 黄褐色	シルト	ハード	あり	赤土・物産層に形成

06-24 トレンチ 断面図

は



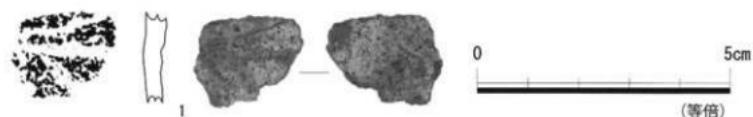
06-24 トレンチ 平面図

0 2m

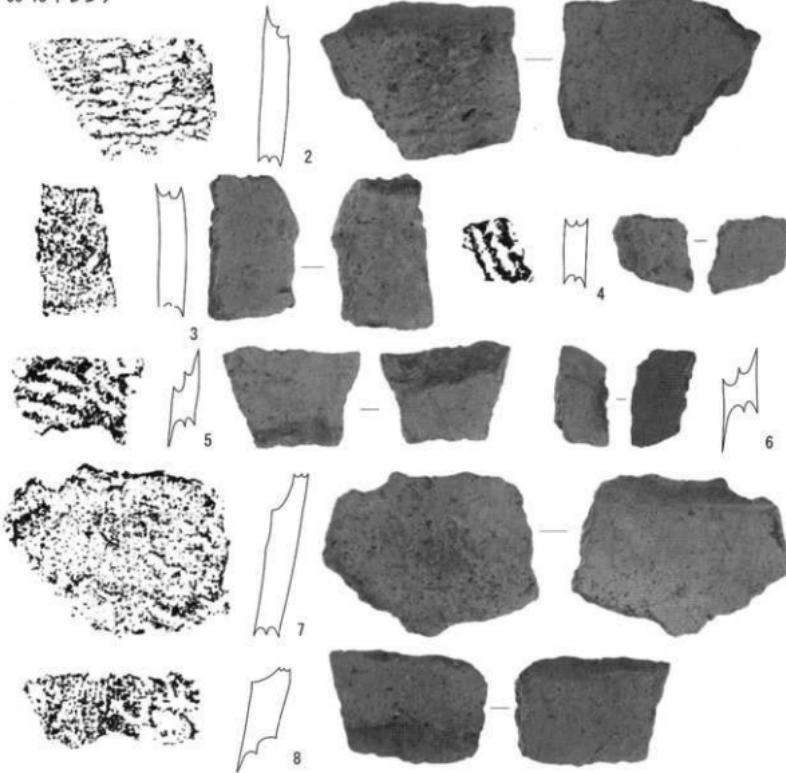
(縮尺1/50)

第 22 図 06-23・24 トレンチ 平面図・断面図

06-1 トレンチ



06-18 トレンチ



第23図 2006年度(平成18年度)出土遺物

第3表 2006年度出土遺物一覧表

番号	トレンチ名	層位	レベル	種類	器種	備考	整理番号
1	06-1 トレンチ	II a層 廃土中	58.463	縄文土器	鉢	縄文晩期、粗製土器、摩滅著しい	06-01
2	06-18 トレンチ		—				06-02
3			—				06-03
4			—				06-05
5			—				06-04
6			—				06-06
7			50.718				06-07
8			50.739				06-08

第2節 平成19年度の調査（第11次）

1. 調査の目的と調査位置

昨年度では、山王坊川の西側丘陵地帯（D地区）の調査を行ったが、調査の対象時期となる中世の遺構・遺物はほとんど確認されなかった。そのため、調査2年目となる平成19年度は山王坊川の西側平坦地（B地区）で調査を行った。B地区は山王坊跡調査団によって礎石建物跡等による社殿列跡がすでに確認されており、山王坊遺跡の中心域とみなされていた。しかし、第1表に示したこれまでの山王坊遺跡に関する報告書・論考等では、検出された礎石建物群の層位や出土遺物の地点・層位も不明であり、そこから導きだされる遺構の年代が必ずしも明らかにされていなかった。そのため、これらの社殿列跡が本当に中世遺構かどうか改めて確認する必要があった。また、新たな遺構の有無を確認するため、杉林の間で調査可能な地点を選定して、トレーニングを設定した。全部で12ヶ所の地点（07-1～12トレーニング）を設定して、確認調査を行った。

2. 調査日誌

10月15日から調査を開始した。発掘器材を現地に搬入し、調査区域（B地区）の下草の刈払い作業を行う。16日は07-1～7までのトレーニングを設定し、07-1～3・7トレーニングの調査を開始する。19日には07-1～7トレーニングの掘削作業を開始する。22日は07-4～6トレーニング調査の掘削作業を開始する。23日に坂田泉氏（発掘調査指導委員）の現地指導を受ける。24日には07-1トレーニングの拡張を行う。26日には07-4～6トレーニング調査の遺構検出作業を行う。29日に佐藤智雄氏（発掘調査指導委員）の現地指導を受ける。07-1～5トレーニングの遺構検出作業を行う。30日には新たに07-8～10トレーニングを設定し、掘削作業を開始する。07-2～6トレーニングの遺構検出作業を行う。31日に佐藤仁氏（発掘調査指導委員）の現地指導を受ける。07-3・8・9トレーニングの遺構精査・写真撮影・実測作業を行う。11月1日には07-4・6トレーニングの遺構精査・写真撮影・実測作業を行う。5日には07-5トレーニングの実測作業、07-10トレーニングの遺構精査・写真撮影・実測作業を行う。6日には07-1・2トレーニングの遺構精査・写真撮影・実測作業を行う。また、トータルステーションを用いて、トレーニング位置図を作成した。7日には、ピンポールによるボーリング調査を行い、07-11・12トレーニングで新たに礎石の存在が確認された。07-11・12トレーニングの本格的な調査は来年度行うことにして、調査途中で終了した。8日にはトレーニングの埋め戻し作業を行う。9日には器材を撤収し、発掘調査を終了した。

3. 基本層序

山王坊川沿いの平坦地（B・C・E・F・G地区）の基本層序については、第3章第1節の川村眞一氏の論考に詳しいので、そちらを参照いただきたい。なお、検出遺構と層位関係について示した考古学的知見は、「第4章第3節3. 基本層序」の項で詳細に述べることとする。

4. 検出遺構と遺物

ここではトレンチの順に調査成果を報告する。

07-1 トレンチ（第24図）

山王鳥居から西へ15mほどの地点である。昭和62年度に調査された際に集石遺構が検出されていて、詳細な記録報告がなく不明だったので、改めて調査を行った。まず表土を剥ぐと、調査後に埋めもどされた山砂が確認できたので、さらにこれを除去していくと、東西2.7m×南北3mの範囲で調査区が確認できた。そこには東西2.7m×南北2mの三角形状に礫や河原石が集中するSX01集石遺構を検出した。直径40～50cm大の河原石が10点ほど集まり、その間に10～20cmほどの拳大の礫が充填している。河原石の中には扁平な面を持つ礫石として利用されたとみられるものが一部含まれている。また、拳大の礫には二次被熱とみられる赤変した礫も含まれている。SX01からは遺物は出土していないが、中世の遺物包含層であるⅢa層上面で検出されている。この集石が一部Ⅲa層にも入り込んでいるので、中世の段階に廃棄された集石遺構と考えられる。また、トレンチ周囲をピンポールによるボーリング調査を行ったところ、トレンチ東側の隣接した場所に新たに礎石とみられる大石が想定されたので、東西3.7m×南北1.9mの拡張区を設けて調査した。その結果、SX01が検出された下層のⅢb層上面において、礎石3点（礎石No.221～223）、建物の土壁跡とみられるスサ入りの焼土、炭化材、被熱して赤変した拳大～人頭大の礫がブロック状に検出された。これらは焼失した建物跡の廃材をまとめて廃棄した火事場整理の跡と考えられる。ただし、礎石3点は赤変しておらず、直接火を受けてはいないようである。Ⅲb層上面に礎石3点が据え置かれており、Ⅲb層は礎石整地層と考えられる。また、礎石No.223の付近のⅢa層中から瓦質土器の風炉片1点が出土しており、15世紀代とみられる。なお炭化材サンプルをAMS測定による放射性炭素年代測定を行った。その結果示された暦年較正年代は1278～1381ADであった（第6章第5節）。これは樹木の枯死（伐採）年代に近い値を示しており、伐採後に木材として利用された期間を考慮すると、おおむね陶磁器が示す15世紀前半で火を受けて、廃棄されたものと思われる。なお、炭化材の樹種はアスナロ（ヒノキ科アスナロ属）であった（第6章第6節）。

07-2 トレンチ（第24図）

山王鳥居から西へ20mほどの地点で、07-1トレンチに隣接する。杉林の間を選んで、東西8.6m×幅1.4mのトレンチを新たに設定した。I層を剥ぐと、トレンチ西側で間伐材とみられる丸太材や抜根跡が検出された。近現代のものであろう。さらにトレンチの北側にサブトレンチを設定し、IV層の河床礫層まで掘り下げた。その結果、トレンチ東端は基本層序（I～IV層）が残っていたが、トレンチ中央から西端は大きく搅乱を受けていることが分かった。中世の遺構・遺物はなかった。

07-3 トレンチ（第25図）

山王鳥居から北西へ40mの地点で、07-6トレンチに隣接する。杉林の間を選んで、長さ8.6m×幅1.4mのトレンチを新たに設定した。I層を剥ぐと、トレンチ西側で間伐材とみられる丸太材が多数検出された。また、トレンチ中央で樹木の抜根跡が検出された。やはり近現代のものであろう。I層中

からは明治以降とみられる肥前系磁器碗、ビール瓶が出土している。トレント北側にサブトレントを設定し、丸太材の範囲を除いて、IV層の河床礫層まで掘り下げた。その結果、II層が全体に認められないこと。また、サブトレント東半分が大きく搅乱を受けていることが分かった。中世の遺構・遺物はなかった。

07-4 トレント（第25図）

山王鳥居から北西へ25mの地点である。昭和62年度の調査で社殿跡の境界をなす「玉垣跡又は大垣跡」と推定された場所を改めて調査した。今回、長さ7.2m×幅1.0mのトレントを設定した。I層を除くと、調査後に埋めもどされた山砂が現れたのでこれを除去した。その結果、拳大から人頭大の河原石が2~3個の塊で列状に並んで検出された。河原石はIII層中に入り込んでおり、中世の遺構である。河原石の規模もまちまちで、必ずしも表面が平滑ではなく、間隔も不統一で、建物の礎石になりにくいと思われた。ただし、トレント南端で検出された河原石は唯一礎石になりうる可能性がある。こうした遺構が「玉垣跡又は大垣跡」といった性格のものかは判断できなかつたが、中世遺構であることは確実であった。また、河原石の下に入り込むように抜根跡とみられる溝が走っている。また、トレント北側で大きな穴があいていた。この断面を観察すると、III層は50cmと厚くて、4層に細分できる。出土遺物なし。

07-5 トレント（第26図）

山王鳥居から南南西へ30mの地点である。樹木の間を選んで、長さ9.5m×幅1.0~2.5mのトレントを新たに設定した。調査を進めていくと、まずトレント中央部で拳大ほどの礫が、IIIa上面において直径1mの円形状で検出された（Aブロック）。続いてトレント北側でIIIb層上面から拳大の礫がまばらに検出された（Bブロック）。IIIa層中からは不明鉄製品1点、先端部に加工痕がみられるガラス未製品1点（第6章第4節）、白磁丸皿1点（白磁D群）が出土した。その後、トレント南側では、IIIb層中から拳大～人頭大の角礫、河原石が検出された（Cブロック）。南端で検出された河原石は長さ50cmで、上面は平滑となっており、礎石に利用された可能性が考えられるものである。このように、三ブロックごとで検出された礫・河原石が層位を異にしている状態であった。またトレント東壁にサブトレントを設けて掘り下げたところ、IV層の河床礫を多く検出した。

07-6 トレント（第25図）

山王鳥居から北東へ35mの地点である。杉林の間を選んで、長さ6.5m×幅1.0mのトレントを新たに設定した。拳大から人頭大の河原石が4個ほど集まるブロックが二ヶ所検出された。これらの河原石はIII層中に含まれており中世のものであった。大振りの河原石は尖った方を上にしており、建物の礎石として利用された可能性は低い。用途は不明である。III層中からはノウサギの右脛骨1点（第6章第4節）、鉄釘1点が出土している。

07-7 トレンチ（第27図）

日吉神社境内の参道を奥に入っていた右手側に、山王坊跡調査団によって発見された社殿跡がある。調査地点は昭和60年度調査で検出された「本殿跡」と推定されるSB04 碓石建物跡の東側に隣接した場所である。ここには大きな池状の窪地があって、一部、用水路1によって破壊されている。当初、池跡の可能性が指摘されていたので、南北7m×東西11mの範囲でトレンチを新たに設定した。十字に観察用の畔を設けて全体に掘り下げていった。表土を剥ぐとトレンチの北西側で炭化物ブロック、北東側で炭化物と焼土が検出されたが、新しい時期のものであった。また、北西側ではIV層上面で礫がまとまって検出されたが、これも新しい時期のものであった。

土層観察によれば、III層が大きく削りとられており、IV層面上に新しい時期の廃土が盛土状に堆積していることが判明した。このことから池状の掘り込みは新しい時期に掘られた廃棄土坑であることが判明した。I層から龍泉窯系青磁碗1点が出土している。混入したものであろう。

07-8 トレンチ（第28図）

「本殿跡」と推定されるSB04 碓石建物跡の南西側で、昭和61年度調査で確認されている「瑞垣跡」と推定された場所である。長さ3.0m×幅1.0mのトレンチを設定し、再確認の調査を行った。まずはI層を剥ぐと、調査後に埋めもどされた山砂が現れたので、さらにこれを除去すると河原石が列状に連なる石組列が検出された。次にトレンチの南壁沿いにサブトレンチを設けて掘り下げて、土層観察を行った。それによると、石組列の河原石が中世の整地層と考えられるIII層中に入り込んでいることが判明した。このことから盛土整地しながら石組列を配置していることが土層断面から確認された。また、サブトレンチ内のIII層中からは瓦質土器の火鉢或いは風炉1点、信楽焼とみられる瓷器系陶器（信楽塗）2点が出土しており、これら陶磁器の年代は14世紀後半～15世紀前半の範囲に含まれるものである。石組列の構築時期を表すものであろう。

07-9 トレンチ（第28図）

「本殿跡」と推定されるSB04 碓石建物跡の西側で、推定「瑞垣跡」の北端部に相当する場所である。長さ1.9m×幅1.4mのトレンチを設定し、再確認の調査を行った。厚く堆積していた過去の調査の廃土を取り除くと、石組列が検出された。ただし、石組列は北に伸びていかずに収束した状態であり、端部を示すものと考えられる。次にトレンチ南壁沿いにサブトレンチを設定し掘り下げて、土層観察を行った。その結果、やはり石組列の河原石がIII層中に入り込んでおり、盛土整地しながら石組列を配置していることが判明した。石組列の中に混じって、経筒蓋とみられる珠洲片2点が出土している。

07-10 トレンチ（第28図）

「本殿跡」と推定されるSB04 碓石建物跡の南東側の地点である。これは「本殿跡」の南西側で確認された推定「瑞垣跡」が対になって東側にも存在するのか確かめるためのものであった。まずはピンポールによるボーリング調査を行ったが、石列に当たらなかったために、杉林の間を縫って想定される地点に、長さ3.1m×幅0.8mのトレンチを設定した。調査の結果、予想どおり石組列は検出されなかつたが、III層中から中世の土器・陶磁器が多く出土している。龍泉窯系青磁碗（B2類）1点、京都系

かわらけ（手づくね）とみられる土師器皿1点、珠洲擂鉢（珠洲IV～V期）1点、瓦質土器の火鉢・風炉5点、ガラス片（第6章第4節）、鉄釘2点が出土している。このように中世遺物が非常に多く出土したが、推定された石組列は検出されなかった。

07-11 トレンチ（第28図）

山王鳥居から西へ13mの地点である。07-1トレンチ南側に隣接する。調査終盤になって、ピンポールによるボーリング調査が遺構（礎石）確認に有効であることが分かり、07-1トレンチの南側に隣接して礎石が確認された。本格的な調査は翌年度に実施されたが、ここで報告する（次の07-12トレンチも同様である）。70cm四方のトレンチを設けて調査した。その結果、Ⅲa層中から40cm×34cm規模の礎石1基（No.220）が検出された。また、Ⅲa層中から瓦質土器風炉の獸足部分1点が出土した。山王鳥居の西側一帯にも新たな礎石建物跡が存在するものとみられる。

07-12 トレンチ（第29図）

用水路1の西側において、ピンポールによるボーリング調査で礎石列を確認したので、長さ9m×幅1mのトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、Ⅲ層中から礎石5基（No.215～219）が並んで検出された。礎石列の軸線は社殿列の軸線に近似している。また、礎石中心間の距離はすべて約2m間隔であり、礎石建物の柱筋となるであろう。さらにトレンチ東壁でサブトレンチ1・2を設けて、土層を確認した。サブトレンチ1では、Ⅲ層をa・b層に分層できた。Ⅲa層を剥いた状態で礎石No.218がⅢb層面上で検出されている。一方、サブトレンチ2ではⅢb層面上で礎石No.216が検出された。礎石No.216は厚さ30cmほどもあるが、Ⅲb層底面まで礎石が達していた。やはりⅢ層を整地しながら、礎石を配置したことが判明した。ここでは少雨でも丘陵の谷間を流れてくる水によって、Ⅲ層面の礎石が水没してしまうような状態であった。また、礎石建物全体を確認するためにトレンチ周囲のボーリング調査を行ったが、周辺には多数の礎石が存在しているようで、礎石建物の把握が困難であった。

5. 小 結

平成19年度は山王坊遺跡の中心域とみなされている山王坊川の西側平坦地（B地区）で確認調査を行った。今回、これまで山王坊跡調査団によって確認された礎石建物跡等による社殿列及びこれに関連する遺構等を対象にした07-1・4・8・9トレンチの4ヶ所を設定した。また、これとは別に新規に設定した07-2・3・5・6・7・10・11・12トレンチの8ヶ所の調査を行った。調査成果をまとめると次のようになる。

07-8・9トレンチ調査の結果、これまでB地区で検出されていた社殿列が中世の遺構であることが改めて確認された。07-8・9トレンチでは、盛土整地しながら石組列を配置していることが明らかとなつた。Ⅲ層の整地層中からは14世紀後半～15世紀前半代の陶磁器が出土しており、構築時期も十三次遺跡の最盛期の時期に対応することが明らかである。

また、07-1・4トレンチでも、これまで確認されていた遺構が中世のものであることが判明した。特に07-1トレンチでは礎石建物と集石遺構の二時期の変遷があることが層位から明らかとなり、中世を少なくとも二時期に細分できることを示した。07-4トレンチでは河原石が2～3個の塊で列状に並ん

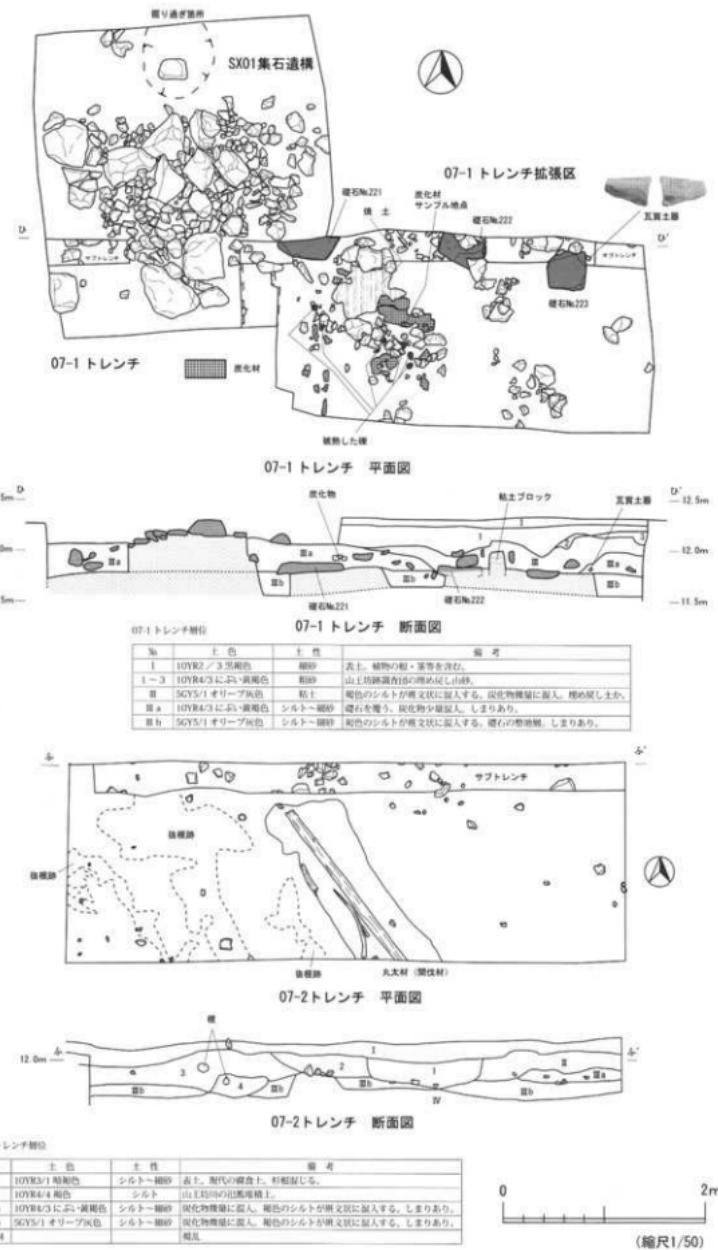
で検出されたが、推定されていた「玉垣跡又は大垣跡」と言えるかは、今後調査範囲を広げた上で遺構全体の中で評価しなければならないであろう。

一方、07-5・6トレンチでは、拳大から人頭大の河原石のブロックが中世の整地層から確認されたものの、遺構の性格までは明らかにできなかった。周囲にある07-2・3トレンチに至っては、杉林の間に設けたトレンチ調査のため、中世の遺構・遺物は全く確認できなかった。この調査区によって、山王坊遺跡では事前のボーリング調査が必要であることを痛感させられた。07-7トレンチでは、当初、池跡が想定されていたが、新しい時期の掘り込みであることが分かった。

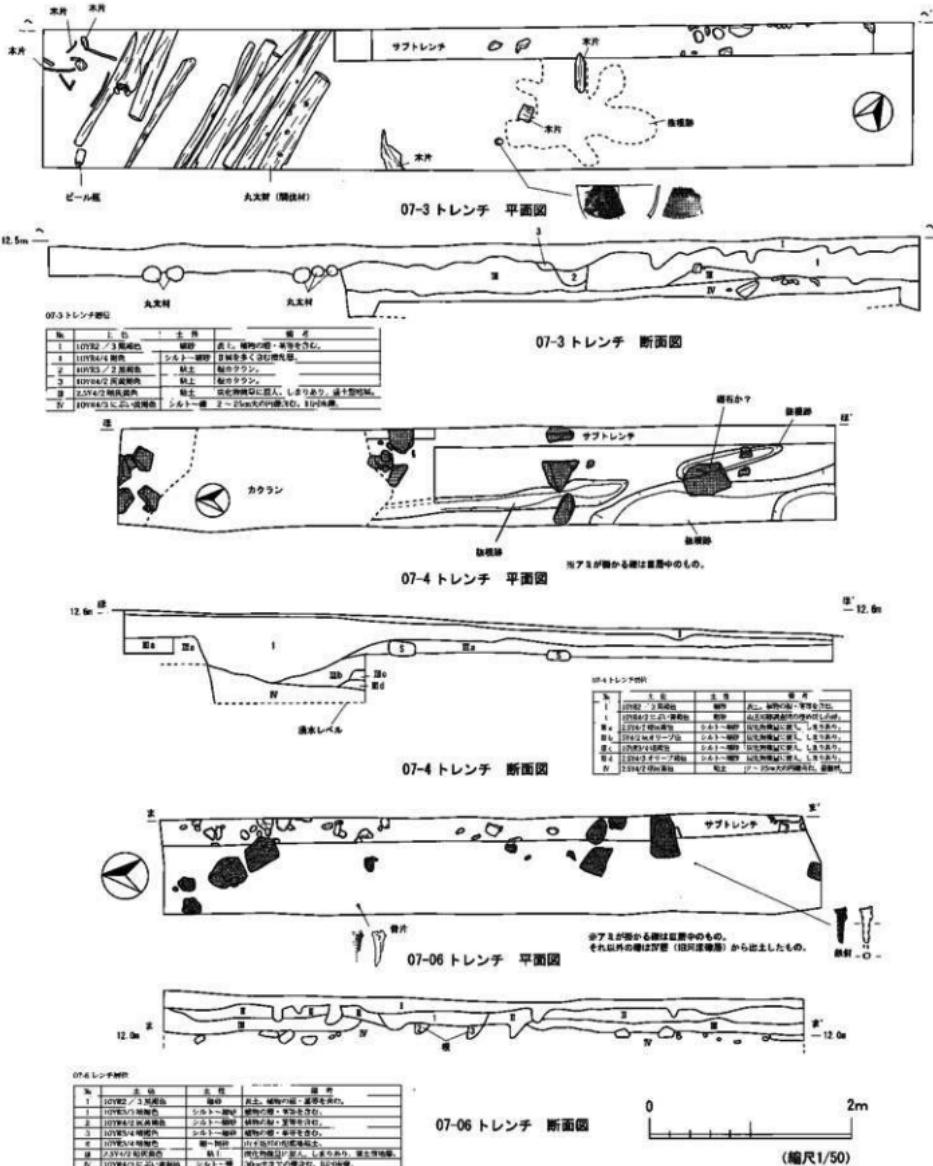
07-10トレンチでは、07-8トレンチに対応する形で推定される東側「瑞垣」を確認する目的で調査を行った。ここでは多数の陶磁器片が出土したが、「瑞垣」とされる石組列は確認されなかつた。周囲のボーリング調査を事前に行っていたが、やはり石組列を確認することはできず、今後の課題となつた。

調査の終盤になって、事前のボーリング調査が遺構（礎石）を確認する上で極めて有効であることが判明したため、山王坊全域のボーリング調査をした結果、新たに設けたのが07-11・12トレンチであった。07-11トレンチでは、礎石1基（礎石No.220）が検出された。07-1トレンチの礎石群とあわせて考えると、山王鳥居の西側一帯には新たな礎石建物跡の存在が推定される。07-12トレンチでは、用水路1西側において、礎石列（礎石No.215～219）が検出された。礎石列の軸線は社殿列の軸線に近似しており、新たな礎石建物跡の存在は確実である。ボーリング調査の結果では、周囲には礎や河原石が多量に広がっているような状態が想定されている。

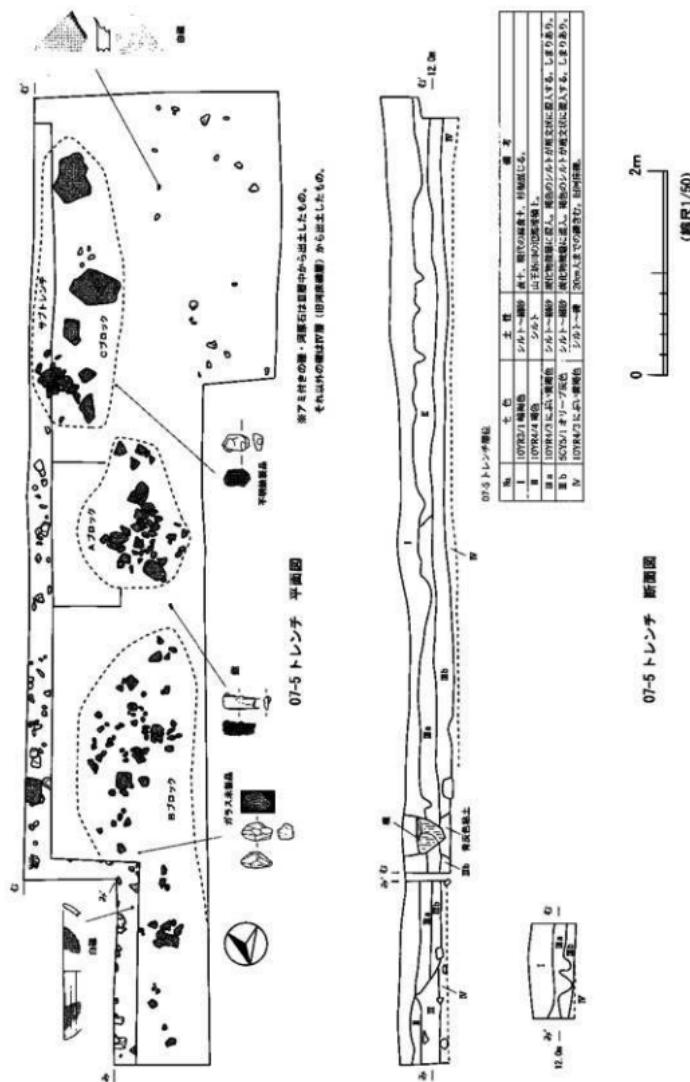
また、平成20年度の調査対象区となるC地区においてもボーリング調査を行っており、礎石跡の存在を確認することができたのであった。



第24図 07-1・2 ブレーン 平面図



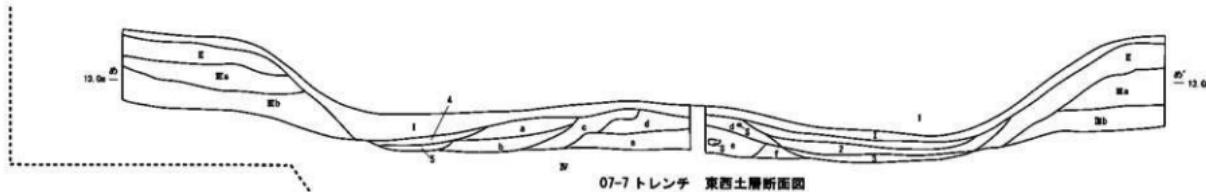
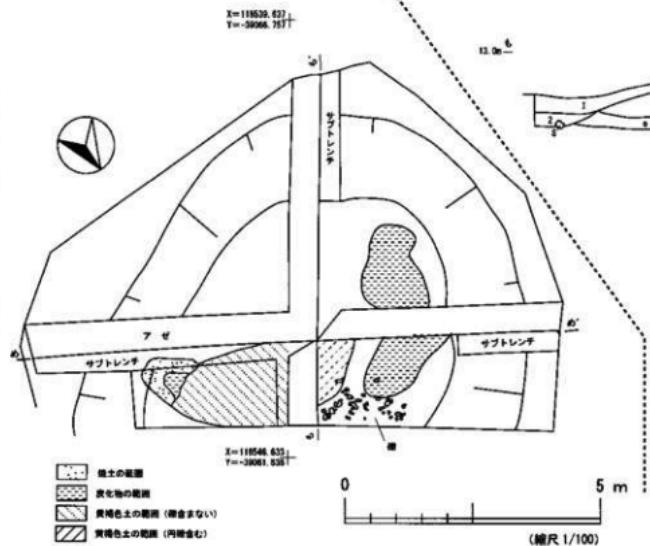
第25図 07-3・4・6 トレンチ 平面図・断面図



第26図 07-5トレンチ 平面図・断面図

第27図 07-7トレンチ 断面図

- 63 -



07-7トレンチ 南北土層断面図

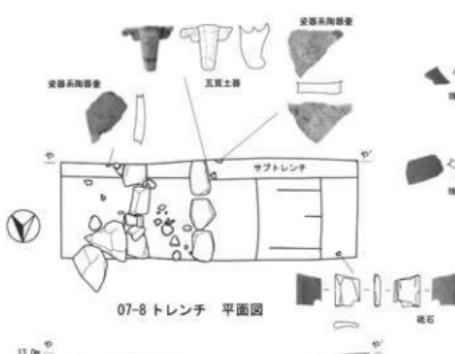
07-7トレンチ断面

No.	上 土	上 付	様 式
1	I 10Y2/2 黒褐色	シルト	古代の底食土、柱状節理による。
2	I 10Y3/4 黒褐色	シルト	小木川の底食土。
3	I 10Y3/4 暗褐色	シルト-粘土	底食物質に灰土。しまりあら。
4	I 10Y4/4 暗褐色	シルト-粘土	底食物質に灰土。しまりあら。
5	I 10Y4/4 暗褐色	シルト-粘土	底食物質に灰土。しまりあら。
6	I 10Y5/5 黑褐色	シルト-粘土	古代の底食土、底食物質に灰土。
a	I 10Y4/4 黑褐色	シルト-粘土	古代の底食土、底食物質に灰土。
b	I 10Y4/4 暗褐色	シルト-粘土	古代の底食土、底食物質に灰土。
C	I 10Y3/3 暗褐色	シルト-粘土	0.5~5cmの柱状節理。底食物質に灰土。現代の人为堆積物。
d	I 10Y4/4 暗褐色	シルト-粘土	0.5~2cmの柱状節理。底食物質に灰土。現代の人为堆積物。
e	I 10Y4/4 黑褐色	シルト	底食物質に灰土。現代の人为堆積物。
f	I 10Y5/5 黑褐色	シルト	現代の人为堆積物。
g	I 10Y4/4 に-2.5V4/2 黑褐色	シルト	古代の底食土、底食物質に灰土。
h	2.5V4/2 黑褐色	粘土	現代の人为堆積物。
1	I 10Y2 / 3 黑褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
2	I 10Y3/3 暗褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
3	I 10Y3/4 暗褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
4	2.5V3/3 オリーブ褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
5	I 10Y3/4 暗褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
6	I 10Y2 / 3 黑褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。
7	I 10Y4/4 に-2 黑褐色	シルト	しまりなし。自然堆積。

0

2m

(縮尺 1/50)

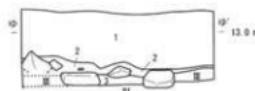


07-8 トレンチ 断面図

07-8 トレンチ 平面図



07-9 トレンチ 平面図

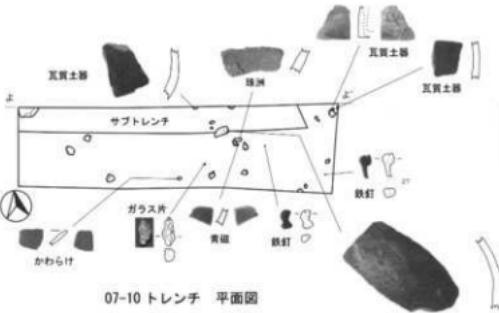


07-9 トレンチ 断面図

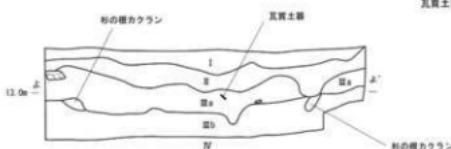
07-9 トレンチ断面

%	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	細砂	表土、褐色の粗粒土。柱状層に。
2	10YR2/4 明褐色	シルト	柱状層の下部。
3	10YR2/4 明褐色	シルト	柱状層の上部。
4	10YR4/2-3 黄褐色	粘土	(a) 灰褐色の塊状層。(b) 灰褐色の塊状層。
5	10YR4/1 黄褐色	粘土	石炭化物の埋入。
N	10YR4/6 黄褐色	シルト-粘土	炭化物塊に包入。しまりあり。張り替地層。
N'	10YR5/6 黄褐色	シルト-砂質	炭化物。

07-9 トレンチ 断面図



07-10 トレンチ 平面図



07-10 トレンチ 断面図

07-10 トレンチ断面

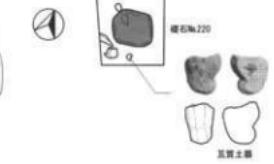
%	土色	土性	場所
I	10YR2/2 黒褐色	細砂	表土、褐色の粗粒土。柱状層に。
II	10YR4/4 明褐色	シルト	山毛竹の根の埋入層。
III a	10YR4/4 明褐色	シルト-砂質	炭化物塊に包入。しまりあり。
III b	10YR4/6 黄褐色	シルト-砂質	炭化物塊に包入。しまりあり。
IV	10YR5/6 黄褐色	シルト-砂質	炭化物。

07-11 トレンチ断面

%	土色	土性	場所
1	10YR2/2 黒褐色	細砂	表土、褐色の粗粒土。柱状層。
2	10YR4/1 黄褐色	シルト	山毛竹の根の埋入層。
3 a	10YR4/2-3 (炭化物)	シルト-砂質	炭化物塊に包入。

07-11 トレンチ 断面図

07-11 トレンチ断面



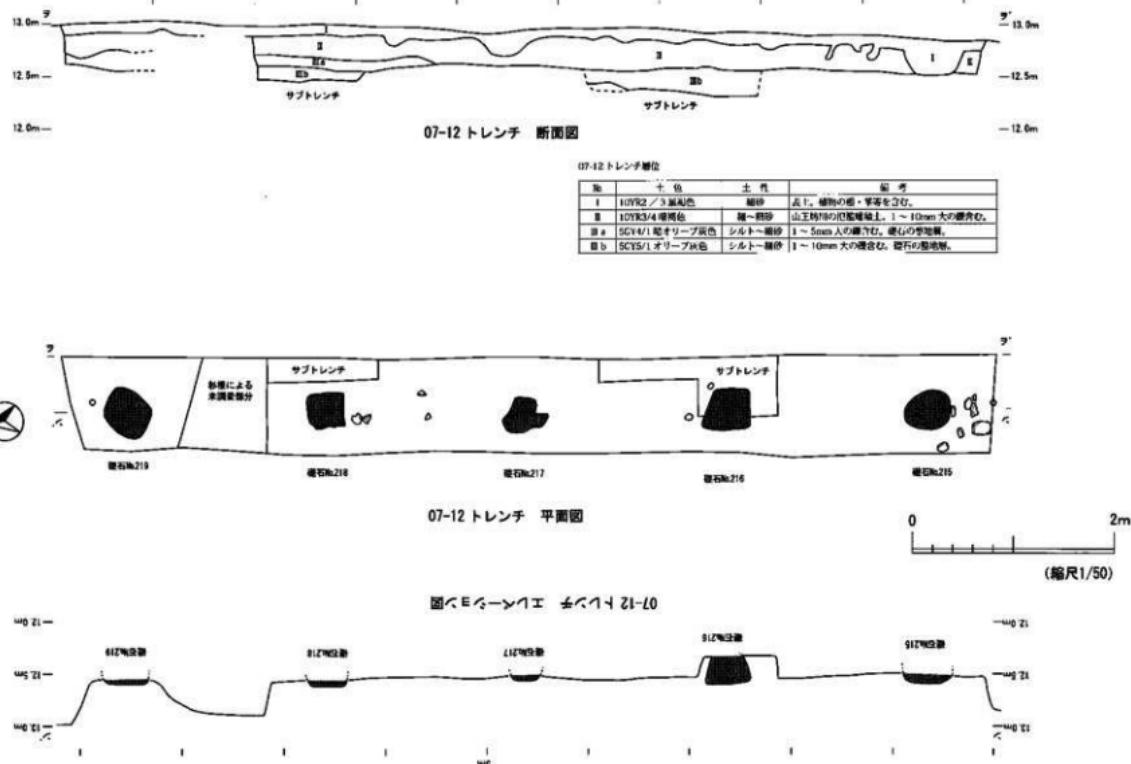
07-11 トレンチ 平面図

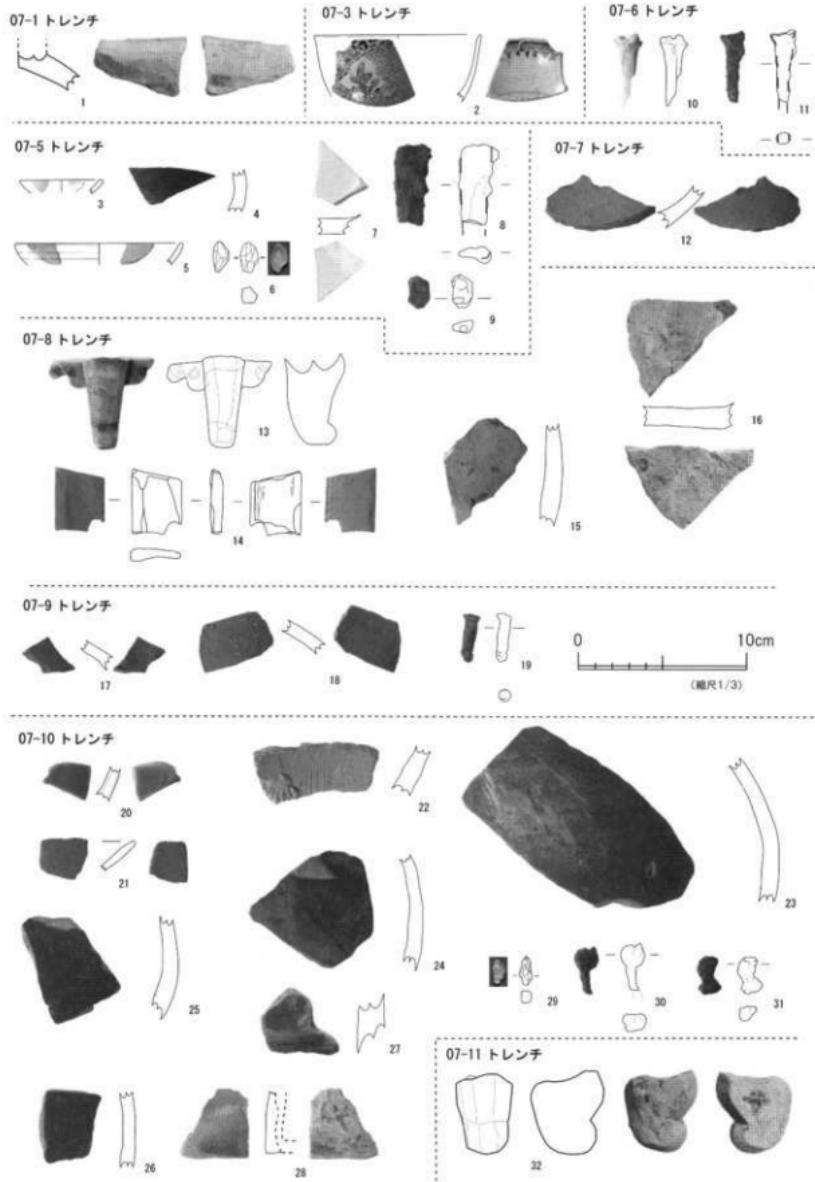


第28図 07-8～11トレンチ 平面図・断面図

第29図 07-12トレンチ 平面図・断面図・エレベーション図

- 65 -





第30図 2007年度(平成19年度)出土遺物

第4表 2007年度 出土遺物一覧表

番号	トレンチ名	層位	レベル	種類	器種	備考	整理番号
1	07-1 トレンチ	Ⅲ 1層	11.838	瓦質上器	風炉か	頸部、摩滅が激しい、出土層位はⅢ a層に対応する。	08-16
2	07-3 トレンチ	I 層	12.238	肥前系磁器	碗	明治以降	07-15
3	07-5 トレンチ	I 層	12.253	肥前系磁器	小皿	口縁内側に一条の染付に入る	07-04
4		I 層	12.332	肥前系陶器	壺	外面一鉄さび触	07-02
5		Ⅲ a層	10.990	白磁	皿	白磁D群、口縁部	07-30
6		Ⅲ a層	10.987	ガラス	—	端部一面取り加工痕あり、未製品か、重さ 1.8g	07-29
7		根カクラン	11.915	白磁	皿	白磁A群か、底部片	07-28
8		I 層	12.166	鉄製品	刀子か	端部欠損、重さ 11.6g	07-33
9		Ⅲ a層	11.960	鉄製品	不明	端部欠損、重さ 2.4g	07-27
10	07-6 トレンチ	Ⅲ層	12.073	骨	—	ノウサギ、右脛骨、遠位端部、分析結果は第6章第4節参照	07-13
11		Ⅲ層	12.089	鉄製品	釘	角釘、端部わずかに欠損、重さ 4.5g	07-14
12	07-7 トレンチ	I 層	12.724	青磁	碗	龍泉窯系D類、体部下半、焼成不良で胎土赤変	07-01
13	07-8 トレンチ	Ⅲ層	12.514	瓦質土器	火鉢・風炉	獸足部分、整地層より出土	07-07
14		Ⅲ層	12.926	石製品	砥石	巾砥、両端欠損	07-08
15		Ⅲ層	12.524	瓷器系陶器	壺	信楽焼、体部片	07-05
16		Ⅲ層	12.524	瓷器系陶器	壺	信楽焼、底部片	07-06
17	07-9 トレンチ	Ⅲ層	12.670	珠洲	経筒蓋か	外曲一回転カキ目調整、整地層より出土	07-10
18		Ⅲ層	11.749	珠洲	経筒蓋か	外面一回転カキ目調整、整地層より出土	07-09
19		Ⅲ層	12.555	鉄製品	釘	両端部欠損、整地層より出土、重さ 2.7g	07-11
20	07-10 トレンチ	Ⅲ a層	13.032	青磁	碗	龍泉窯系B2類、外面一大きく斜略な蓮弁文	07-21
21		Ⅲ a層	13.138	土師器	皿	手づくね成形、京都系かわらけ	07-23
22		Ⅲ a層	13.055	珠洲	擂鉢	珠洲IV～V期、内面 - 2.5cm で 8 条の鉗目あり	07-20
23		Ⅲ a層	12.966	瓦質土器	火鉢・風炉	内外面一黒色、2点接合、体部	07-18
24		廃土中	—	瓦質上器	火鉢・風炉	内外面一黒色、体部	07-34
25		Ⅲ a層	12.931	瓦質土器	火鉢・風炉	内外面一黒色、体部	07-16
26		Ⅲ a層	13.073	瓦質土器	火鉢・風炉	内外面一黒色、体部	07-26
27		Ⅲ a層	12.931	瓦質土器	火鉢・風炉	内外面一黒色	07-17
28		Ⅲ a層	13.022	瓦質土器	火鉢・風炉	表面が剥離	07-32
29		Ⅲ a層	13.078	ガラス	—	加工痕なし	07-22
30		Ⅲ a層	13.055	鉄製品	釘	端部欠損	07-25
31		Ⅲ a層	12.981	鉄製品	釘	端部欠損	07-24
32	07-11 トレンチ	Ⅲ a層	11.751	瓦質土器	風炉	獸足部分	08-15

第3節 平成20年度の調査（第12次）

1. 調査の目的と調査位置

今年度の調査対象地となるC地区は、昨年度の調査終了間際に行ったピンポールによるボーリング調査で、新たな礎石建物跡の存在が予想されていた場所である。C地区は日吉神社境内入口の西側部分にあたり、西側丘陵の山際に接した場所に位置している。C地区は境内地の杉林に覆われており、調査前の状況はほとんど手入れがなされておらず、間伐材もそのまま放置され鬱蒼とした状態であった。今回は、新たな礎石建物の確認を主目的として、調査を行った。調査方法としては、調査区一帯が杉林に覆われているため、調査区を面的に広げることが極めて困難であったので、主に礎石を確認するトレーニング調査に終始している。そのため、トレーニングによる調査区は最終的に46ヶ所(08-1~46トレーニング)に及んでいる。

またその他、昨年度のトレーニング調査（B地区）で、時間的な制約から調査が不十分であった07-1・11・12トレーニングの再調査及び記録作成を行った。さらに調査終了後にはトータルステーションを利用して山王坊遺跡における微細箇所の地形測量を行い、全体測量図に成果を反映させた。

2. 調査日誌

6月2日に発掘器材の準備・搬入を行う。調査対象区（C地区）の清掃作業（下草の刈払い・間伐材の撤去など）を開始した。9日までにC地区の清掃作業が終了した。なお、この間に清掃作業と並行してボーリング調査を行い、確認できた礎石上にピンポールを立てながら、建物全体を把握していく。その後、予めピンポールを指しておいた箇所を目安にして、トレーニングを設定した。10日には08-37・38トレーニングから調査を開始した。11日には08-1トレーニングの調査を開始した。16・17日には08-1トレーニングで礎石（SB01）を検出した。さらに調査区壁の精査を行った。18日には08-3トレーニングの調査を行い、SB01の広がりを把握していく。19日にはさらに広範囲にボーリング調査を行ったところ、用水路2の東側で新たな礎石建物（SB02）の存在を確認し、礎石にピンポールを立てていった。

7月1口には08-2・4・6トレーニングの調査を開始した。2日には用水路2の中にも礎石が確認され(08-20~25・27トレーニングの礎石No.72)、さらに東側に範囲を広げることにした。3日には、用水路2沿いにある08-5・7・18・19・26トレーニングの調査を開始した。また、08-1・2トレーニングの間にあって、杉林に覆われている礎石を個々に確認するトレーニング調査を開始した(08-9~17トレーニング)。4日には、SB01の東端を確認するため、08-27トレーニングの調査を開始した。

8日にはSB02の確認のため、08-28トレーニングの調査を開始した。11日までに08-28トレーニングの礎石を検出した。整地層に多量に被熱した礎石が混入しており、検出に時間がかかった。

15日にはSB02の北端を確認するため、用水路1沿いとその北側のボーリング調査を行い、08-29~35トレーニングの調査を開始した。さらに、隣接する07-1トレーニングの再確認調査を開始した。16日には07-12トレーニングの再確認調査を開始した。17日には平面図の実測作業を行うため、任意の基準点を設定し、建物跡全体が図化できるようにトータルステーションで杭打ち作業を行った。29日には礎石建物全体が入るように割り付けた平面図に図化する作業を開始した。31日には07-1トレーニングの精査・写真撮影をした。

8月1日には08-28トレンチSX02集石遺構の実測開始した。08-34・35トレンチの精査・写真撮影をした。6日には実測用基準点の国土座標を求めた。SB01の礎石エレベーション図を作成した。7日には08-1トレンチにサブトレンチ1を設けて掘削した。8日にはSB02礎石エレベーション図を作成した。トータルステーションでSB01・02礎石エレベーションポイントの座標点測量を行った。18日には調査区周辺の草刈り作業をした。19~21日には坂田泉氏・高島成佑氏・永井康雄氏(発掘調査指導委員)の現地指導を受けた。20日には08-1・2トレンチの土層断面図の作成を行った。21日にはSX02集石遺構の半裁作業を行った。22日には08-1・3・27トレンチの清掃・写真撮影を行った。25日には08-1~27・29~33トレンチの土層断面図の作成を行った。08-28トレンチの精査後に写真撮影を行った。26日には新たに確認した08-39~42トレンチの調査を行った。27日には新たに確認した08-43~46トレンチの調査を行った。28日には発掘器材を撤収し、作業を終了した。

10月17日には調査員指導委員による現地指導、18日には報告書作成会議が行われた。

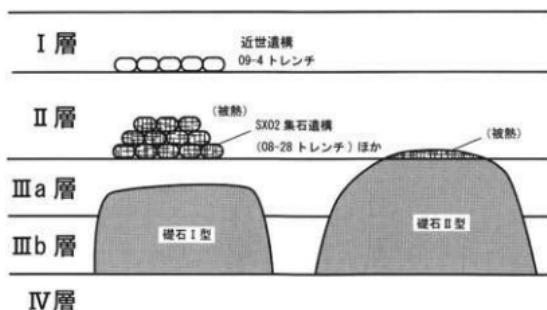
これを受けて、23日に報道機関に対して調査成果を公表する「記者報告会」を開催した。なお、青森県教育委員会と合同で、「福島城跡・山王坊遺跡の発掘調査成果報告会」として実施した。統いて26日には一般を対象とした合同の現地説明会を開催した。

11月3日には文化庁坂井秀弥主任調査官による視察があった。17日にはトレンチ調査区の埋めどし作業を開始した。28日にはすべての埋め戻しを終えて、今年度の調査を終了した。

なお、12月1日~8日までに西側丘陵地帯の測量を調査員2名(榎原・長利)で行った。

3. 基本層序

山王坊川沿いの平坦地(B・C・E・F・G地区)の基本層序については、「第3章第1節4遺跡の土層」の川村真一氏の論考に詳しいので、そちらに譲りたい。ここでは平成19~21年度調査で明らかとなつた考古学的知見及び自然科学分析の結果を踏まえて、検出遺構と層位の関係、及び年代について基本層序に沿つて述べる。



第31図 平成19~21年度調査 基本層序と遺構の関係模式図

- I層**：表土層で厚さ10cmほどである。杉・シダ植物等の腐食土層が堆積する。近世～近現代の遺物を包含する層である。
- II層**：山王坊川の低湿地堆積層である。山王坊川の氾濫・洪水によって堆積したと考えられる。遺物は全く含まれない無遺物層である。厚さは場所によって大きく異なっている。例えば山王坊川に近い09-6トレンチでは厚さ80cm、山王坊川から最も遠い09-16トレンチで厚さ20cmほどである。なお、09-4トレンチではII層上面において、近世以降の遺構が検出されており、II層上面が近世面に対応するものと考えられる。10YR4/4 暗褐色細砂。極細砂粒子間は褐色のシルト～泥で膠結されている。
- III層**：中世に帰属する層位で、大きく二分（III a・III b層）することが可能である。さらに水路中の覆土をIII c層としているが、ここではIII a層とIII b層について次に示す。
- III a層**：中世遺物を包含する堆積層である。出土陶磁器が示す年代は14世紀後半～15世紀中葉の年代幅で捉えられるが、15世紀中葉のもので占められている。III a層は、下層のIII b層起源の土層と考えられ、極めてIII b層に類似している。場所にもよるが厚さ10～20cmほどが堆積する。遺構との関係をみると、III a層上面において検出されたSX02集石遺構（08-28トレンチ）に伴う炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）によれば、その暦年較正年代は1300～1395ADであった（第6章第5節）。このように14世紀代の中世に帰属する年代が示されており、SX02集石遺構は中世遺構であることが明らかである。
- 次に検出された礎石と層位の関係をみると、III a層が礎石を被っている礎石I型が圧倒的に多く、III a層より上に礎石表面が露出する礎石II型がわずかに認められる。前者には礎石表面に被熱痕（赤変）ではなく、後者にはIII a層より上に露出した礎石表面部分が被熱しているという特徴がみられる。
- III b層**：中世の盛土整地層であり、礎石がIII b層の底面まで入り込んでいるものがある。礎石の設置の際にIII b層を掘り込むような痕跡がないことから、盛土整地しながら礎石を設置したと考えられる。また、礎石下に根石・小礎等を入れて地盤沈下を防ぐような工夫は全く見られなかった。なお、08-1トレンチでは厚さ30～40cmをはかる。SB01は仏堂が想定されており、丁寧な盛土整地が行われている。一方で、09-16トレンチでは厚さ10cmほどであり、建物によって整地層の厚さも大きく異なることが分かる。また、遺物は非常に少ない層位である。唯一、08-1トレンチのサブトレンチ1から龍泉窯系青磁碗D1類の口縁部片（14世紀後半～15世紀前葉）が出土しており、SB01の築造年代を示す貴重な遺物となっている。
- IV層**：地山層である。5Y5/1灰色～2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂である。場所によってはグライ化した青灰色を示す場所や、流路だったところでは河床礫の混入がみられる。

以上、平成19～21年にかけて行われた山王坊川西岸の平坦地における検出遺構と層位の関係を示した。これを図示したものが第31図である。このことから、少なくとも中世の遺構面をIII b層上面とIII a層上面の二時期で捉えることが可能である。前者は、盛土整地して礎石建物を造築した最初の段階である。一方後者は、一部礎石にも被熱を受けた痕跡が見受けられることから、礎石建物が火災で

1 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2

焼失したとみられること。（この時、III a 層で覆われた礎石には火災の影響を受けなかつたとみられる。）また、火事場整理の跡とみられる SX02 等の集石遺構がみられるなど、大きく火災を受けた段階の二時期に捉えることができる。

なお、この間に堆積した III a 層については中世の堆積層であるが、約 100 年近くの間に、厚さ 10 ~ 20 cm の堆積がみられることは、自然堆積というよりも中世においても小規模な山王坊川の氾濫が度々あって、III b 層起源の土壤が流れだして、これが厚く再堆積したものと考えられる。

また、II 層については中世山王坊が廃絶して以降、近世以降になって新たに山王坊に勧請されるまでの間に山王坊川が大規模に氾濫した様子を示すものであり、厚さ 20 ~ 80 cm の堆積がこれを示している。

4. 検出遺構と遺物

平成 20 年度の調査によって、新たに二棟の礎石建物跡（SB01・SB02）を検出した。この礎石建物跡については、翌平成 21 年度調査も継続した周辺の確認調査を行っている。そのため考古学的知見を加えた礎石建物全体の考察は、次節「第 4 章第 4 節 5. 小結」においてまとめて説明することにしたい。ここでは主なトレンチの調査成果のみを報告する。なお、個々の礎石の観察結果・詳細については、第 5 表の礎石観察表に譲りたい。

08-1 トレンチ（第 32・37 図）

調査地点の国土地標は X = 118440 ~ 118450, Y = -39145 ~ -39130 の範囲に当たる。トレンチは南北 11 m × 東西 10 m の範囲で、最も広い調査区である。調査前はトレンチ北西の山側が地滑りを起こしていた。III a 層まで除去すると、礎石が 21 基（礎石 No. 1 ~ 21）検出された。SB01 級石建物跡に関する礎石である。全体に大振りな礎石が多い。また、建物の重みによるものだろうか、礎石にヒビや割れが入っているものが多い（礎石 No. 2・7・15・16・20）。さらに礎石 No. 20 では礎石表面の一部が被熱により赤変していた。よく観察すると III a 層上面よりも高い位置に露出していた礎石の一部が被熱していた。それ以外の礎石は全く火の影響を受けていなかつた。08-1 トレンチの西端では、礎石建物の軸線に沿って南北方向に拳大～人頭大の礎石が列をなして検出された。これらの石列は山際が真近に接していることから、礎石建物の西側境界を示すものと考えられる。遺物ではトレンチ中央東側付近の III a 層中から、中国製天目碗 5 点（すべて同一個体）、瀬戸天目碗 1 点（古瀬戸後 I ・ II 期）、鉄釘 1 点が出土している。

次に礎石の設置過程や下層の堆積状況を把握するため、サブトレンチ 1・6・7 を設定した。

サブトレンチ 1 では礎石 No. 11 ~ 15 に掛かるように幅 25 cm × 長さ 10.2 m で設定した。盛土整地層である III b 層の厚さは 30 ~ 40 cm に及び、礎石の厚さもこれに対応していることが判明した。

III b 層はさらに 3 つに細分されるが、表層の III b1 層は青灰色シルト質の極細粒砂でしまりのある粘土質シルト層となっている。これは SB01 の周辺にしかない層位であり、化粧土のような役割を果たしたものと考えられる。III b1 層からは龍泉窯系青磁碗 D 1 類の口縁部片（14 世紀後半～15 世紀前葉）が出土しており、SB01 の築造年代を示す貴重な遺物となつてゐる。

サブトレンチ 6 は、礎石 No. 12・13 を挟んで、南北 1.3 m × 東西 1.5 m の範囲で設定した。サブトレ

ンチ 6 南西隅のⅢ b1 層上面から、SX07 炭化物ブロックと被熱した拳大の礫の集まりが検出された。

サブトレンチ 7 は、礎石 No. 9・10・14・15 を挟んで、南北 2.9 m × 東西 2.1 m の範囲で設定した。ここではⅢ b1 層中から SX06 炭化物ブロックが検出された。SX06 は長軸 1.7 m × 短軸 1 m の橢円形プランをなしている。これらは火を焚いた痕跡と考えられ、火を用いた清めの遺構ではないかと推測される。

08-2 トレント (第 32・39 図)

座標 X = 118432 ~ 118435, Y = -39143 ~ -39130 の範囲に当たる。トレントは長さ 13 m × 幅 90 cm の範囲で、杉林の間に縫って設定することができた。当初、SB01 礎石建物跡の南端礎石列と考えられた場所である（平成 21 年度調査でさらに南側に一間分の礎石列が検出されている）。ここでもⅢ a 層まで除去すると、礎石が 6 基（礎石 No. 22 ~ 28）検出された。礎石 No. 23・28 はⅢ a 層上面よりも高い位置に露出していた礎石の一部が被熱により赤変していた。それ以外の礎石は全く火の影響を受けていなかった。遺物では礎石 No. 27 上面のⅢ a 層中から白磁皿 D 群の底部片 1 点、隣接した場所から同じく白磁皿 D 群の口縁部片 1 点が出土している。

08-3 トレント (第 33・39 図)

座標 X = 118432 ~ 118435, Y = -39143 ~ -39130 の範囲に当たる。トレントは南北最長 14.5 m × 東西最大幅 5.5 m の範囲で、用水路 2 に沿って設定したため変形したトレントである。まずⅢ a 層まで除去して礎石の確認をした。Ⅲ a 層を除去して検出された礎石は No. 29・32・34・37・38 であった。その後、Ⅲ b 層まで埋まっていた礎石 No. 30・31・33・35・36・39・40 を新たに確認することができた。08-3 トレントでは全部で 12 基（礎石 No. 29 ~ 40）の礎石が検出されている。礎石 No. 38 については、長さ 1.2 m × 1 m の最大規模の礎石であったが、柱を支える礎石面が傾いて検出されている。建物の重みによる影響なのか、或いは地盤の緩さが影響したものとみられる。また、礎石 No. 32・34 は礎石の一部が被熱により赤変していた。それ以外の礎石は全く火の影響を受けていなかった。遺物ではⅢ a 層中から鉄釘 1 点が出土している。

次に礎石の設置過程を把握するため、礎石 No. 31 に掛けてサブトレント 3 を設定した。その結果、整地層であるⅢ b 層の厚さは 30 cm にも及び、礎石の厚さもこれに対応していることが分かった。さらに礎石はⅣ 層面上に設置されていることも明らかとなった。

08-4 トレント (第 32・40 図)

座標 X = 118440 ~ 118445, Y = -39132 ~ -39130 の範囲に当たる。08-1・3 トレントの間に位置する。トレントは南北 4.5 m × 東西 1.4 m で設定した。Ⅲ a 層まで除去すると礎石 3 基（礎石 No. 41 ~ 43）を検出した。

次に礎石の設置過程を把握するため、礎石 No. 42 に掛けてサブトレント 2 を設定した。その結果、Ⅲ b 層の厚さは 30 cm にも及び、礎石の厚さもこれに対応している。さらに礎石はⅣ 層にも深く達していることが判明した。遺物ではⅢ a 層中から白磁皿 D 群の口縁部片 1 点が出土している。

08-7 トレンチ（第33・41図）

座標X = 118431 ~ 11843、Y = -39123 ~ -39120の範囲に当たる。トレンチは長さ1.7m×幅80cmで設定した。礎石2基（礎石No.46・47）を検出した。礎石はIII C層とした植物遺体を多く含む細粒砂から検出され、IV層にまで達している。現在は陸地になっているが、かつては水路の中であったことが分かる。礎石は動いた様子ではなく、平滑な面を上にしている。

08-18 トレンチ（第33・41図）

座標X = 118437 ~ 118438、Y = -39122 ~ -39120の範囲に当たる。用水路2に接した場所である。トレンチは南北1.0m×東西1.6mで設定した。礎石2基（礎石No.61・62）を検出した。礎石はIII C層とした植物遺体を多く含む細粒砂から検出され、IV層にまで達している。礎石No.62は上面が尖っており、柱を置くには不向きな状態になっているので、少し傾いてしまった可能性も考えられる。遺物では礎石No.62の上面（III C1層）から出土した木製品がある。これは丸太から木取りされた建築部材の切れ端材と考えられ、長さ75cm、幅18cm、厚さ4cmほどもある。また、地点は不明となったがIII C層中から青磁壺片1点が出土している。

08-26 トレンチ（第33・40図）

座標X = 118448 ~ 118450、Y = -39128 ~ -39125の範囲に当たる。用水路2を截ち割るようにトレンチを南北70cm×東西3.5mで設定した。礎石2基（礎石No.70・71）を検出した。礎石はIII C層の植物遺体を多く含む細粒砂から検出され、IV層にまで達している。礎石No.70は大きく二つに割れて傾いている。用水路の掘削に際して動かされたものであろうか。III C層中からは丸太材のほかに、板材が出土した。板材は長さ24cm、幅20cm、厚さ5cmをはかる。先端部を手斧で加工した方を下に向けており、板材が直立した状態で検出された。これは十三漁遺跡で検出される井戸の側板にも類似するが、水路の護岸に利用されたものかもしれない。

08-27 トレンチ（第33・34・38図）

座標X = 118439 ~ 118442、Y = -39126 ~ -39111の範囲に当たる。トレンチを南北1.2m×東西15mで設定した。ますトレンチ東側のII層中から、拳大から人頭大の礫や河原石が多く出土した。明治24年作成の相内村「字岩井」地籍図によると、この付近の地目は田になっている。畔のような地形が残っているのはそのためであろう。また、地表面が周辺よりも若干低くなってしまい、田として利用されていたのは明らかであった。その際に礫や河原石が掘り起こされたものと考えられる。

ここからは礎石8基（礎石No.72～79）が一列に検出されているが、礎石の検出層位や高さが大きく異なっている。III a層を除去して検出されたのはトレンチ東側の礎石No.75～79であり、これらはIII b層中に入り込んでいる。ただし、トレンチ北壁にサブトレンチ4・5を設けて下層の堆積状況を確認したところ、SB01 磂石建物跡（08-1・4・3トレンチ）の地区で検出されたIII b 1層に対応する層はなく、III b2・III b3層に対応する層が厚さ25cmほど堆積していた。

一方、トレンチ西側で検出された礎石No.72～74は、植物遺体を多く含む細粒砂のIII C層中から

検出され、IV層面に達している。これらの礎石はIV層面上に直接据え置かれたものと考えられる。なお、III C層上にあるIII a'層は用水路2に沿って検出されており、III a層起源の層位である。

礎石は一列にまっすぐ並んでいるものの、礎石No.75～79の標高は約11.8mで、礎石No.72～74の標高は約11.3mであり、両者の比高差は50cmもある。特に礎石No.74と礎石No.75の間で比高差に大きな違いがみられる。礎石No.74は植物遺体を多く含むIII C層が上に厚く堆積しているのに対して、東側の礎石No.75ではIII C層が全くみられない。礎石No.74と礎石No.75の間は、樹木が邪魔して調査することができなかったが、この間でIII C層が消滅するはずである。恐らく中世の水路の立ち上がりが、この間にあるものと考えられる。このことから用水路2の上幅が約3m、中世段階の水路の上幅が6.4mをはかり、約二倍強もあった可能性が考えられる。

ちなみに08-1・4・3・27トレーニングで、一列に並ぶ礎石を掛けて土層観察を行っている（第38図）。これによると、礎石No.11～15・42・31についても標高11.8～11.9mであり、礎石No.75～79とほとんど変化はみられないが、水路に設けられた礎石No.72～74だけが標高11.3m前後より低い位置にあって、IV層面に設置されている状況が明らかとなった。こうした点は、水路沿いで検出された礎石についても同じ事が言える。

また、08-28トレーニング等で新たにSB02礎石建物が検出されたことから、08-27トレーニングで検出された礎石列（礎石No.75～78）については、渡廊や埠に伴う礎石である可能性が考えられる。

08-28トレーニング（第34・39図）

座標X=118424～118438、Y=-39115～-39103の範囲に当たる。トレーニングを南北最大15m×東西10mの範囲で、用水路1に沿って設定したため台形状のトレーニングである。また、トレーニングの中にある杉や漆の木々を外して調査を行った。III a層まで除去すると、礎石28基（礎石No.80～107）が検出された。そのうち礎石No.95はSX02集石遺構下のIII a層除去後に検出されている（詳細は後述する）。SB02礎石建物跡に関する礎石である。SB01に比べて小振りな礎石が多い。このうち礎石No.89・91・96・100・101・104はIII a層上面よりも高い位置に露出していた礎石の一部が被熱によって赤変していた。それ以外の礎石は全く火の影響を受けていなかった。しかし、礎石が検出されたIII b層上面には、トレーニング全体に渡って拳大の角礎が多く量に検出されており、しかもそのほとんどすべてが被熱している状況であった。礎石の下に埋め込むような、いわゆる根石のようなあり方ではなかった。

被熱した拳大の角礎はIII b層中に深く入りこんでいる状況が確認できることから、地盤を固めるために、礎石の設置に合わせて、整地層中にすでに被熱していた角礎を混ぜ込んだと理解した方が自然であろう。別の見方をすれば、山王坊のどこかですでに焼失した建物の置き石を地盤固めに再利用したと考えられるだろう。

遺物では、礎石No.89周辺のIII a層中から龍泉窯系青磁碗片1点が出土しており、二次被熱を受けている。また、礎石No.95周辺のIII a層中から同じく龍泉窯系青磁碗片1点が出土している。

なお、このトレーニングでは下層の堆積状況を確認する調査は行っていない。

次に同トレーニングで検出されたSX02集石遺構について述べる。

SX02 集石遺構（第 34・40・42 図）

08 – 28 トレンチ中央やや南よりに、南北 2.5 m × 東西 2 m の範囲で被熱した拳大の角礫の集合ブロックを検出した。Ⅲ 層の掘削中から角礫が見え始めたが、Ⅲ a 層上面で検出している。

集石下に礎石があると考えられたので、SX02 の北側半分を掘削して土層観察しながら、礎石確認を行った。その結果、礎石 No. 95 はⅢ a 層を剥いだ後に検出され、Ⅲ b 層に深く入り込んでいることが判明した。

また、Ⅲ b 層中で検出された被熱した角礫と、SX02 の被熱した角礫とはⅢ a 層を挟んで明らかに層位を異にすること、すなわち時期差のあることが判明した。さらに SX02 の集石に混じってⅢ a 層直上から炭化材が検出されている。この炭化材を AMS 測定による放射性炭素年代測定を行ったところ、示された曆年較正年代は 1300 ~ 1395AD であり（第 6 章第 5 節）、14 世紀代に伐採された材であるということが分かった。

SX02 集石遺構の性格については屋根の置き石に利用されていた角礫が、建物の火災とともに焼け落ちて、その後の火事場整理によって、廃棄されたというようく推定できる。SX02 に混じって検出された炭化材はその時建てられていた建築部材の可能性が高いので、建物の使用期間を考慮に入れても、廃絶時期は 15 世紀前半代でも矛盾はないであろう。厳密な曆年年代までは出せないまでも、中世に廃絶したことは間違いない。

08 – 34 トレンチ（第 34・40 図）

座標 X = 118435 ~ 118440、Y = -39104 ~ -39103 の範囲に当たる。SB02 が用水路 1 によって南北に分断されているが、その北側にあたる。南北 5 m × 東西幅 80 cm の範囲で、トレンチを設定した。Ⅲ a 層まで除去すると、礎石が 3 基（礎石 No. 113 ~ 115）のほか、拳大から人頭大の河原石が多数検出された。これらはやはりⅢ b 層中に入り込んでいる。礎石は SB02 に関するもので、被熱を受けたものはない。

08 – 35 トレンチ（第 34・40 図）

座標 X = 118439 ~ 118443、Y = -39110 ~ -39106 の範囲に当たる。SB02 が用水路 1 によって南北に分断されているが、その北側にあたる。南北 2.5 m × 東西 3 m 範囲で、杉林の間を縫うように三角形状にトレンチを設定した。Ⅲ a 層まで除去すると、礎石が 3 基（礎石 No. 116 ~ 118）のほか、拳大から人頭大の角礫が検出された。これらはⅢ b 層中に入り込んでいる。また、角礫には被熱を受けたものが多いが、礎石は全く火を受けていなかった。

<その他のトレンチについて>

その他のトレンチについては、ある程度トレンチ調査の成果をまとめた形で概要報告に留めておく。

08-5・6 トレンチ（第32・37・41図）

座標 X = 118445 ~ 118450, Y = -39131 ~ -39129 の範囲に当たる。08-1トレンチと用水路2の間に設定した。それぞれ5トレンチ（礎石No.44）、6トレンチ（礎石No.45）を検出した。これらの礎石はIIIa層まで除去して検出された。礎石は火を受けた様子はみられない。なお、5トレンチのIIIa層中から瀬戸の天目碗片1点が出土している。

08-8 トレンチ（第33・41図）

座標 X = 118432 ~ 118433, Y = -39126 ~ -39124 に当たる。杉が邪魔しており、半裁して礎石（礎石No.48）を確認した。礎石No.48はIIIa層を除去して検出されている。礎石は火を受けた様子はみられない。

08-9～17 トレンチ（第32・41図）

座標 X = 118435 ~ 118440, Y = -39142 ~ -39131 の範囲に当たる。08-1・2トレンチの間に挟まれた場所で、杉林が密集しており、極めて調査が困難であった。そのため壺掘りのような形でトレンチを設定せざるを得なかった。また、礎石No.188・189については、ピンポールで礎石確認はできたものの、礎石が杉の真下になって調査が不可能であった。それぞれ9トレンチ（礎石No.49）、10トレンチ（礎石No.50）、11トレンチ（礎石No.51）、12トレンチ（礎石No.52・53）、13トレンチ（礎石No.54）、14トレンチ（礎石No.55）、15トレンチ（礎石No.56）、16トレンチ（礎石No.57～59）、17トレンチ（礎石No.60）である。礎石はIIIa層まで除去して検出されている。このうち、礎石No.53だけが被熱を受け赤変しており、それ以外はすべて火を受けた様子はなかった。

08-20～25 トレンチ（第33図）

座標 X = 118434 ~ 118448, Y = -39126 ~ -39120 の範囲に当たる。用水路2の中で発見されたSB01の礎石群である。それぞれ20トレンチ（礎石No.64）、21トレンチ（礎石No.65）、22トレンチ（礎石No.66）、23トレンチ（礎石No.67）、24トレンチ（礎石No.68）、25トレンチ（礎石No.69）である。湧水のため、土層観察は行えなかったが、礎石はすべてIV層中に達していた。ただし、礎石が傾いたり、或いは一部動かされている礎石もあった。これらは後世の用水路掘削で動かされたものと考えられるが、大振りな礎石であったために消失することはなかった。

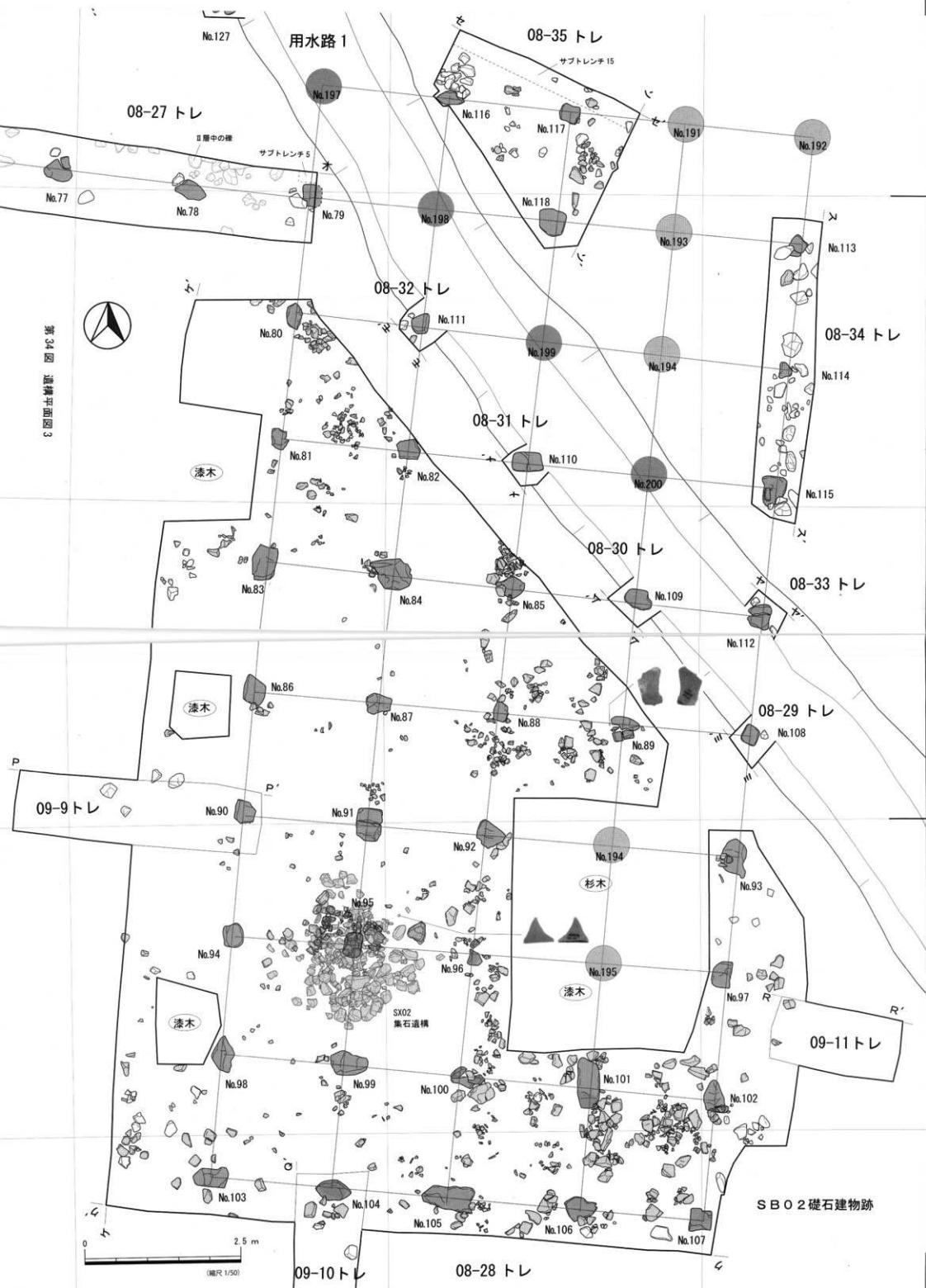
08-29～33 トレンチ（第34・41図）

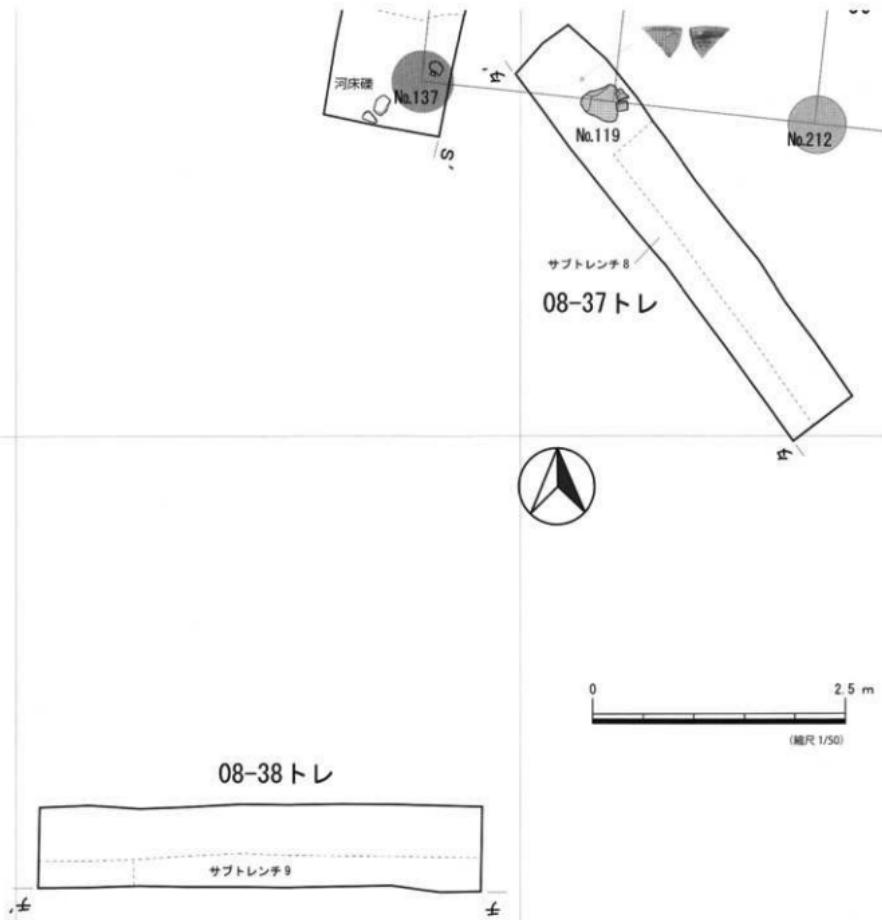
座標 X = 118431 ~ 118439, Y = -39110 ~ -39104 の範囲に当たる。用水路1の縁辺沿いで発見されたSB02の礎石群である。それぞれ60cm四方のトレンチを設けて、礎石を確認している。それぞれ29トレンチ（礎石No.108）、30トレンチ（礎石No.109）、31トレンチ（礎石No.110）、32トレンチ（礎石No.111）、33トレンチ（礎石No.112）である。なお、用水路1によって消失してしまったと考えられる地点が4つ想定されている（礎石No.197～200）。

第22図 遊歩平面図









第35図 遺構平面図4

08-36トレンチ (第41・45図)

座標 X = 118430 ~ 118431、Y = -39149 ~ -39148 の範囲に当たる。一部、翌年調査することになる 09-22トレンチと重複している。当初、礎石と想定して調査したが、III a 層を除去すると挙大の角砾のブロックが検出された。また、III a 層中から龍泉窯系青磁碗 D2 類の口縁部 1 点が出土している。

08-37・38トレンチ (第35・40図)

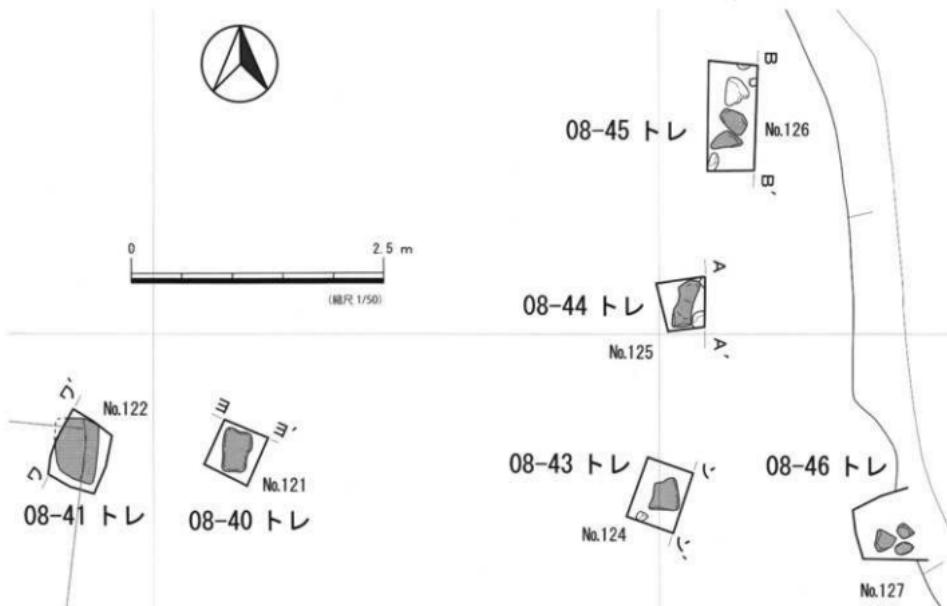
座標 X = 118405 ~ 118415、Y = -39155 ~ -39146 の範囲に当たる。当初、盛土状の地形がみ

られた。墓域が想定されたので、確認のためのトレンチを設定した。08-37トレンチでは長さ4.5m×幅70cm、08-38トレンチでは長さ4.4m×幅80cmのトレンチをそれぞれ設定した。

調査の結果、盛土状の高まりは近現代のかさ上げによるものであることが判明した。また、08-37トレンチでは、IIIa層を除去した段階で礎石1基（礎石No.119）を検出した。当初は不明な礎石であったが、翌年度の調査でSB03の一部であることが判明した。遺物ではIIIa層中から瀬戸の縁軸小皿片1点が出土している。

08-40～46トレンチ（第36・41図）

座標X=118443～118448、Y=-39124～-39112の範囲に当たる。08-27トレンチで検出された礎石列はSB01とSB02を結ぶものであり、堀或いは渡廊の可能性が考えられたので、調査終盤にボーリング調査を行って、礎石が想定される地点の調査を行った。08-41・42トレンチの礎石No.122・123については、SB01に伴う礎石であることが判明した。08-42トレンチでは、植物遺体を含むIIIc層の堆積がみられることから、中世の水路内に設置された礎石（No.123）であることも明らかとなった。08-40・43・46トレンチの礎石（No.121・124・127）については、08-27トレンチの礎石（No.75・77・78）に対応しているかのように見えるが、礎石間の距離が3.2mもあって離れて過ぎていること。また、SB02の建物に渡廊が取り付きにくい礎石配置になっていることから、今のところSB01とSB02の間には渡廊で結ばれていた可能性は低いと思われる。なお、08-27トレンチ南側でもボーリング調査で礎石確認を行ったが、今のところ礎石がある可能性は低い。



第36図 遺構平面図5

第5表 碳石観察表

トレチ名	碳石 番号	規模(cm) 東西 南北		検出 (赤変)	被熱 (赤変)	備考
		東西	南北			
08-1 トレ	No 1	84	45	完掘	なし	
	No 2	50	28	完掘	なし	建物の重みによるものか、碳石が二つに割れている。
	No 3	55	47	完掘	なし	
	No 4	55	35	完掘	なし	
	No 5	55	32	完掘	なし	
	No 6	30	55	完掘	なし	
	No 7	60	40	完掘	なし	碳石表面に多数の細かいヒビ割れが入っている。
	No 8	57	60	完掘	なし	
	No 9	65	52	完掘	なし	
	No 10	80	50	完掘	なし	
	No 11	35	45	完掘	なし	
	No 12	50	40	完掘	なし	
	No 13	40	80	完掘	なし	
	No 14	55	90	完掘	なし	
	No 15	60	50	完掘	なし	碳石の内側端部に大きな割れが南北方向に一筋入る。
	No 16	37	50	完掘	なし	建物の重みによるものか、建物に多くのヒビ割れがあり、六つほどに割れている。
	No 17	27	46	完掘	なし	
	No 18	37	48	完掘	なし	
	No 19	50	60	完掘	なし	
	No 20	74	56	完掘	有り	建物の重みによるものか、碳石が二つに割れている。また、Ⅲa層上面より高い位置にある碳石表面の一部が被熱している。
	No 21	70	37	完掘	なし	
08-2 トレ	No 22	21	25	完掘	なし	
	No 23	45	60	完掘	有り	Ⅲa層上面より高い位置にある碳石表面の一部が被熱している。
	No 24	95	50	完掘	なし	
	No 25	80	52	完掘	なし	
	No 26	52	60	完掘	なし	建物の重みによるものか、中央部の東北方に割れがあり、二つに分断されている。
	No 27	90	53	1/2	なし	建物の重みによるものか、中央部の東北方に割れがあり、二つに分断される。碳石表面部分がⅢb層まで埋まる。また、碳石表面部分のⅢa層中より、白磁柱D群が出土している。
	No 28	45	52	完掘	有り	Ⅲa層よりも上位にみられる碳石部分が被熱を受け、赤変している。建物の碳石配列を見ると、碳石として利用されていない可能性が高い。
	No 29	55	65	完掘	なし	
08-3 トレ	No 30	22	27	完掘	なし	
	No 31	52	65	完掘	なし	建行全体がⅢb層まで埋まる。建物の重みによるものか、碳石が二つに分断されている。
	No 32	70	43	完掘	有り	建行表面の一部が赤変して、割れが多く入る。
	No 33	40	60	完掘	なし	建行全体がⅢb層まで埋まる。
	No 34	56	52	完掘	有り	建行表面がわずかに赤変しているように見える。
	No 35	50	52	完掘	なし	建行全体がⅢb層まで埋まる。
	No 36	—	40	2/3	なし	建行全体がⅢb層まで埋まる。
	No 37	100	55	完掘	なし	
	No 38	123	100	完掘	なし	最大規模の碳石
	No 39	46	40	完掘	なし	碳石全体がⅢb層まで埋まる。建物の重みによるものか、碳石が二つに割れている。
08-4 トレ	No 40	57	55	完掘	なし	碳石全体がⅢb層まで埋まる。建物の重みによるものか、碳石が二つに割れている。
	No 41	52	30	完掘	なし	
	No 42	68	62	完掘	なし	
08-5 トレ	No 43	50	36	完掘	なし	
	No 44	38	52	完掘	なし	
08-6 トレ	No 45	50	73	完掘	なし	
08-7 トレ	No 46	57	55	完掘	なし	
08-8 トレ	No 47	42	45	完掘	なし	
08-9 トレ	No 48	—	37	1/2	なし	
08-10 トレ	No 49	60	50	完掘	なし	
08-11 トレ	No 50	82	72	完掘	なし	
08-12 トレ	No 51	45	68	完掘	なし	
	No 52	40	63	完掘	なし	碳石に無数のヒビ割れが入る。赤変はしていない。
	No 53	33	55	完掘	有り	碳石表面の海部が一部赤変して、ヒビ割れがある。

トレンチ名	礫石番号	規模(cm) 東西 南北	検出	被熱 (赤変)	備考
08-13 トレ	No 54	55 37	完掘	なし	
08-14 トレ	No 55	50 40	完掘	なし	
08-15 トレ	No 56	— 57	1/2	なし	
08-16 トレ	No 57	57 72	完掘	なし	
	No 58	37 42	完掘	なし	
	No 59	33 47	完掘	なし	建物の重みによるものか、礫石が3つに割れている。
08-17 トレ	No 60	40 58	完掘	なし	
08-18 トレ	No 61	40 70	完掘	なし	礫石が傾いている。
	No 62	30 45	完掘	なし	
08-19 トレ	No 63	30 33	完掘	なし	
08-20 トレ	No 64	40 50	完掘	なし	礫石頭部がやや丸みを帯びている。
08-21 トレ	No 65	55 —	完掘	なし	建物の重みによるものか、礫石が3つに割れている。
08-22 トレ	No 66	36 66	完掘	なし	礫石が傾いており、礫石の位置もやや動いている。
08-23 トレ	No 67	55 58	完掘	なし	
08-24 トレ	No 68	48 40	完掘	なし	礫石が傾いている。
08-25 トレ	No 69	53 65	完掘	なし	
08-26 トレ	No 70	50 74	完掘	なし	礫石が2つに割れ、大きく傾いている。
	No 71	50 46	完掘	なし	
08-27 トレ	No 72	66 75	完掘	なし	
	No 73	67 100	完掘	なし	
	No 74	42 52	完掘	なし	
	No 75	35 35	完掘	なし	
	No 76	30 35	完掘	なし	
	No 77	45 40	完掘	なし	建物の重みによるものか、礫石が2つに割れている。
	No 78	50 30	完掘	なし	
	No 79	— 35	1/2	なし	
08-28 トレ	No 80	25 42	完掘	なし	
	No 81	28 32	完掘	なし	
	No 82	40 32	完掘	なし	
	No 83	39 55	完掘	なし	
	No 84	70 50	完掘	なし	
	No 85	47 35	完掘	なし	
	No 86	35 45	完掘	なし	
	No 87	40 34	完掘	なし	
	No 88	24 30	完掘	なし	
	No 89	47 40	完掘	有り	建物の重みによるものか、礫石が4つに割れている。そのうちの2ヶが赤変している。
	No 90	33 37	完掘	なし	
	No 91	40 53	完掘	有り	建物の重みによるものか、中央部の東西方向に割れがあり、二つに分断されている。礫石表面が一部赤変している。
	No 92	45 45	完掘	なし	
	No 93	40 64	完掘	なし	
	No 94	32 40	完掘	なし	
	No 95	28 40	完掘	なし	SX02 の東石及びⅢa 層を除去すると、礫石が検出された。
	No 96	20 —	完掘	有り	礫石が2つに割れている。礫石表面が一部赤変している。
	No 97	30 42	完掘	なし	
	No 98	35 58	完掘	なし	
	No 99	60 40	完掘	なし	
	No 100	55 27	完掘	有り	礫石が3つに割れている。礫石の一部が赤変している。
	No 101	35 80	完掘	有り	礫石の一部が赤変している。
	No 102	33 50	完掘	なし	
	No 103	55 33	完掘	なし	
	No 104	58 33	完掘	有り	礫石の一部が赤変している。
	No 105	80 40	完掘	なし	
	No 106	55 40	完掘	なし	
	No 107	35 37	完掘	なし	
08-29 トレ	No 108	26 29	完掘	なし	

トレチ名	礫石 番号	規模 東西	規格 南北	検出	被熱 (赤変)	備考
08-30 トレ	No 109	45	31	完掘	なし	
08-31 トレ	No 110	48	31	完掘	なし	
08-32 トレ	No 111	27	33	完掘	なし	
08-33 トレ	No 112	34	41	完掘	なし	礫物の重みによるものか、礫石が2つに割れている。
08-34 トレ	No 113	25	30	完掘	なし	礫物の重みによるものか、礫石が2つに割れている。
	No 114	20	25	完掘	なし	
	No 115	40	50	完掘	なし	
08-35 トレ	No 116	45	23	完掘	なし	
	No 117	33	28	完掘	なし	
	No 118	41	43	完掘	なし	
08-37 トレ	No 119	38	37	完掘	なし	
08-39 トレ	No 120	—	—	1/3	なし	移動で正確できない。水路跡の複数直角体を取り除くと隕石が検出された。
08-40 トレ	No 121	30	42	完掘	なし	
08-41 トレ	No 122	40	60	4/5	なし	隕石が大きく傾く。
08-42 トレ	No 123	70	—	1/2	なし	
08-43 トレ	No 124	26	32	完掘	なし	
08-44 トレ	No 125	17	48	完掘	なし	
08-45 トレ	No 126	—	—	完掘	なし	横・対 (前側) の縦で隕石をなすものと思われる。
08-46 トレ	No 127	—	—	完掘	なし	三側・対 (前側) の縦で隕石をなすものと思われる。
09-12 トレ	No 128	55	50	完掘	なし	
	No 129	40	60	完掘	なし	
	No 130	90	50	完掘	なし	
	No 131	60	—	完掘	なし	
09-13 トレ	No 132	46	37	完掘	なし	
	No 133	34	65	完掘	なし	
09-14 トレ	No 134	32	40	完掘	なし	
	No 135	—	—	—	—	SX04 集石道構の下層に隕石が存在するものと考えられる。
	No 136	98	57	完掘	なし	
	No 137	—	—	—	—	隕石及び採取り難も確認できなかった。
09-15 トレ	No 138	—	38	1/2	なし	
	No 139	—	42	1/2	なし	
09-16 トレ 拡張区	No 140	—	59	1/2	なし	
	No 141	—	60	1/2	なし	
	No 142	—	44	1/2	なし	
	No 143	—	67	1/2	なし	
	No 144	—	26	1/2	なし	東石
	No 145	—	47	1/2	なし	
	No 146	—	27	1/2	なし	東石
	No 147	—	65	1/2	なし	
	No 148	—	16	1/2	なし	東石
	No 149	—	51	1/2	なし	
	No 150	31	50	完掘	なし	東石
	No 151	—	30	1/2	なし	
	No 152	—	43	1/2	なし	
09-16 トレ 拡張区	No 153	—	—	1/3	なし	隕石は SX03 集石道構の下層にあり、Ⅲa 横を取り除くと、隕石を確認することができた。
09-17 トレ	No 154	25	—	1/2	なし	
09-18 トレ	No 155	—	60	1/2	なし	
09-19 トレ	No 156	45	67	完掘	なし	
09-20 トレ	No 157	—	34	1/2	なし	
	No 158	—	52	1/2	なし	
	No 159	—	50	1/2	なし	
	No 160	—	—	—	—	隕石及び後取り難も確認できなかった。
	No 161	—	51	1/2	なし	